
縁の旅人

彩BOC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

縁の旅人

【Nコード】

N3314D

【作者名】

彩BOC

【あらすじ】

啓蒼大学に通う二年生、都築昂介。大学に入る目的も見付からず、いつも遊び気分で通っていた。しかし、突然会う少女をキツカケに“飛ぶ”と“創造”の力を得ることに……。二人は時代を駆け巡る。日記を探して過去へ戦争前後に旅立つ。他に日記を求めるのは、敵、味方、どちらだろうか……

日常（前書き）

「昂介は、将来の夢って、何かあるか？」

眼鏡をかけた赤髪の青年が、ふとそんなことを聞いた。

「何だよ急に」

「いや…何となく…さ…」

「俺？俺は……」

「そういえば……聞いたことなかったよな。昂介の将来の夢」

「夢って……お前らはなんかあんのか？」

そういうと、三人は同時に口を閉じた。

「僕は……絵を書いているから……やっぱり画家……みたいなになりたいな……」

一番最初に口を開けた翔一は、恥ずかしそうに顔を赤らめながら言った。

「翔一らしいじゃん」

「そういう深空はどうなんだよ？」

あまりに意外な夢を語った深空に、三人は笑いを隠せずにいた。

「み……深空が……」

「保育士……だって……」

「笑うな……！！だから言うのやだったんだ……！！」

よほど恥ずかしかったのか、顔がゆでダコのように真っ赤になっていた。

すると、赤髪の青年はずれた眼鏡を掛け戻し、うつ向いていた。

「そっか……みんな……夢があるんだ……」

「そういえば……知佐人はどうなんだよ？将来の夢は」

知佐人は振り向き、微笑みながら口を開いた。

「そっだな……俺は……」

眼鏡を通して空を見ていた知佐人の目は、いつになく寂しそうな目をしていた……

日常

普段通う学校。受けなきゃいけない講義。そんな毎日に僕は飽きれを感じていた。

もしかしたら、高校生までは、何か夢があつたかもしれない。しかし、今はそんな夢もなく、ただただ繰り返される決まった人生に振り回されている事に最近気付いた。そんなのは嫌だ。確かに夢もなにも無いけれど、自分の人生は自分で決めたい。そうは思ってるけど…

想い続ければ、願いはきっと叶うものよ

4月18日

花坂荘

ブウウウン。

「都築さん、場所はここでいいんですよね？」

「はい」

「じゃあ荷物も部屋の中に入れてしまいますので」

「ふう……」

親が大学から近いアパートがあるから来てみたけど……

「これじゃボロアパートだな」

不意にそんな言葉が出た。アパートの壁の色も微かに黒く、狭そうな団地にちょこんと建っていた。これでは誰もがボロアパートと言

うだろう。しかし、ここに越してきたおかげで、大学までの時間が45分から15分とかなり短縮された。これはこれでありがたい。でもよく見ると、ここから見る景色もそんなに悪いもんじゃないな……さてと。

「部屋に入ってみるか」

ガチャ。

思ったより部屋の広さは広く、六畳半＋押し入れや流し台、それに風呂まで付いている。これで家賃が一万弱とは格安だ。

元々、この大家だった人が親の知人だったのが縁で、知り合いという事で、僕だけ特別安く家賃を払っている。

まあ、家賃三万ならこれでも文句言えないな。

「んんー……」

大きく背伸びする。初めての一人暮らしは少し気が引けるな。

よし、運んだ荷物を出して、色々設置してみよう。

そして一時間が過ぎた。

とりあえず、置ける物は置いてみた。テレビの配線は簡単に終わったけど。

「パソコンのは、ちょっと無理だな。」

やっていく間に配線がぐちゃぐちゃになっちまった。うん、僕って機械類は全然駄目だな。まあいいや、今度翔一にやってみらうか。ひとまず部屋の片付けは終わったから、周りを散歩でもしよう。

僕は部屋を出た。

すると隣の部屋からドアが開く。

出てきたのは髪の毛の長い青年だった。どうやらこちらに気付いたようだ。

「おつ君か。新しく越してきたって人は」

青年はニヤニヤしながら挨拶する。

胡散臭そうな人だなあ。

「あ、はじめまして。今日越してきた都築です」

「あゝそんなに俐まらなくていいよ。俺は室井健、宜しくな。あと、コイツはたつきだ」

すると、室井さんの足元から荒い鼻息が聞こえた。

「ワンワンッ」

そこにはまだ子供の柴犬がいた。僕と目が合うと僕の足に寄って来て臭いをかいでくる。

そして足にすりよってきた。

「ん？珍しいな」

「何がです？」

「いや、こいつさ、普段見知らぬ人には挨拶なしに吠えるんだ」

そうだったのか。

「だから、初対面の都築君にすくなつくなんて」

村上さんは驚いた顔を見せた。僕はしゃがんでシンの頭を撫でる。それに応える様にシンは頭で僕の手を擦ってくる。

「昔に、僕も同じ柴犬を飼ってたんですよ。もしかしたらその臭いが残ってるからかなあ」

「もしかして君、犬臭い？」

室井さんはさつと鼻を抑える。

「そういう意味じゃないです」

室井さんにツツコミを入れる。

「ははっ冗談だよ」

「しっかし君手慣れてるなあ……」

感心する目で見る。

すると室井さんが手を差しのべてきた。

僕はそれに応じた。

4月24日

7時50分の目覚ましアラームに起こされる。
んんー…

大きな背伸びをする。身体中のあちこちが痛い。昨夜に夢の中でドタンバタンと聞こえていたのはベッドから落ちた音だったのか。そういえばベッドに上がるような動作をやっていたかもしれない…。

相変わらず僕って寝相悪いなあ…自覚してるけど。

昨日コンビニで買ってきたパンをかじりながらテレビを見る。

その後顔を洗い、素早く着替える。

再び時計を見ると8時20分。

大学の講義は9時からだが、早く行く事に損は無いだろつ。

アパートの駐輪場に停めてあるママチャリにまたがり、大学に向けて自転車をこぎ始める。

坂を自転車で降るのはなんとも爽快な感じだった。

しかも朝なのでそれ程交通量も少ないため、気楽に走れる。

これなら予定より早く来れるな。

やがて大学の校門の近くまで来た。

自転車を停めるのが面倒だったのでそのまま通る事にする。

しかし、あまりに勢いがつきすぎて

「うおおおっ!?!」

ガツシャーン!!!!!!

見事段差に上がれずころげた。

頭より自転車の前輪が前に出ていたので頭突きをせずに済んだが、どうもその振動で腰に痛みが響いた。サドルから落ちて、校庭のアスファルトに落とされた。

「つたたた…」

しかし、あれだけの勢いでぶつかったのかすり傷一つもなかったのは不幸中の幸いである。今だ腰が痺れるが…。

「朝から随分ハデな登場の仕方だな。昂介」

目の前にシヨートカットで緑色のシャツの上にカーディガンを着た女性が立っていた。

「や、やあ、おはよう。深空」

迪堂深空は僕の昔からの幼馴染みで、同じ大学二年生だ。学部は違うが、去年同じサークルだったのでよく会うのだ。女性としては、容姿もスタイルも抜群なのだが、口調まではそうはいかないらしい。

「一体どこから見てたんだ？」

「自転車で猛スピードでの校内侵入から段差を乗り上げようとして転げ落ちたトコまで」

「要するに全部見てたって事か」

「全く…これじゃ、秀才ときいて呆れるよ」

「そんな事言つてないで、手ぐらい貸してくれてもいいだろ？」

「そつ、そんな事言われなくても、今貸すところだった！」

ムキになつちやつて…素直じゃないなあ…まあ、そんなところが彼女の可愛い所なんだが、流石に僕は好きになれない。何年も一緒だったから彼女は友達、という存在が定着してしまつて、そんな事は当たり前になつていた。

「で、手は貸すのか？」

「ん？貸してくれるのか？」

「嫌ならいいんだが…」

「あー分かつたお願いだ貸してくれ！」

「つたく…」

渋々差し出す彼女の手を借りて、ようやく腰を上げた。

「朝から事故るなんて、ついてないなー」

「段差に引っ掛かって勢い良く倒れたのに、怪我を一つもしてないのはついてると思うけど」

「何言ってるんだ。お陰でこのお気に入りのジーンズが汚れちゃったじゃねーか!」

僕の愚痴は無視して、

「ところで昂介、お前引越し、終わったのか?」

「ああ。つい今朝終わったんだ。アパートってのもそんなに悪いもんじゃないな。結構広い上にシャワーがついて家賃が三万だぜ!」

「それはそのの大家とお前の親と知り合いだから安くなったんだろ?」

「う……」

「まあとりあえずは安心したよ。昂介の事だから、間違っただのアルバイトに越しちゃったんじゃないかと気になっていたんだ」

「なんでだよ」

「ふふっ、冗談だ」

キーンコーンカーンコーン

最初の講義15分前のチャイムが鳴る。

「おっ、そろそろ始まる!じゃあまた後でな!」

そう言って走りながら深空に手を振る。

それに応えて降り返す深空。

「さて、そろそろ私も行くかな」

教室

「…であるからにして…この場合は…」
「はあ…」

かったりい…毎日毎日同じ科目の授業を受けて、毎度同じ講師の話
を聞いて…もう…飽きたな。

実は自慢ではないが、去年の時点でもうほとんど大学の学習範囲は、
頭の中に入っているのだ。大学も高校と同じで義務教育じゃないの
で、今更通う意味は無いのだが…まあ理由も色々あるわけで…

「それではここを…都築、前に出て答えを」
急に指名が来た。やべっ、全然聞いてなかった。まあ黒板を見て考
えるか…。

「え……と」

黒板に書き綴っていく問題の答え。ただここで難点なのは、問題の
答えが長いいため、何度も手を休めなければならぬ。それが唯一の
問題である。講師は毎回この光景を見ているので、見慣れてしまっ
たのか、真剣な眼差しで僕を見る。
二分して…

「できました」

チヨークをカタンと置き席に戻る。
何故か答えを書いたただけなのに皆愕然としている。

「うん、完璧な答えだ。流石だな」

講師に誉められ皆が拍手をする。

普通なら嬉しいのだが、もうウンザリしていた。

席に戻ると不意にため息が出た。

「ふう…」

「凄いね昂介は、僕全然解らなかったのに…」

「ん、そうか？」

隣で声をかけてきたのは高校で知り合った男子。名は坂本翔一。見た目は妙になよっていてよく女の子に間違えられる程美少年？である。言動も少し弱いが芯は強い。

「だって、さつきから昂介、ずっと寝てたのに分かつちやうなんて」「あの問題の公式って、前にやったのと同じやつだったろ？」

翔一はキョトンとしている。

「そうだったけ？」

「結構最近にやったと思うけど」

「やっぱり凄いね昂介は、流石秀才だね」

「お前、毎回同じ事言ってるな…」

食堂

昼の講義が終わり昼飯をとるため、翔一と一緒に食堂に出向いていた。今日は皆弁当など持ってきてきているのか、あまり人気がなかった。しかしその中に一人学食をすすめる女性がいた。

「よう、深空」

「深空ちゃん、またカレーランチ食べてるの？」

深空が食していたのは深空の定番、カレーランチ。しかも通常より

辛さが三倍増していて、今や、これは深空専用の学食となっている。

「毎回同じの食べてねーで、たまには気分を変えてDランチでも食べたらどうだ？」ぶっ！！

深空が口からカレーを吹き出した。

「ばっ、ばか言うな！！殺す気か!?!」

Dランチとは、

「dieランチ」の略で、毎月付けられる学校内の学食旨くないランチングで毎回ダントツ一位をとっている異例の料理である。

その味も食べてみれば分かるが（無理だと思うが…）まさに殺人料理ともいえる程恐ろしい不味さだ。

実際に食べた人間はまだ数人だが、確実にその人間は数日間腹を壊してたか、病院送りになっている。さらに謎なのは、どうしてあんなに不味いものが、まだメニューに残っているって事だ。噂では、食った数人の中に腹を壊したというのにもう一度食べたいという危険のヤツがいるので、今だ学校に存在しているらしい…。

一体どんなおぞましい料理かはまだ僕も見ることがない。見てみたい気持ちもあるが、そんな事のために自分の命を危うくしたくないのだ。

「なんだよ、根性無いなあ」

「じゃあ、昂介は何を食べるんだ？」

「んなの決まってるだろ」

「えっ？」

二人は声を八もらせ、昂介は食券を買いに出向いた。

}
f
i
n
}

夢（前書き）

都築昂介

（ツツキコウスケ）

誕生日

4月7日 現在20歳

身長 176cm

体重 61kg

特徴

黒髪の爽やか系。

青隆大学に通う大学二年生。大学に入った理由はこれといってなく、ただなんとなくやることがないので受験した。深空と翔一とは昔からの幼馴染み。

祠で知鶴と出会い、“創造”の力を手に入れる。

夢

時間は閉店間近だった。店内はがらりとしていた。まあもうすぐ閉店だから当たり前か。

「あら、いたんだ？」

後ろからコーヒーを運んできた従業員が声をかけてきた。目の前のテーブルに注文したブラックコーヒーを置く。

「やるのがないと、ヒマでしょうがないんですよ。家に帰っても勉強勉強で……」

「いいじゃない。大学生も、勉強は大事よ。あつても、秀才君にはそんな時間は要らないか」

昂介を秀才扱いする捺美を無視して、一人ブラックを煤っていた。相変わらず苦い。ブラックは大人の味というが、二十歳という大人の立場にたっても、大人の味がわからないとは。

まだまだ砂糖とミルクは必需品だな。苦くてまともに飲めやしない。

「そつえば捺美さん。前に言ってた中瀬神社の話、聞かせてくだ

さいよ。今日俺、そのためにきたんですから」

今日ここに訪れた本来の目的は、ここに引越してくる前に捺美から聞いた、中瀬神社に纏わる不可解な話を聞きに来たのだ。

前回の話では、なんでも、その神社の奥にある森の中の林を抜けると、違う別世界に行けるらしい。もちろん、前回の話はまだ仮定の状態で、捺美自身もその話を聞いただけであって、実際にはどうだかわからない。俗に言う風の噂である。

だが他の人に話したところ、この話はどうせフィクションだろとみんなは言うので、昂介にこの話をするのは止めた。もっとも、捺美自身も、その話には半信半疑だったが…。

「なんだ、この間の話、信じてたんだ。みんなは信じてくれなかったのに」

「すみませんね。そういう興味がそそる話には弱いもんで」

天才には意外な盲点がある。いつか聞いた哲学者の言葉を思い出し、まさにこいつのことだと、捺美は直感を覚えた。

「シヨカンに戻って来てくれるなら、考えてあげてもいいけど」

「な、捺美さん…」

「冗談よ。まあ教えるより、実際に自分で見た方が早いんじゃない？ちよつと待ってて、もうすぐ上がるから案内したげるわ」

そういって、捺美は昂介を背にして中に入っていった。

「1111よ」

ついた場所は林が覆い繁っていて、夕日も射す隙間もないほど、上の視界は遮られていた。目の前には苔の入った小さな神社がある。

「こここの後ろにある林道を抜けると、いつの間にか景色が変わっているらしいのよ」

「へえ……」

僕は抑えれない気持ちだった。そんな不思議な事があるのだろうか……目で見てみたい気持ちだった。

「ね、ねえ……ホントに行くの？」

いつになく弱気な捺美がいた。自分から話したくせに……。

「捺美さんは行かないんですか……？」

「わ、私は行かないわよ。なんか出てきそうでやだもん……」

いつもなら『男だろ!』とかいつて何度もこんな感じのものを体験させたくせに……。」
世の中は不条理である。

「じゃあ私帰るけど、迷子にならないようにね」
「……なりませんよ……」

子どもじゃあるまいし……。

よし。確か、この神社の後ろだったな。
ヒョイと後ろを覗いてみると、

「……小さいなあ……」

竹で出来た林道は、意外にも頭上が低かった。子どもが一人でやっと入れるくらいの大きさ。しゃがまないと行けないな。
僕は腰を下げ、チマチマと林道を通っていった。

見えない……暗い……そんな林の中をくぐり抜け、

「……」

目の前にはさっきの神社がそびえたっていた。……………あれ？

「おかしいな…」

道を間違えたか？いや、そもそも一本道だったし、間違えるハズもない。けど確かにここはさっきいた場所だ。

「どづいつ事だろう……………？」

僕は頭を抱え、深く悩んでいた。何故また戻ったんだ……………？確かにここを通り抜けたハズなのに……………。

「……………」

気味が悪くなってきた。帰ろうかな……………。

……………マッテ……………

！！

なんだ！？今、声が……………。

イカナイデ……………

また！

「うへ、気味わりー！」

帰ろう。いつまでもここにいても、暗くなって帰れなくなるだけだ。
明日も講義あるし……
振り返って足を動かした……！
ピカッ！！！！

「！！！！！！」

一瞬の光と共に、僕は意識を失った。

イデ

え……………？

……………イカナ……………イデ

また、さっきと同じ、

女の人の声……。

どこからともなく……

頭に入ってくる……。

怖い……。

痛い……。

「や、ヤメてくれえ!!」

イカナイデ…… イカナイデ

「はっ!……」

気が付いたのは、日が暮れる前、携帯の時計を見ると、六時を過ぎ
ていた。まったく未開の土地のような気がしてならないので、とり
あえず深空に連絡をとろうと携帯を手に取った。

『おかけになつた電話は、電波の届かないところにあるか、電源が
切られているため、かかりません』

「え!?!」

電波を見ると、見事に圏外の文字があがっていた。ここは山の中か？
確かに見回すと、周りは草木で繁っていた。

「おいおい……」

手段が無くなった昂介は、途方に暮れたまま歩き出した。とにかく、
日が暮れる前に山の中を出なければ。

山ああああ！！！！

いくら歩いてても下りやら上りやら見付からない。てゆうか、ここさ
つき来たような……。
再び携帯の液晶画面を見ても、未だ圏外状態。日は暮れ、近くで狼
のような雄叫びが聞こえたような気がした。もし今日中にでれな
かったら、

「野宿はやだな……」

青ざめながら僕はさまよった。しかし、新たな発展は得られな
かった。

「はあ……ひい……ふう……」

僕の精神は限界に達していた。さっきから同じ所をグルグルと……

もう……死ぬかも……、

…… コツチ

「!!--!!!--」

まただ……。あの声……。とうとう……。幻聴まで本格的に聞こえてきた……。

コツチ コツチ

声のする方には、道の無い、草木が生い茂っていた。そこからは、まるで誰かが手招きをしているように見えた……。

「……………行ってみよう……………」

覚悟を決し、僕は歩み始めた。

すると、いつの間にか広い道に出ていた。
助かった！！そう思ったとき、

…… ソッチジャナイ

という声を合図に、さっきとは違う、見知らぬ祠のある場所に戻された。

つてうおい！！……！
まあいいや……。

それよりも、不思議に感じた祠を調査してみることにした。キイイ。
イ。

開けた祠の中には、一冊の古びたノートが置いてあった。花柄模様のかわいらしいノートで、表紙の中心に何やら書いてあるが、どうやら未知の文字で書いてあるのか、一文字も読めない。

「なんだ……林が奥まで続いていると思ったら、こんな祠で終わりか……」

ガックリ肩を下ろしながら、そのノートを手に取り、開こうとする。
すると……、

カッ！！！！！！

ノートの中から放たれた光が、一瞬にして辺りを包みこんだ……。そして視界は遮られ、同時に音も無くなり、僕はその場に倒れた。

正体（前書き）

テンドウミンソラ
迎堂深空

誕生日

8月4日 現在（当時） 19歳

身長 162cm

体重 ????

特徴

ショートカット、目付きは鋭いが透き通った瞳をしている。

昂介と同じく大学二年生。容姿は申し分ないのだが、性格上、男口調なのが玉に傷。演劇派で、高校時代は演劇部に所属していた。

カレー好きで、カレーを食べるなら限界を知らない。

正体

「じゃあ、おばさん晩ご飯の用意しなくちゃいけないから！後はヨロシクね！」

「はい、分かりました」

そういつて、昂介の母親は退室した。目の前には、見知らぬ女の子が顔を覗きこんでいた。

見れば、一瞬、高校の後輩の一条知依奈に見間違えてしまったが、よくよく考えてみれば、知依奈の赤髪のショートボブだし、この女性とは古風な感じの黒髪ロング、そして昂介がなんとなく見違える理由は、彼女の澄んだ瞳と、雰囲気ごとくなく知依奈に似ていた。けど、やはり違うようだ。

「あ、目、覚めたんだ」

薄目を開けたことに気付いた少女は、優しく微笑んだ。

ガバツ！

包まれていた布団から勢いよく起き上がる。

少女は少し身を引いた後、再び微笑んだ。

辺りを見回すと、積み上げられた週刊誌、机の上に散らばった人気グループのR・SのCDアルバムがばらまかれている。そうか、ここは僕の部屋……。てことは、ここは実家か……。

「……俺の……部屋……？」

「うん。さっき祠で気を失ってたから、ここまで運んできたんだよ」

「誰が？」

「私が」

会話が途切れた。さっきからどうしても聞きたかったことがあった
ような……、気を失っていたからか、頭がボヤけている。

「まあ、今日は疲れたでしょ？もう寝ちやいなよ」

そういつて僕の肩を押し、僕を寝かした。そして、静かに目を閉じ、
自然と深い眠りに入ってしまった。

夢の中で……ようやく思い出した……。

彼女は……誰なんだ……？

4月27日

「やあ〜と終わったあ〜」

長く続いた講義が漸く終わり、歓喜の一息をついていた。今日は、大学生の生態調査と3コマ続けての講義の上、現国の一時間テストがあつて、今なんとかそれも乗り越えた。いくら秀才と呼ばれる昂介でも、勤勉づくしで一日を過ごすとなると、さすがに堪える。

「ぼ、僕もークタクタだよ〜」

翔一が落胆の声をあげながら机に突っ伏している。

「ところで昂介、朝から非常に気になっていたことがあるんだが…」

隣に座っていた深空が、いつになく真剣な眼差しで見ている。思わず身を引いてしまう。

「な、なんだよ……？」

前の一段下の席にいた翔一が、ニヤけた表情で、

「昂介も人が悪いよね。そうならそうと早く言ってくれればいいのに」

???、さつきから二人の話についていけない。一体何の話をしてるんだ？

すると、いないはずの反対側から、トントンと肩を叩かれた。その方へ顔を向けると……、

「……………」

「……………」

見覚えのない女性の悪戯に微笑んだ顔を、昂介は数秒間見入っていた。

そこには、昨夜一度だけ見た少女、昨夜と同じ制服を着ていた。

「うおおお!!!!!?」

夜見た名も知らぬ少女は、昂介の顔を覗き込むように見た。

「昨日知り合っただから、そんな大袈裟なリアクションとらなくてもいいでしょ……」

冷めた目で見ながら、彼女は呟いた。

知り合った、というより、昨日顔を合わせたくらいで、まだ彼女の名前すら聞いてない。

「あ、そういえば自己紹介してなかったっけね。私の名前は一条知鶴。こう見えても、君達の大先輩なんだよ」

そういった彼女は、昨日と変わらない同じ制服を着ていた。白い今ならどこでもありそうな制服……。胸元には綺麗な金色のバッジを着けていた。

「ちょっと片付けやったほうがいいよーこの部屋」

「ていうか、なんでまだここにいるんだよ!!」

いつまでも自分の部屋に知鶴が居座っているのが気に入らなかったのか、軽い怒声を放った。

「あれ？聞いてなかった？ちょっとご厄介になるって」

「は？」

「知鶴ちゃん！夕食の準備手伝ってえ！」

下から、昂介の母親の声が聞こえた。いやそれより、知鶴ちゃんて……。

「あ、はい」

返事をして彼女は部屋を出て階段を降りていった。

「……………」

そういえば彼女……………いつからここにいるんだ？そんなことを考えながら、ふと自分の机の上を見ると、

「こねって……………」

昂介が手にしたのは、あの時見たあの花柄のノートだった。確か、

祠の中にあつたやつだよな……。
そう思いながら、恐る恐るノートを開いた。
そこには、一ページごとに日付が付けられていて、色んな人の筆跡のもとに、ページは埋め尽されていた。

「これって……日記……かな……」

次々に捲っていくと、日付が変わるにつれて、書いてある内容も変わっていった。まあ文字が不思議なもので読めないのです、そんな感じがしたただけだが……。

「昭和……20年……!?」

何故だか、年代だけは読めた。驚いたのは、日付の年代である。左上の隅に、『昭和20年』と書かれていた。昭和20年といったら……、昂介は頭の記憶を蘇らせた。学問で学んだ知恵……知識は豊富かつもりだが。

今からしたら、60年前だよな……。

て……空襲や戦争の真つ只中じゃねえか!!
もしこれが本当なら、彼女はこの時代から来たことになる……。まさにタイムトリップである。

まあ……この日記が“本物”ならの話だが、

「昂介ー!ご飯出来たらから下りてきなさいよー」

「……………今行くー」

色んな疑問を胸に抱きながら、僕は階段を降りていった。

「過去から……………」

「やってきたあ？」

知鶴が自分の正体を暴くと、二人には胡散臭く聞こえたらしく、鼻で笑っていた。

「まあ……………君達からしたら、信じがたい話だろうけど……………」

「そりゃそうだよ、もしホントに過去から来たってことは、タイムトリップ？」

三人の口論を、昂介は黙って離れて見ていた。確かに信じがたい話である。人が時を越えてこれるはずがない。それができるとしたら、もはやSFの領域である。しかし昂介は、少しながらも知鶴の正体を信じていた。それはあの時、見てしまったから……………。信じざるを得なかった。

「よくわかんないけど、そんな感じかな」

「じゃあ、それを証明してみなよ」

無理な要求を出した深空に、知鶴は悩んだ。

「証明って……どうすればいいのかな？」

「そうだな……」

腕を組んで考えた後、再び知鶴の姿を見て、

「ねえ……それって、横峯章陽女学院の制服じゃない？」

知鶴の制服を指差し問いた。

「そーだよ。よく知ってるね」

意外そうな顔をして、知鶴は微笑んだ。すると深空は、珍しそうな目で見回していた。少し触れたりいじったりと……。

「どうかしたのか？深空」

「これって……本物……？」

わなわなとした顔で知鶴に聞いた。

「うん。そっか、この制服、今は知らされてないんだ……」

状況がよく呑み込めてない昴介と翔一は、頭を傾げていた。

「嘘……ホントに……」

「ちょ、深空ちゃん……？」

深空の声は既に震えていた。

「ホントに……過去から来たんだ……」

「そーだよ。信じてもらえたかな」

あっさり深空は信じた。宇宙説とかSF系はまったく信じてなかった割には、案外潔く認めてしまった。

「み、深空ちゃん!？」

あまりに意外な状況に翔一は、声が裏返っていた。すると深空は、うつ向いて静かに呟いた。

「横峯章陽学院はね……空襲で無くなってしまった……謎の多い学校なの……奇妙な怪奇現象や、生徒が行方不明になることが多かったらしい……」

冷たい説明口調ではなし始めた深空に、僕らはかすかな悪寒を感じた。

「それにもともと高校なんて、知鶴さんのいた時代は、家柄や地位がそれなりにないと入れなかつたらしいわ……」

「そこに……知鶴さんも入っていたわけだ……」

僕も軽く頷いた。しかし、翔一は納得のいかない顔をしていた。

「そ、それがなんだったっていうのさ！それとこれとは話がちが……」

バン！

校内に、一発の銃声が流れた。それを合図に、黒ずくめの集団が校内に押し寄せてきた。

「静かにしやがれ！！おい野郎共！！さっさと捜すんだ！！」

中央にいた男の怒声で、他の男達が動き出した。その影響のせいか、まわりの生徒はパニックになっていた。

「来た！！」

「なっ、何！？なんなのさ！！？」

パニックに陥っていた翔一の手を、知鶴が引つ張り走った。

「二人とも走って！！ここじゃ危ないよ！！」

その言葉に、僕たちは無言で知鶴さんについていった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「はぁ……やっぱり追い掛けてきてたんだ……」

汗を拭いながらそんなことを垂れた。

「知鶴さん……アイツらは……?」

「私たちの日記を狙う悪い奴らよ。うまく撒いたかと思ったけど、
そうでもなかったみたい……」

「日記を……奪う……? 一体何のために……?」

「それは……」

「!! 見つけたぞ! あそこだ!」

不意に、背後から黒づくめの男が迫っていた。目的は知鶴さんか?

「もう来ちゃったか……みんな! 早く逃げて!」

そういうと、どこからかあの花柄のノートを取りだし、構えた。

「ち、知鶴さんは!?!」

「私は……コイツを食い止める。その間に逃げて!」

「どうやって!?! ダメです! 一緒に逃げましょう!」

そういつて、僕は知鶴さんの手を握り、一緒に逃げようとした。その時……

「え……?」

「え……?」

二人が触れた瞬間、辺りは一瞬の光に包まれ、二人の影が消えた。

過去

「二人が……」

「消えたあ!？」

「ちっ……」

黒ずくめの男は、軽い舌打ちをしたあと、シーバーのようなものを取り出した。

「ターゲット、適合者を見つけた模様。飛んでいきました。直ちに追いつきます」

それだけ伝え、早々と走り去っていった。すると、緊張の糸が切れたように、翔一はペタンと腰を落とした。

「な、なんなんだよ……あの人たちは……」

「どうやら……知鶴さんを追っていたみたいだな……」

冷静に腕組みをして考えていた深空に、翔一は不満を覚えた。

「何で深空ちゃんはそんなに冷静なのさ……」

「性格……かな……。それより……あの二人は何処へ行ったんだろう……」

昭和20年 3月27日
午前3時

「……………」
「……………」

二人は、ただ呆然と立ちすくんでいた。一方、昂介の方は状況が呑み込めていないようだ。

「え…？ここ…どこ…？」

「通じた……………」

「うおっ！？」

「通じたんだ！」

ひどく共感したのか、昂介を抱いては振り回していた。しかし、未だ状況が把握出来ない昂介がいた。

「そつ、その前に！ここは一体どこなんですか！」

あまりに状況が把握しきれれていないので、かなり動揺していた。

「じじは…」

ウーウー…

「!?!?」

真夜中に、感嘆に煌めくサイレンが鳴り響く。それはこれから起きる、空襲を予感していた。

「これって……昔の空襲のサイレン!」

「おそらく、昭和20年…多分…3月27日…」

「!?!?」

「私たちは…過去へ飛んでしまった…」

辺りは物静かで、近くに民家はまちまちだった。上を見上げると、直線に伸びるライトが夜空を照らしていた。

「行くよ! 昂介くん!」

「えっ!?!? おわっ!」

強引に引っ張られながら、民家を目指した。

「防空壕へ逃げー！」

「坊、手を離しちゃダメよ！」

「消化活動に入れー！」

それはあまりにも無惨な光景だった。辺りが火の海で広がっていた。民家は燃え、人々はずきを被り防空壕へ急いでいた。

46

「な、なんだよこれ……」

「言ったでしょ……私とあなたは通じた。そしてここは……昭和20年の宮坂市……」

「えっ!?!」

「つまり……過去に来たって事」

「うああ！」

目の前でボウズ頭の子どもが、倒れてきた屋根の下敷になった。

「鉄平!!」

背後から父親らしき男が、汗をかきながら必死で走ってきた。

「待つてるよ鉄平！今助けとやるからな！」

勢いで屋根に手をつけ、必死に持ち上げようとするが、ビクともしない。

「昂介くん…手、握って」

「え！？」

急な要求に、僕は硬直した。しかし、僕の意志とは関係なく、強引に手を握られた。

「お父さん！そこを退いてください！」

「え？」

すると、いつの間にか僕たちの手には、赤い消火器が持たされていた。

1時間後

空襲は無事おさまり、民家に出払っていた火事もじき消沈した。屋

根の下敷になっていた男の子も、無事救出された。人知れず手に持っていた消火器のおかげで……。

防空壕へ逃げていた人たちも、よたよたと戻ってきていた。なかには、間に合わず犠牲になった人もいるが、

「……………」

受けきれない、冗談のような現実を見て、僕は胸を締め付けられるような気持ちになった。あの子は助かったけど、他の人は……。すると、先ほど助けたボウズ頭の子とも、その父親がこちらに来た。

「先ほどはありがとうございました！なんとお詫びをしたらよいか！」

言いながら、父親は何度も頭を下げた。そうか……この時代の子どもは……とても大切にされていたんだ……。

「いえ……当然のことをしたまでですから……」

知鶴さんは、父親の恩を受け取らないように、即座に振り返った。

「そろそろ帰る時間よ昂介くん……手を繋いで……」

「え……？あ……はい……」

自然に手を繋ぎ、その風景は一瞬にして消えた。

まるでド〇えもんのタイムマシンの通る空間のようなところを、僕たちは渡っていた。

その晩、僕はなかなか寝つけなかった。あまりにも非科学的なことが起きすぎて、

祠から出てきた知鶴さんの存在……。校内に侵入してきた黒ずくめの男たち……。僕の中で、僅かに悪い予感が頭をよぎった。

「ただいまー、と」

誰もいないはずの部屋に、昂介は虚しさを感じていた。そういえば、一週間くらい帰って来てなかったっけ……。自分の家なのに……。

「ふう……」

疲れが溜っていたのか、不意にため息をついてしまった。しかしそれに反面、日常的に有り得ないことの連続だったので、退屈だった日々から抜け出せたことに感動していた。

「通じた人間と飛べる…か…」

ベッドに転がり、少し考えた。

あのあと、知鶴さんからなるべく詳しいことを聞いた。当然、あの黒い集団の事についても。

すると知鶴さんは、こんなルールがあると教えてくれた。

・ 知鶴さんは半分死んでいるという事。

・ 昨日みたいに時代を飛ぶには、通じた人間（生きた）の力を借りる事。

・ 過去に戻り、とどまれる時間はせいぜい数時間程度である事。

・ 一度行った日付には二度と行けない事。

・ 日記には特別な力が備わっていて、一人では苟の力であり、通じた人間となら、本当の力を発揮する事。
などなど…

こんな体験を、幾度も体験しているらしい。

そして、あの黒い集団は、知鶴さん達の日記を狙っている。何故か、アイツらも時代を飛べるらしい…。

翌日

ガチャ。

「コウせんぱーい！引っ越し祝いにケーキ買ってきましたよー」

ドア越しから現れたのは知鶴さん……ではなく……

「お、おお……。よく来れたなちい」

いたのは高校で後輩だった、アイツの妹。

「それってどういう意味ですかー先輩……」

一条知依奈はふくれっ面になりながらも、のそのそと上がり込む。ガラス張りにされたテーブルの上に、大袈裟に大きな白い箱を置く。

「方向音痴のお前が、よく迷わずこれたなってことだよ」

兄に似ず、文系でオツチヨコチヨイな上、極度な方向音痴と機械音痴を持ち合わせている。壊された電化製品は数知れない……。。

「う…実は行く途中で二度くらい迷って…何度か教えてもらったんですけど…それでも…」

デパートの中でも迷いそうだな…コイツ…。大丈夫かな……。

「そんなことより！見てください！今日は奮発して大きいの買ってきましたですよ」

開けてみると、それは見事な大きなクリームケーキが、テーブルを占領していた。

「おおっ！」

「ビックリしたでしょ？先輩の引っ越し祝いは豪勢にやろうと思いまして」

「豪勢って…これはいくらなんでも多すぎだろ…これじゃ食べきれないぞ」

「じゃあ…誰か呼びましょうよ！深空先輩と坂本先輩とか！」

確かに、カレーがあれば食べられるなら、ケーキなんて朝飯前だよな…。翔一のヤツはともかく…。

「お邪魔します。 昂介くんいるかな？」

すると、またもや一条と名乗る女生徒が現れた。 また、こんな時に……。

「え…誰かな…？」

「……………」

聞き覚えのない声に敏感に反応した知依奈に、ビクツと肩を揺らした昂介であった。

「ま、いいや。 お邪魔します。 あ、昂介くん、いるなら返事してよー」

それは先日俺に奇妙な体験をさせた張本人。 いつも通り、チャームポイントである横峯章陽学院の制服を着ていた。 それを見た知依奈の頭上には、？マークが点々と浮かび上がっていた。

「コウ先輩…どなたですか？」

「え、あ、ああ…」

少し焦りを感じた。知依奈の中には勘違いすれば憎悪で埋まってしまう。そうならないよう、必死に口実を考えた。

「あーえーと…、俺の従兄妹だよ。妹の知鶴」

とりあえず険悪な場になりそうだったので、その場凌ぎに思いつくつて嘘を試してみた。

「？」

「……従兄妹？」

出来れば知鶴さんは余計なことを言わないでほしい……。

「あれ…？けどコウ先輩の従兄妹って、日和ちゃんだけじゃなかったですか？」

普段物忘れが激しいクセに、今回だけは妙に鋭い。仕方ない……。

「ねえ昂介くん、ちょっとはなし…」

「はいはい今行くよ！」

かくなるうえは、直接交渉！

僕はドア越しにいた知鶴さんを、力づくで外へ引っ張り出した。

「なっ、何！？」

「何しに来たんですか！てかよくここが分かりましたね？」

初めてどころか、行き道さえ教えてないハズなのに、ヒョコヒョコ現れた知鶴さんには驚いた。

「昂介くんのお母さんが場所を覚えてくれたんだ。ついでにこれも持ってってって言われたの」

言いながら、知鶴さんは右手に持っていた袋を手渡した。中を見ると、有名な和菓子屋、『悠辿堂』のケーキが顔を出していた。またケーキかよ…。

「と、とりあえず、ちいには自分の正体を明かしちゃいけませんよ
」！

「えっ？なんで？ていうかあの」…」

「今騒がれたら話がややこしくなるんですよ！」

内心を身に潜め、表面上の理由だけで説得させ、二人でズコズコと中へ入っていった。

「??.?」

一步前進（昂介編）（前書き）

イチジョウチサト

一条知佐人

誕生日

11月11日 現在（当時）18歳

身長 180cm

体重 64kg

特徴

赤髪で眼鏡を掛けている。中指で眼鏡を掛け直すのがクセ。

昂介とは親友。昂介と並ぶ秀才で、空想好きなので、まれに奇天烈なことを言う。

大学受験は受かったのだが、以後現在本人は行方不明になった。

一步前進（昂介編）

5月12日

> ショカン <

「えっ？知依奈を知ってる？」

「うん…うる覚えなんだけど、やっぱりどっかで見たことがあるよ
うな…」

現在僕の家人居候中の知鶴さんは、いつまでも世話になっではなんだと、自分からアルバイトを探した。丁度、ショカンが人手不足だったので、捺美さんに相談し、OKをもらったので、そこを知鶴さんに勧めた。

その話を店長がするのだが、中々来ない。

「もしかしたら…いつか時を飛んだときに…出会ったことがあるのかも…」

「そんなことって…あるんですか…？」

「まあ何回も時を旅していると、色んな人に会うんだよ」

「マスター来たわよ」

奥のカウンターから、バツハのような巻き髪をした男が現れた。歪んだ眼で見られたら、目を反らすことは難しい。

「じゃあ、僕はその辺をブラついてきますんで、終わったら待っててください」

そういつて、僕はシヨカンを出た。

>花坂荘<

あのマスターとは、少し（僕的に）因果関係があるので、ひとまず花坂荘に戻り、近くの自動販売機で買ってきたジュースを飲みながら一息つく。

「昨日はやたらに騒がしかったな、都築くん」

すると、背後から久しぶりに聞いたような声が聞こえた。

「えと…室井さん…でしたよね…」

少し身を引いた口調で言った。相変わらず緩んだその目は、一体何を狙っているか分からない…。関わりを持つのはよそう…。そそくさとその場を逃れようとする。

「あつおい、どこいくんだ？」

「あ、いや……特に……」

とっさの不意に掛り、本音が出てしまった。

「ヒマなら、ちょっと寄ってかないか？まだ歓迎会もしてないしな」

と言って、強引に僕の腕を引っ張りながら部屋へ連れていった。あまりの強引さに、抵抗することを忘れてしまった。

>103号室 - 室井の部屋<

連れられるがままに連れられ、そのまま室井さんの部屋に入った。中には、三人の男女が中央のテーブルを囲んでいた。

「おつ、君か！新しい住人さんは！」

「あら、案外かわいいコじゃない。これは健くん以上かな？」

「……………」

なんだか楽しそうだが、こういう雰囲気には馴染めないのが僕の短所でもあった。一人は漁師のようなイデタチに、威厳のありそうな顔奥にいた女性は、もの凄く綺麗で、なんとも大人の雰囲気をモンモ

んと出している。
ツインテールに縛った女の子は、目を合わせず下を向いて蹲っている。

「ほらっ、早く座んなよ、兄ちゃん！」

「あ、はい……」

見た目とは裏腹に、案外優しそうな人だったので、一先ず安心した。

「由菜ちゃん、ほら、挨拶しな」

室井さんは優しく女の子に勧めるが、顔をうずくめたまま、喋ろうとしない。

「いきなりカッコいい男の子が現れるから、由菜ちゃん恥ずかしいのよ。ね？」

女の子は激しく上下に頷く。気のせいか、顔を真っ赤にしているように見えた。

「ちえ、俺んときは平然だったのにな」

「……」
「……」
「……」
「……」

微かな小声で必死に謝っていた。それを見た漁師？が、

「お、健！由菜ちゃんを泣かすのか？泣かしたら承知しねえぞ？」
眉間にしわを寄せて、室井さんを威嚇した。これを見て、室井さんは冷や汗をかいた。

「あ、自己紹介がまだだったわね、私の名前は岳月瑞穂。こう見えても、まだ20代前半よ」

「三度の飯より魚好きな見習い漁師、前田半蔵とは俺のことよ！」

あ、見習いなんだ……。

「か、神木由菜……です……」

みんな、笑顔のまま僕を迎えてくれた。

僕も素早く自己紹介を済ませ、みんなと会話を弾ませた。……何か
……忘れてる気がするが……

一步前進（知鶴編）（前書き）

イチジョウチツル
一条知鶴

誕生日

10月7日 現在（当時）17歳

身長 163cm

体重 ????

特徴

古風な腰まである長い黒髪。目の色は赤。

60年前の高校生。明るいい性格で、明名とは親友。空襲前夜に宮坂神社の祠に行った際、落ちてきた爆弾と共に姿を消した。

“ 想造 ”

脳内に描いたものを具現化できる（非生命体のみ）。

一歩前進（知鶴編）

> ショカン<

「アイステイーですね、かしこまりました」

知鶴はマスターに採用され、早速仕事をしてもらうようにした。この店員は、驚くことに捺美と新人の知鶴の二人しかない。つい最近まで、男性店員がいたのだが、ある事情で辞めてしまった。だが、知鶴を雇って正解でもあった。客ウケは良好、仕事もテキパキとやり遂げる。

「ねえ知鶴ちゃん、もしかして前にどっかで接客やってた？」

あまりにも手慣れているその捌きには、捺美も疑問に思った。

「あ、ここに来る前に、幾つか…」

「やっぱり？通りで手慣れていると…」

「すみませーん、注文いいですかー？」

「あっ、はい、直ぐ行きまーす」

隅でマスターが

「よく働くコねー」

自前のオカマ口調で知鶴を褒める。前にいた男性店員が辞めた理由として、このオカマ口調が原因となっている。

「ほんと。前にいたヤツとは大違いね」

二人はどうしても元いた男性店員を責め立てた。

〈close〉

シヨカンの閉店は八時。やはり店員が足りないので、閉店時間までフルでやっていた二人は、それでもまだ体力が残っていた。

「ところで、知鶴ちゃんて昂介くんとどういう関係なの？」

そういえば、いつから昂介くんと知り合ったんだろう…、何故だか、ふとそんなことが疑問としてわいてきた。

「……………」

知鶴は黙ってしまった。どう答えればいいか迷ってしまった。先日の翔一のように、過去から来たと言っても、安易には信じてはくれないだろう。

……………！

「従兄妹です。昂介くんは兄で……」

「あ、なんだーそうだったのかあ」

いつきに疑問が晴れ、満足している捺美に、胸をなでおろした知鶴であった。

カラン……

「あ、もうお店は閉店……」

言葉は途切れ、知鶴には見覚えのあった、同じ制服を着た少女が現れた。

「明名………？」

そこには、知鶴の記憶を辿る人物が現れた。

「明名…？明名だよね！？」

「あなたは…知鶴…？はわっ！」

久しぶりの再会に、知鶴は思わず抱きついた。よろけている少女に構わず、力強く抱きしめる。

「あらあら…」

「こっ…こら知鶴！はしたないわよ！」

「えへへ…」

「もう閉店だし、上がっていいよ、知鶴ちゃん」

「あっはい。お疲れ様でしたー」

「お疲れさまー」

カラン…。

「おっどろいたー。明名も、私と同じだったんだー」

「私だけだと思ったけど、まさかあなたも同じだったなんて…」

「てことは、明名もみんなの日記を探しに？」

「ええ。あれは五人の大切な物ですからね」

「今まで何処にいたの？」

「何処って…毎年学校にいたわよ」

「学校って…横峯章陽学院？」

「ええ、あなたこそ何処に？」

「みんなで行ったあの祠」

「そう」

そういつて、明名は懐から一冊のノートを取り出した。

「あっ…その日記って…」

「ええ……空襲が来る前の…最後の日記よ」

パラパラと流し読みをする。しかし日記は、途中で焼けてなくなっていた。よく見ると、ある一ページだけが焼けてなくなっていた。

二人目（前書き）

后遠寺明名

誕生日

7月26日 現在（当時）17歳

身長 161cm

体重 ????

特徴

ややオカッパに近い肩までの黒髪ショート。目つきは鋭い。

かなりのお金持ちで、口調もお嬢様。校内でも人気だった。5月20日にあった突然の空襲の際、能力を持つようになる。ツンデレっぽい…。

“触点”

日記に触れた者（30分以内）の身体に異常をきたさせる力。種類は豊富。適合者との絆が深まるたび、増えていく。

二人目

「あの時…この日記が無かったら、私はここにいなかった…」

「ヨネはあのところで買っておいて、正解だったね」

「ええ、いつも口からデマカセを言う涼輔らしいわ」

そうして、二人は会話を弾ませながら、楽しく家路に戻った。

> 都築家・実家<

「まあ！」

「ということ、もしよろしければ、申し訳ありませんが私に寢床を貸して頂けないでしょうか？」

早速知鶴は昂介の実家に帰り、明名を居候させてもらうよう交渉していた。

もちろん、当人の昂介は未だ不在中である。

「もちろんよ！家には父さんと二人つきりだから寂しかったのよ。家族が増えたみたいで嬉しいわ。えーと…部屋は…」

「あ、知鶴と一緒にの部屋をお願いします」

「あらそう？助かるわー。じゃあよろしく…」

ガタン！

突然、ドアが力強く蹴り開けられた。そして、数人の黒ずくめの男が現れた。

「一条知鶴、后遠時明名。共に二名確認」

「目的は二人と二冊の日記だ。部外者には手を出すな！」

いきなりの波乱の状況に、昂介の母親は目を丸くしていた。

「なっ、何なのお〜！？」

「E/Oのヤツら！」

「性懲りもなく追ってきたのね！」

知鶴は日記を取りだし、前に突きだし構えたが、明名にその手は下

ろされた。

「これが欲しいんでしょ？差し上げるから、一先ず今日は引き上げてくれないかしら？」

そういつて、明名は自分のノートを取りだし、男たちに差し出した。それを見た知鶴は、開いた口が塞がらなかった。

「あっ…明名!？」

「……よし。そこに置いて下がれ…」

「……………」

「え？え？え？」

パサッ。

床にノートを置き、それを静かに男が拾った。

「ちょ…何考えてるのよ!？」「今ここで騒ぎを起こすことはないわ…それに…まだあなたの残ってる…」

「よし。一度退却するぞ」

「?…し、しかし…もう一冊は…?」

「ボスの望みは日記を手に入れること。取り敢えずここはボスに日記を渡すことが最優先だ」

数人が渋々従い、男たちは退いて行った。

しかしその隙を、明名は見逃さなかった。小声で呟いた。

「触点…痺点…」

パチンッ。

軽く指を弾き鳴らせ、男はガクンと足を落とした。

「うおっ!?!」

すかさず日記を取り返し、素早いみのこなしで他の男たちを日記で軽く叩く。

「こっ、コイツー!」

「痺点…」

「ぐあっ！」

三人いた男たちも、手足が痙攣しだした。バタツと床に倒れる。

「知鶴、今よ！」

「はいよっ！手錠！」

知鶴は“想造”で手錠を生み出した。

カシャン。

「うっ…」

「くそ…ボスにどやされる…」 「ハッハッハッ、作戦勝ちだね！」

「浮かれてないで、サッサと連れてくわよ」

「…はい。じゃあお母さん、ちょっと行ってきます」

「い、行ってらっしゃい…」

男たちは反撃しようにも、手足が痺れて物を握る力も残っていないかった。

「びっくりしたー。明名ったら急に諦めるんだもん…」

「大切な日記を、そう簡単に渡すワケないでしょう？」

「明名の能力って、何？」

帰り道に、黒ずくめの男たちを交番に届け、あとは警察に任せることにした。

「日記に触れた相手に異常をきたせる力。“触点”。まだ身体を痺れさせる痺点しかないけど」

「あ、危くない？」

先ほど黒ずくめの男たちが日記に触れた後、痺点を食らって身動きがとれなかったのを、知鶴は思い出した。

「あなたは、“想造”かしら？」

「えっ？よく分かったね？」

教えてもないハズの自分の能力を見抜かれ、知鶴は驚いた。

「あなたがあの状況で、都合良く手錠を持ちあわせてるハズがない
でしょう?」

もっともらしい理由だが、何故だか知鶴には嫌味に聞こえた。

「明名もE/Oのヤツラに追われてたんだ…」

「そうでもなきゃ、日記にこんな能力があるなんて、知らなかった
わ」

夜の帰り道、自分と同じ人間が他にもいたことに、知鶴はかすかに
感動していた。

そして、昂介のいない昂介の実家へ真っ直ぐ帰った。

手がかり（前書き）

イチジョウチイナ
一条知依奈

誕生日

7月29日 現在17歳

身長 159cm

体重

特徴

赤髪のセミロング。いつも兄の愛用していた赤い眼鏡を掛ける。

一条知佐人の妹で、青隆学園高校に通う高校三年生。極度の機械音痴と方向音痴を持ち合わせている。大好きな兄が行方不明になり、どん底に落ちていた知依奈を、昂介が救った。以後、昂介にベタ惚れ。たまに大学に遊びに来ることがある。
愛称はちい。

手がかり

5月20日

> ショカン <

今日は日曜なので講義はなし。花坂荘にいても、いずれ知依奈が邪魔しに来るに決まっている。

取り敢えず、午後からはショカンで時間を潰そうかと思っていたが、そう思い通りにはならなかった。

「コウちゃん、飛ぶよ!」

「は?」

偶然ショカンで鉢合わせした知鶴さんに、いきなりそんなことを言われた。

てか、今日の知鶴さんはいつもと違い、巫さんの格好をしていた。

元凶はあの人か…。いつの間に…。

飛ぶってことは…過去にだよな…。

ていうか、コウちゃんて…。

「あの…バイトは…?」

「今は休憩中なの! ほら! 早く手繋いで!」

強引に手を繋がれ、僕たちは過去へ飛んだ。

見ていた客は、みんな唾然としていた。
捺美も、同じように開いた口が塞がらないようだ。

「ね、ねえ…あの二人…消えた…？」

「僕たち…前に一回見ましたよ…なぜかもう慣れましたけど…」

「面白そうだよな」

「甘く見ない方がいいわよ」

再び客として来ていた明名が、深空に喧嘩腰に言った。

1月3日

> 梨緒通り<

「寒っ！！」

今日はたまたま、現代は少し暑かったので、薄着で来ていたのだが、行く日にちが解らなかったので、（急だから）防寒対策不完全のまま、時渡りをしてしまった。

「そう？まあ一月だからね」

「一月！？どうしてまたそんな季節に？」うしてまたそんな季節に？」

「……ちよっとね……」

その時の知鶴さんの表情は、どことなく寂しげだった。

「ところで、今からどこに行くんですか？」

「今日は学校に行ってみたいんだ。私たちの通ってた学校」

「ああ、前に深空が言ってた横峯章陽学院ですか？」

確か、生徒が行方不明になる事件が多々あったとか。そういうのが有ったにも関わらず、空襲前夜まで残っていた謎の学校。僕も興味があり調べようとしたが、いくら文献の中を探しても見付からなかった。

「うん。もしかしたら、そこに残ってるかもって……」

「何がですか？」

「日記の行方や、何故こんなことになった手がかりを探しに」

「でも、ここにいられるのはせいぜい数時間って言ってませんか？」

「うん。だから毎日飛んで、手がかりを見付けようよ！」

「毎日…ですか…？」

僕はげっそりとした。

町は皆、正月で賑わっていた。タコアゲや駒を回して遊んでいる人もいれば、お年玉をもらってハシヤイでいる人もいた。

空襲が起きる前は、こんなに平和だったんだなと、僕は痛感した。

>横峯章陽学院高等学校<

「ここだよ」

「別に…至って普通の学校みたいですね」

「そりゃ、噂は学校内だけだったからね…」

「え…?」

「さ、早速中へ行くこうか」

言われるがままに、僕はその後をついていった。

>一階廊下<

「…誰もいませんね…」「だって冬休みだもん」

「先生たちも?」

「大人は空襲に備えて色々忙しいんだよ」

そうか…もうこの時から警報が出てるんだ…。

中には誰もいなかった。すると、知鶴さんは教室へ入っていった。

「……………」
「……………？知鶴さん？」

感傷に浸っていたのか、机に触れては、上を向いてうつ向きしていた。

「…ゴメン…なんか久しぶりだなあって思ってた…」

「ここに来たのが…ですか？」

「うん」

まわりを見渡すと、辺りは暗く、黒板以外はほとんど木造建築だった。所々では黒く腐っていた所もあった。

「……………このへんだったと思ったんだけど……………」

突然、知鶴さんは一番前の席の机の中を探り始めた。

「……………何してんすか…？」

「ん…探し物をしてるんだけど…見付からないんだよね」

「それって…日記ですか？」

「あ、それとはまた別…あ、あった！」

机中から探り当てたのは、一枚の古びた写真だった。見てみると、

この校舎をバツクに五人の少年少女が写っていた。右隅に写っていた銀髪の青年の頭上に、『神木涼輔』と黒ペンで名前らしきものが記されていた。

「知鶴さん…それって…」

「あの空襲が来る前の…みんなの宝物だよ…今はみんなバラバラになっちゃったけど…この写真があるからね…」

「どこにいても繋がってる…ですか…？」

「もう、先に言わないですよ」

「ハハハッ…」

「じゃあ俺は、図書室に行ってきます」

「うん、気を付けてね」

教室を出たあと、僕たちは一旦別れ、別行動をとるようにした。僕は図書室、知鶴さんは他の教室を回るようにした。

60年前の書物はどんなものだろうと、僕は胸に期待を湧かせていた。

手がかり（後書き）

縁の旅人を読んでくださり、真にありがとうございます。

さて、この物語をもっとよく知ってもらうために、一話毎の前書きに登場人物説明をしたいと思います。

また、序盤の方の前書きにも更新しましたので、ぜひ！見ていただけたら幸いです。

続・手がかり（前書き）

ムロイケン
室井健

誕生日

3月18日 現在21歳

身長 179cm

体重 61kg

特徴

長い茶髪でポニーテール。

花坂荘の住人。青隆学園の卒業生で、元陸上部でスプリンターをやっていた。

胡散臭い感じがするが、他人のことになると親身になる性格。大家に内緒で犬を飼っている。

続・手がかり

>図書室<

「意外に遠かったな、図書室」

遠いというか、迷ったと言った方がいいのか。てかやっぱり寒いな、一月だし……。

「さっさと済ませて帰りたい……」

書物はまだ真新しいのが幾つかあった。しかし、昭和時代の文字は読みにくい。逆読みだしな。

「どわっ!」

ドサドサ!……

本棚から抜いた本を拍子に、積もっていた本の山が雪崩のように落ちてきた。

「いたたた……」

本崩に埋もれ、身動きがとれなかった。これじゃ何のために来たんだか……

「ん……？」

本の本崩の中に、一冊興味深い本があった。

『ゴルバドの矢』

という神話。

表紙には、青銅器でできたような、ふるびた立派な矢が描いてあった。

作者は……棺……庄……郎……途中でかすれていて読めない。内容を読んでもみると、悪を貫くという力を持ったゴルバドの矢の話が書かれていた。魔除け等に使われていたらしいが、その効果はあまりに強力で、見るものを圧倒させたらしい。

「……ふーん……」

最初は興味を示したが、今はそんな場合じゃないことに気付いた。

「ふぬぐう……」

必死に本をどかさそうとするが、辞典並の大きさの書物が上にのしかかっけていて、唯一動かせるのは頭だけ……。まいったな……。

「知鶴さん……」

弱々しい声で叫んだが、知鶴さんは来るハズもなかった。

「何してんだ？」

突然、あの写真に写っていた銀髪の青年が、昂介の前に現れた。

「ふう……」

「大丈夫か？」

突然現れた青年のおかげで、なんとか本の一部にならずにすんだ。そして、この青年に、昂介は見覚えがあった。

「助かったよ、ありがとう」

「最近は図書委員の手が足りていないらしくてな、ちゃんと整理しきれない所があるんだよ」

「な、なるほど……」

少し息がきれていた。

長い間本の中生き埋め状態が続いていたので、呼吸をしなければ。

「スーハースーハー……」

「……ところでお前、見たことないな。この学校の生徒じゃないよな？」

その言葉を聞いて、昂介は肩を揺らした。

なんて言えばいいんだろ……。

『未来から来ました』

なんて言っても、信じてくれないよな……。よし、ここは……

「なんだ？もう忘れたのか転校生の顔を」

「は？」

「都築だよ。ついこの前転校してきた」

「……………」

あたかも忘れられていた友達を装った。青年は疑いながらも、深く考え込んでいた。よし、あともう一押し！

「なんだよ？疑ってるのか？」

「…何故だか、お前の顔が頭に覚えがなくてな…」

そりゃそうだ。

僕だって、ここに来るのは初めてだし…。学生を見たのも初めてだ。でも…この人は見たことある。

まあ、これでなんとかこの場は逃れそう…。

「じゃあ、俺の名前、分かるか？」

「え…？」

…し……しまったああ！！！！

そう来たか！！まあ予想はしてたけど…

「え…くと」

「……………」

青年が疑いの眼で僕を見ている。考えるより感じるんだ！！……………
！！……そういえば……………名前は……………

「神木涼輔」

「？」

「お前の名前。合ってるだろ？」

「……………」

少し目を見開いた感じで、青年は驚いていた。

思った通り、彼の名は神木涼輔。さっき見た写真に書いてあった。けど…神木って名字…どこかで聞いたことあるんだがな……。

「そうかそうか、お前が転校してきた都築か。すっかり忘れてたよ」

「おいおい、いいかよ……」

なんか…言ってる自分が恥ずかしくなってきた…。

>二階南廊下<

「うん…」

各教室を回った知鶴は、軽いため息をついた。それは“手がかりが見付からない”からではなく、“何をしに来たか忘れた”のである。

非常に物忘れのひどい知鶴は、明名も見てて呆れるほどだった。既に、昂介が何処に向かったかも忘れていた。

「あゝ…どうしよう…」

「何を…してるの…？」

途方に暮れていた知鶴の前に、銀髪の少女が現れた。かすれた声で、少女は問いた。

「え〜と…実は私も…何しに来たのか忘れちゃって…」

ナハハとハニカンで笑うが、少女は笑おうとはしない。それを見て、知鶴は困ってしまった。

「男の人なら…ご本のいっばいあるところに…いるよ…」

「え…？」

そう言い残し、少女は風のように消えていった。

「……………本がいったばいって……………もしかして図書室かな……………」

少女の言葉を頼りに、知鶴は図書室に向かい歩き始めた。

「けど都築、最近は警報がひっきりなしに鳴ってるから、早めに帰った方がいいぜ。まあ警報なんて、連日だしな」

「わかった、ありがとう」

そういつて、神木は去っていった。

「……………ふう……………」

緊張の糸がプツンと切れた。あの写真を見ておいてよかった…。危なかつたな…。

すると、自分の体の異変に気付いた。

「……………何だ……………これ……………」

体から…砂のような気体が沸き上がっていた。サー、という音と共に、体が透けていくのがわかる。

「これって…時間が迫ってるってことかな…」

確か、滞まれる時間は数時間って言ってたな…。
てことは、早く帰らないと…。

「消えちゃう…のかな…」

そんなことより…。

「知鶴さん…！」

僕は知鶴さんを探すため、図書室を後にした。

> 一階北廊下 <

「!」

今、微かに……昂介くんの声があった……。そう感じ、知鶴は走り出した。

新たな適合者（前書き）

どうも、彩BOCです。

今更ですが、黒雛さまに依頼し、表紙イラストを描いて頂きました！黒雛さま！ありがとうございます！

新たな適合者

> ショカン<

「ふう……」

無事、時間内に戻ってきた昂介と知鶴。
ちよつと体が透けだしてビックリしたけど……。

「ごめんねーコウちゃん。気付かなかった」

「体から砂のようなものが出たときはビビりましたよ……」

「言い忘れたけど、時間が近づくと体に霧が舞うんだよ。私には関係無いけど……」

「ねっ、ねえ……！」

カウンターにいた捺美が、妙にオドオドしていた。

「どうしたんすか？」

「あの二人も……消えちゃった……」

「……あの二人……？」

「……………！まさか！」

知鶴が店内を見渡すと、翔一を残され、いつの間にか深空と明名が

いなくなっていた。

昭和20年5月20日

>喫茶湘館<

「じっ、じっ…どこ!？」

「なっ、何であなたと…『通じて』しまったの!？」

二人目の、過去からの使者と通じた人間が存在した。名は……

【辿堂深空】

一時間前…

『甘く見ない方がいいわよ』

客として来ていた明名が、喧嘩腰に深空に言った。

『なんだと?』

『まあ、あなたみたいな何も考えないで勢いだけが取り柄な人には、

『到底その意味は解らないでしょうけど』
『おまえ!』

怒りが頂点に達した深空は、明名の胸ぐらを掴む。

その時…

カツ!

『えっ?』

『えっ?』

光に包まれ、二人は消えた。

「何故…あなたなんかと…」

「それより…どこなんだよ!…ここは…」

チラッ

カウンター付近に掛けてあった目めくりカレンダーには、

「昭和20年…5月20日…！」

「はあ！？」

「私はあなたと通じ、過去へ飛んだ…」

「誰だっ！」

奥から、背の高い若い男性が現れた。珍しい銀髪で、制服姿でも洒落た雰囲気があった。

「あ…り、涼輔…」

「え…」

「…なんだ…明名か…」

それに気付くと、男は持っていた金属バットをカウンターイスに掛けた。

「どうしたんだ？こんな時間に」

「えっと…その…」

(…誰だろ…)

「ところで、誰だい？その」は

自分の事を聞かれ、深空は一瞬焦ってしまった。

「えっ、えっと…」

「わ、私の…河緒に住んでる友達よ！」

「か、河緒って…随分遠いところから来たんだ…」
「あ、はい…」

とりあえず、受け答えで返事をする深空であった。

「ブラックだけど…飲めるかい？」

「あ、なんとか」

「俺のコーヒーは特別だよ。と言っても、最近は豆が手に入らなくてね」

「はあ…」

温かい…ブラックの苦さを味わい、今の状況をできるだけ把握した。

ここは、以前知鶴さんが言っていた、過去の世界…。しかもこの内装、昔のシヨカンみたいだな…。

昭和20年5月20日…空襲、戦争の真っ只中。
そんな所に…私は来てしまった。

「え…ねえ…！」

「あ…」

青年に呼ばれていたのを、深空には耳に入っていなかった。ポーツ

としてたみたいだ。

「どうしたの？ちょっとブラックお口に合わなかったかい？」

「あ…いや、そうじゃないです」

「なら、いいんだが」

「……………」

気付くと、今度は明名が顔を赤らめながら蹲っていた。

「どうした！明名」

「ふえ！？」

あまりに驚いてしまって、声が裏返っていた。

「ふえ！？じゃねえよ。どした？」

「え…、いや、その、な…何でもないわっ！！」

「はははっ、さすが明名！相変わらず面白いヤツだな」

さらに顔を赤らめ、恥ずかしそうに下を見ていた。

この人、分かりやすいな…。

対してこの男は、意地悪だな…。

「まあゆっくりしてきなよ。と言っても、もう真夜中だけど…」

ふと付けていた腕時計を見ると、見事に時刻は変わっていた。
午前1時23分……
そして、地獄は訪れる。

ウーウーウー……。

外から、悪夢を知らせる警報が鳴り響いていた。それを合図に、窓の外にはたくさんの人が走り回っていた。

「マジかよお!!」

「りよ、涼輔!!」

警報を聞き、涼輔は即座にカウンターを離れ外に出て行ってしまった。

「……………」

「な、なあ、追い掛けなくていいのか?」

問掛けてはいるが、明名は黙ったまま涼輔が出ていったドアを眺めていた。

「おいっ!!!!」

「はいっ!!!!!!!!?」

「追い掛けなくていいのかって!!」

「ああ…そうね…」

明名は再び沈黙を成しながら、涼輔を追い掛けた。

新たな適合者（後書き）

最近寒いですね…。☆☆（<|>）☆☆

彩BOCも、学校から帰ってきたら風邪ひいてました…。

＝（ ）（ ）>っくし

インフルエンザには気を付けましょう…。

涼輔救出（前書き）

更新がやや遅めですがすいません…m（　）m

まだまだ序盤ですね…

受験もあるし…

涼輔救出

辺りは民家、警報を聞いた人々は、外で黒く渦巻く空を見ていた。

「大丈夫かねえ……」

「心配ねえって。ここらは工場が小せえから、気付かれずに通りすぎるだろうよ」

「それよか、大きな工場のある横浜とか狙ってるんだろ」

「んだ、ここは大丈夫だて」

涼輔を追っている最中に、深空はそんな会話を耳に挟んだ。

飛び舞う戦闘機、それを見上げる人たち……。

安心そうに空を見る人たちを見て、何処となく不安がさした。

「ところで、あの人は何処へ行ったのか知ってるのか？」

涼輔の居場所は知って向かっているのか、場所は分かっているのか
深空は心配になった。

「ええ……けど……」

すると、急に明名は立ち止まった。

「あんなに正義感のある人でも、この空襲で亡くなってしまつたよ……」

え……？

「なっ……！？」

「落ちてきた照明弾の後、続けて焼夷弾が落とされ、火の海になった民家に潰されていた二人の子どもを助けるのよ……。無事にその子たちは助かったけど、遅れて火に囲まれ……」

「……！？」

そんなことを解っていないながらも、明名はその場を動こうとしなかった。

「その歴史を、今私たちが覆すとしたら……？」

「えっ……？」

そうして、明名は再び走り出した。

深空は未だに話の意味が理解が出来なかった。

ピカッ！

「……！」

遙か遠くに、目をくらます照明弾が落ちたのが分かった。続いて焼夷弾があちこちに落とされた。その瞬間、いつの間にか周りは火の海になっていた。

「あつ！」

「いた！」

見つけた時は、既に涼輔は燃えた民家の中から、二人の子どもを連れて出てきた。

「父ちゃんー！」

二人の男の子が、涼輔の両脇に抱えられながら、鼻をすすりながら泣いていた。

ガタン！

燃えていた民家の屋根が三人の上に落ちてきた。

「くっ…受け取ってくださいー！」

決死の覚悟で、両脇に抱えていた子どもを、見ていた親に上がって
いた炎を越えるように投げた。

それを親が受けて取り、泣きながら抱き抱えた。

しかし、涼輔は火の中に取り残されたままだった。

「涼輔！」

「お、落ち着けてっ！」

「くっ……」

歯をくいしばりながら見ていた明名を、何故だか深空は同情したく
なっていた。

「わたしにも……知鶴のような力があれば……」

「どうした？助けるんだろ！」

呆然と立ちすくんでいた明名を、後押しするように言った。

「助けたら……歴史は変わってしまう……」

「は……？お前……こんな時に何を言って……」

「今ここで涼輔を助けたら……歴史は……あなたにもわかってるでし
よう……？後世に語り継がれていく歴史は、決して覆してはならない
……」

そんな歴史にこだわりながら、火の中で迷える涼輔を見ていた。

コイツは…大切に想っている人を…助けられないなんて…!

歴史を変えてはいけない…そんな記述に囚われて、見捨てるこの女は…!

徐々に、深空の中から悠長に怒りが込み上げてきた。

実はそんなことを言いながらも、明名は助けたくて仕方がなかった。

パチン!

薄く赤く染め上がる明名の頬に、熱く鋭い痛みが走った。

「いい加減に…しなさいよ…」

「…!?!?」

怒りが抑えきれなくなった深空は、ついにビンタを放った。

「助けたいんですよ…だったら…こんなところで嘆いてないで、さっさと助けに行きなさいよ!」

「なっ…!?!?」

「歴史がなんだよ!そんなこと…大切な人を見捨てても守らなければいけないものなのかよ!」

そういうと深空は、民家の火の海の中に入った。突っ込んでいった。

「あ、待ちなさい！」

その言葉は、深空には届かなかった。火の海の中に消え、いつしか涼輔の姿も見えなくなっていた。

想い人（前書き）

カミキリヨウスケ
神木涼輔

誕生日

10月8日 現在（当時）17歳

身長 175cm

体重 60kg

特徴

ややトンがった銀髪で、昭和の爽やか系。
ちよつと垂れ目

喫茶店【湘館】の二代目店長で、知鶴たちのまとめ役で、正義感も強いが、ちよいとナルシスト。
コーヒーのことはうるさいほどこだわりを持ち、毎日ブレンドに励む日々。

人の世話をやくのが好き。

想い人

「あ…君は…」

「そんなことより！さっさと逃げるよ！」

いつの間にか、涼輔は左腕にひどい火傷を負っていた。かなり辛いのか、腕を抱えながらしゃがみこんでいた。

「ほらっ、肩に掴まりなよ」

「あ、ああ…すまない…」

かなりよろけていた。

こんな正義感のある人…死なせはしない！

そして明名の…大切な想い人だから…。

それにしても…熱い…。体が焼けそうなくらい…。汗も止まってはくれなかった。

冷や汗…か…？

ガタン！

通ってきた逃げ道が、とうとう倒れてきた火柱によって閉だされた。さらに炎の勢いは増し、近付きも出来なかった。

「くっ……」

「俺を置いて……早く……逃げるん……だ……」

微かな声は、自分を犠牲にする最後の正義。

絶対……助ける！

「諦めるな！必ず脱出する！」

しかし、その願いを遮るかのように、ますます火の勢いは増していった。

忽ち深空たちのもとに、激しい炎が舞い寄る。

「深空！」

火の中をかきわけ、諦めていた少女が前に立っていた。

「明名！」

「このノートに触れなさい！」

「はっ……？」

「早くなさい！事態は一刻を争うのです！」

差し出されたノートには、青くシンプルな、現代人が使うような大
学ノートのようなようだ。

しかし…今この状況で…最後の最後で…この女は何を言ってるんだ
と、答えず啞然とした。

それでも、彼女の目は真剣だった。

「……………」

恐る恐るノートに触れる。しかし何も起きず、明名は続けて涼輔に
も触れさせた。

「あなたのおかげで、新たな力が私は手に入れた…」

「？」

背を向け、突き出したノートで熱い夜の風を切った。

「触点第二…震点」

すると、周りの火の海に囲まれていながらも、何故か熱さを感じな
くなった。急に汗が止まる。

それは明名だけでなく、ノートに触れた深空と涼輔も同じだった。

「え……？」

「さあ！脱出するわよ！」

不適にも笑いながら、燃え盛る火の中を指し歩き始めた。

「おっ、おいつ！」

「大丈夫です。私を信じなさい」

いつの間にか、火の中を通過していく明名の体から、何か光輝く青白いものが、明名の体を包み込んでいた。

その光のせいで、火は当たらないように避けているのが解った。

「……………」

騙されたように、深空も同じく明名の通った道を歩み始めた。始めは燃えるかと心配していたが、自然と火が体を避け、まるで火がたてならぶ道しるべが出来上がっていた。

そして、無事に生還を果たした。

「ゴホッ！ゴホッ！」

煙が肺まで入ったか、涼輔は胸を抑えながらむせていた。

「さて…帰るわよ…深空…」

「は？そ、その前に手当てしない…と…」

明名に掴まれた自分の手を見せられると、手から霧状のようなものが浮き出ていた。

「…なんだ…これ…？」

「時間よ。もう戻らなきゃ…」

手を繋がれ、人のいない方に向かって走った。

シュン…！

「おっ、おい！今、人が…」

「き…消えた…！？」

帰る道中、私たちは初めて、会話を交した。

「余計な事をしてくれたわね……」
「なっ……!?!?」

明名は、話しながらも深空とは顔を合わせなかった。

「……でも……ありがとう……」
「……………」

その言葉に、明名に対して改心を諮った深空であった。

日記所持者

- ・ 一条知鶴
- ・ 后遠寺明名

適合者

- ・ 都築昂介
- ・ 辻堂深空

質問

6月1日

市内の宮坂駅からハマ電

(私鉄浜塚山電鉄浜塚山線)を使い、十五分もすると、海に近い河
緒市が見えてくる。

ここにはファミレスのチェーン店、コルク・マットがある所だ。
僕たちには遠いので滅多に行かないが、ちょっと前までは室井さん
が働いていたらしい。

今日ここに来たのは、三人で知鶴さんたちの存在をもっと詳しく聞
いてみることにした。

「じゃあ、何から聞きたい？」

知鶴さんは嬉しそうな声で言った。

「まず、あなたたちが何故この時代に来たか、です(だ)」

僕と深空は意見一致した。適合者でない翔一も、何故だかかなり興
味があるようだ。

適合者とは、日記の所持者と通じた人間のこと。

初めて所持者と一般人が触れる時、適合者であれば強制的に時代を
“とんで”しまう。

「……………」

知鶴さんは腕を組んみ、顔を伏せたままうつ向いた。

心配した明名さんは…

「?どうしたの知鶴?」

「いやあ…私もよく解らないんだよねー…あれからもう60年も経つてるんだけど…」

「……はあ……」

明名さんは溜め息をつきながら、代わりに答えることにした。

「この時代は一番文明が進んでいるから、が第一の理由ね。といっても、私たちは選んでこの時代に来たわけじゃないけど」

「どづいつことだ?」

「私たちは各々、そして違う時間で起こった空襲の際、時代をとぶという時渡りの力を得た」

「そうそう!」

いつの間にか、知鶴さんはパフェを頼んで一人先に食べていた。この人…自分の問題なのに…。

「……まあいいわ。とにかく、着いた時代を拠点とし、行動してきたのよ」

「ところで、昂介と深空ちゃん以外にも、適合者っているんですか?」

現在適合者は二人、その前に、知鶴さんたち以外にも特別な力を得た人はいるのか翔一は気になった。もちろん、適合者も。

「適合者は、私たちの他にも同じ力を持っている人がいれば、当然いることになるわ。確信は無いけれど…いないとは限らないわね…」
難しい顔で、珍しく自信無さげに明名さんは言った。

「言い忘れてたけど、君たちと通じていられるのは一年だけなの。そのルールで、私たちはたくさんの人達と通じてきた」

「一年？」

「そう、正確に言えば、知鶴とあなたが会ったのは今年の4月24日。だから来年の4月23日には、あなた達の側から離れなければならぬ」

「でも、別にいつまででもいいんじゃない？」

頼んだオレンジジュースのグラスを強く握りしめながら言った。

「残念ながら、時間が来たら自動的に適合者の記憶から私たちの存在が消え、また私たちに関わった他の人も、それまでの記憶を無くす。だからこちらは通じた人の事を覚えていても、忘れてしまったあなたたちにとっては、赤の他人同然なのよ…」

明名さんは寂しそうな表情を浮かべながらコーヒーを煤っていた。

「でも…俺は忘れませんよ」

キツパリと言いつつ放った。

「人の顔を簡単に忘れるような、そんなユルい頭じゃないんですよ」

「コウちゃん…」

まだ…数カ月しか行動を共にしてないが、なぜか僕にとって、離れがたい存在になっていた。
すると、明名さんはハツとため息をついた。

「ほんと…男って単純ね…」

「ほっ、他には何か質問あるかな？」

「知鶴さんたちが使っている日記の能力って、私にも使えないのか？」

知鶴さんたちの特殊な力に興味を持ったのか、深空はふとそんなことを聞いた。

二人は顔を合わせたか、知鶴さんは静かに口を開けた。

「おっ、なに深空ちゃん。興味あるんだ？」

「前から、見てて面白そうだなって思ってた」

僕も同じようなことを考えていた。知鶴さんたちの力を使えたらどんなに便利だろうと。

「別に…使えないことはないけど…カリスマ苟カリスの力だからねえ…」

「本来の力は出せないわ」

「ある程度は、てことか」

「そうだね」

知鶴さんは頷いた。

「どつやって？」

「私とコウちゃんの“創造”は、頭に思い浮かんだものを具現化できるんだよ。例えば今ケーキがほしいと思えば……」

そう言うといつの間にか、目の前のテーブルに一切れのショートケーキが現れた。

それを見て、翔一の目は飛び出していた。

「こんな風に」

「す、す……」

そう言いながら、知鶴は出したショートケーキを食べた。案外、簡単そうだった。

「明名さんの能力は？」

「私の力は……」

すると明名さんは、出した日記を軽く僕に当てた。

「触点…痺…」

「だーダメだってえ!!」

何かやるうとした明名さんから、知鶴さんは即座に日記を奪い取った。

「なっ、何をするのです!? 返しなさい!」

取られた日記を明名さんは直ぐに取り返した。

「だ、だって明名、今痺点やるうとしたでしょ!?!」

「ひてん?」

僕は知鶴さんの意味不明な言葉に理解できず、明名さんはキョトンとした顔で言った。

「?、そつですけど…」

「生身の人間にやっちゃダメだよ! ましてやコウちゃんに!」

何故知鶴さんが怒っているのかも解らない僕の前で、二人の口論は続いた。

「私はただ、能力を披露しようとしただけで…」

「それがダメだって言ってるんじゃない!」

「まあまあ二人とも…」

終わらない二人の間に深空が割り込む。

「明名も口で説明すればいいだろ？」

得策な方法を提案した深空に対して明名は、

「そうですわね」

ハッと気付いたように手をポンと叩く。

「私の能力は…」

パリーン！

突然、店内の大型ガラスが割れ、そこから数十人、また入り口から数人の黒ずくめの男たちが侵入してきた。

「あいつらつて！」

「クドいわね…」

「話は後で！コウちゃん！早く手を繋いで！」

翔一を後ろに回し、四人は大勢の人数に立ち向かった。

襲撃（前書き）

カミキユライ
神木由菜

誕生日

2月17日 現在（当時）15歳

身長155cm

体重????kg

特徴

銀髪のサラサラヘア。お気に入りの赤いスカーフでツインテールに巻いている。目の色は銀。瞳は大きい。

花坂荘の105号室の住人。気が弱く、極度の人見知り。華奢な体の割に力持ち。唯一まともに喋れるのは瑞穂とだけ。

襲撃

「野郎共！さつさと捜せ！民間人には手を出すなよ！」

何処かで聞き覚えのあった声に、思わず昂介は耳を傾ける。

「あれ？アイツって…」

昂介が注目したのは、先ほど大声を出した一人だけサングラスを掛けていない、中学生くらいの背で目のクリツとした、昂介と同じ位の髪の長さの男の子。

「前に…何処かで…」

「！いたぞ！」

こちらの存在にいち早く気付いたのは、やはり小さな少年。黒いスーツを着ているのを見ると、とても可愛らしい。

ザッ、

と言っているうちに、いつの間にか周りは黒づくめの奴らに囲まれていた。

「一条知鶴、后遠寺明名、共に二名を確認」

中央にいた少年がそう言うと、中から四人くらいがこちらに近付いてきた。

「そこで止まりなさい！」

明名が日記を構えると、近付いてきた男も足を止めた。

「聞かなければ、貴殿方を拘束せざるを得ません」

そう言っただけで明名は、持っていた日記を黒ずくめの奴らに突き付けた。向けられた男たちは静かに退く。てか、どうやって拘束するんですか…？

「退くな！日記にさえ触れなければヤツの力は使えない！」

すると、少年は懐から危なっかしい形の物体を抜いた。

あれは…拳銃…！？

小さな銀色に輝くブローバック式の銃。

おいおい…子どもがそんなもの持ちっちゃあ…

ドン！

銃口から放たれた弾丸は、スルリと昂介の頬の横を通っていった。ほ、ホンモノ…。

「言うことを聞かなければ、次はソイツの脳天を撃ち抜く」

そう言っただけで、銃口は静かに僕の方に向いた。

…て俺え！？

「どうぞ。好きなようになさい」

明名さんは目を閉じて答えた。
て…あつ、明名さん!?

「はっ!」

少年は鼻で笑いながら、ゆっくりと引き金を引く。あまりの恐ろしさに、足がすくんで動けなかった。

カチ…、
ヒュン

「うあっ!」

カシャン…

引き金の引く音がすると、同時に幼い悲鳴があがった。
見ると少年は、必死に自分の腕を必死に抑えなら床でもがいていた。

「やはり子どもね…単純な嘘に引っ掛かるなんて…」

目を閉じたまま明名さんは言う。一体何が起こったのか、僕には理解できていなかった。嘘…?

「包囲したぞ」

すると、今度は深空が目を瞑^ツっていた。

「ありがとう」

「ぐおっ!…」

そして、次々と黒ずくめの男たちは倒れていった。黒で埋め尽されたように、床は真っ黒に染まっていた。

「なっ…何故…」

「時は止まらない…日進月歩。まあ、子どもに言っても解らないでしょうけど」

………まったく解らない…俺にも…。

「さて、この人たちを警察へ届けましょうか」

「はいよっ」

未だ倒れた黒ずくめの男たちは、不気味なつめき声を上げながら、床に蹲すくまっていた。

けっこー面白いな、この絵も…。

ブウウウン…

鈍いエンジン音らしきものが鳴り、突如現れた黒い穴から、赤髪のサングラスを掛けた青年が現れた。

「！？」

知鶴さんと明名さんは同時に驚いたような顔をした。すると、赤髪の男が口を開いた。

「情けないですね？6…。日記の一つもまともに奪えないなんて」
「？3!？」

蹲っていた少年は、静かに赤髪の男と顔を合わせた。

「ボスが新人のあなたを早速任務に向かわせたのは、あなたを見定めるためですよ。使えるかどうかの…ね…」

「そんなことを…言いに来たのか!？」

少年が眉間に皺を寄せると、赤髪の男はため息をついた。

「もちろん、助けに来たんですよ。まあ…こんなことになるくらいは解っていましたけど」

「?…?3!」

すると、次は知鶴さんが眉間に皺を寄せていた。

「これはこれは、久しいですね、知鶴嬢」

知り合い口調で知鶴さんに話し掛ける。

「まだいたの…?あなた…」

「またまた…下らないことを聞くんですね」

「貴方なんて…会いたくもなかった!」

何故だろう…確かに初めて会うはずなのに…あの男…見覚えが…。

「痺点！」

ヒュン…。

「厄介ですね…」

「なっ!?!」

ネルと呼ばれる男は、素早く懐から赤い本らしきものを取り出した。

「今日は…貴女方と争いに来たのではないんですよ」

「くう！」

甲高い悲鳴が宙を舞う。

すると、明名さんが床に倒れていた。

「明名！」

「うっ…」

「さあ、退きますよ、カク」

少年を立たせ、昂介たちに背を向けた。

「待て！」

不意に、赤髪の男を言葉で止めた。まさか……。

「お前…もしかして…」

「貴方には用はありませんよ。またの機会に…」

不意に一瞬瞬きした瞬間、少年とあの大勢いた黒ずくめの男たちはいなくなっていた。

I/O

「あいおー？」

「I/O。ボスが伊藤と緒方のイニシャルでI/O」

「ね、ネーミングセンス無いなあ…」

あの後私たちは、すぐに警察が来て沙汰になりそうだったので、やこしいことになる前にコルク・マットを抜けた。

そして今、昂介の実家にお邪魔して、さっきのヤツら（I/O）のことについて聞いてみた。（深空談）

「ま、まあそれは置いといて…」

「なんなんですかアイツら。前も会いましたね」

「前に学校のラウンジにいたね」

昂介と翔一は目を合わせて頷いた。

「前にも言ったと思うけど、彼らが私たちの日記を付け狙うヤツらよ」

明名は眉を潜めて言った。ヤクザ…とはちょっと違うようだけど…正義の敵、悪の軍団…みたいなの…。

まあ、あの状況を見たらまず間違いないよな…。

「ヤツらに日記が渡ると何か不都合なことでも？」

とにかく俺は単刀直入に聞いた。

「元々私たちの日記だし、それに、あっちにも使えるヤツがいるのよ」

「使えるヤツ？」

翔一は首を傾げた。

「日記の力は、持ち主と適合者にしか使えないのよ。他の人間には反応しない」

ごもつとも。

以前翔一がやりたくて試しに知鶴さんの日記に触れて思いつ切り雄叫びを上げていたが、起きたのは周りの笑い声だけだった。

「じゃあ…その人たちも知鶴さんたちと同じ…過去から来た人なんですか…？」

「そこまでは解らないけど…可能性はあるわね」

明名さんは深くため息をついた。

「あなたたちを巻き込んでしまったことは深くお詫びするわ。けど関わってしまった以上、無理でも手伝ってもらおうわ」

謝った途端、また強引なことを言った。

金持ちってみんなこうなのかな…？

「分かりました」

「私も」

「ぼ、僕は…知鶴さんたちみたいな力が手に入るなら…」

キツ！

鋭い目付きで明名は翔一を睨んだ。

昂介は背筋を伸ばし、深空は、はあ…とため息をついた。

「な、なんでも無いです…」

ガツクリと肩を落とした翔一であった。

「まあとりあえず、E/Oの事を詳しく教えなきゃね」

「それよりっ！」

怒声を放って遮ったのは、

「あの赤髪の男は…誰なんですか!？」

身を乗り出して言うと、知鶴さんは少し身を引いた。

真っ黒なサングラスを掛けていたので解らなかったが、あの口調は
……………。

「アイツが…毎回私たちの邪魔をしてくるのよ」

腕を組んで明名さんも頷く。

「それに、アイツの声…」

「No. 2の赤髪のネル。あの子どもは、No. 6のカロ。二人とも、I/Oの幹部よ」

「ネル…？それはヤツの本名なんですか？」

僕はどうしても、あの赤髪の男が気になって仕方がなかった。何故か、心の何処かで納得できないものが存在した。

「それはどうだか解らないわ。多分偽名よ、あのサングラスをはずした時に顔を見たけど、国外の人間ってわけじゃなさそうだったし」

明名さんはずっと真剣な表情だった。

No. X。^{クロス}

I/Oの幹部六人で構成されていて、数字の若い者から地位が上。それぞれ個々に能力が分け与えられ、その下に部下たちが動いている。

「それに、ヨネばあが売っていた日記が今幾つ存在するかも解らないし…」

「けど私たちと同じ人がもしかしたらまだ…」

「あ、あの…なんの話っすか？」

置いてきぼりにされた三人が後を追う。

「ん、あ、いや、こっちの話」

「今日はもう遅いし、また明日にでも」

そうして、明名さんたちは退散していった。

「……………」

「さあ、私たちも寝よっか」

「そうですね……………ってオイ！」

「？」

押し入れから更に布団を出していた知鶴に昂介は怒声を上げた。

「こっ、この部屋で寝るんですか!？」

「えっ、ダメかな？」

ダメとかの問題じゃなくて…。

「知鶴さんには隣の部屋があるでしょう!？」

今日は明名さんは深空の家に泊まると言った。まだ深空と話さなければいけないと言って、一緒に帰っていった。

「あれ？そだっけ？」

そだっけ？って…。

「知鶴さんはいいんですか!？」

「何が？」

とぼけてるのか本心から言っているのか解らない。

「あそっか、お風呂に入らなきゃね」

「……………は？」

「というワケで、お先に入らしてもらおうよ。あ、覗いちゃダメだよ？」

知鶴さんはニタリと笑って部屋を出て行った。

「……………は？」

I/O 番外編(前書き)

今回はI/O視点です。
お楽しみください！

I/O 番外編

>????????<

「只今戻りました。ボス」

黒髪の少年がそう言うと、眼鏡を掛けた痩せ細った中年男性が見えた。

「ご苦労…と言いたいが、またもや失敗したようだな、No.6」

No.6はコードネーム。本当の名は、俺には解らない。

「これで三度目か、御恩を返すには値しないな」

甲高い声は辺りに響いた。暗い怪しげなこの中を知り尽くしているのは二人のボスだけ。

新入りの俺は、まだヒヨツ子だ。実際、御恩があるのはコイツではなく、あの方にある。まあ、その方もコイツに従っているみたいだし、仕方ない。

「まあいい…だがNo.3…お手柄だったな」

俺の隣に潜んでいた赤髪の男は、すつと前に出た。まだ若い。30代…いや…多分それよりも…。

「ありがとうございますボス。しかし、一度に日記を二つ奪えるチャンス逃してしまい、申し訳ありません」

そう言つて、俺の隣で静かに頭を下げた。

「確かに…それは惜しい事をしたな…まあいい…次に期待させてもらうか」

「はい、では、失礼します」

更に一礼を加え、闇の中へ消ていった。

「No.6…次に期待させてもらう…」

取つて付けた様な言い方をして、ボスは消ていった。

「……………」

思い悩んだ。まだ入社して一年も経つてない。

まだ解らないことだらけ…。

ただこの会社、表では普通の電化製品会社を営んでいるが、裏では目的のためには手段を選ばない秘密結社I/O。アイオー

その手の噂は数知れない。

だがそれも関係ない。

俺はあの方に助けて頂いたご恩を此処で返さねば…。

組織内から選ばれた六人の別動組織をNo.Xくすといい、その階級に入ると、部下を指示する事が出来き、さらにNo.X専用の個々に自室が与えられる。

地下を合わせて計24階のこのオフィスビル。少年の部屋は15階の見晴らしの良い部屋。

ここから見える綺麗な海を見ることが好きだった。

コンコン…。

静かにノックの音がした。

「なんだ」

「N O . 2 がお呼びです。早急に部屋に来てほしいと…」

「……わかった」

N O . 2 が呼ぶのだ。あの人は滅多に人を呼ばない。よっぽどの用事だろう。

座っていた重い腰を上げ、自室を出た。

俺はN O . 6 …。コードネームも共通で、本当の名は…知らない。

言葉

想い続けていれば、願いはきっと叶うものよ…。

あの日…知佐人がいなくなったあの日から…おまじないのようにその言葉が繰り返される。
みんなが忘れかけてた頃からも…ずっと…。

知佐人…お前は一体…どこにいるんだ…？

> 講義室 <

暑い季節がやってきた。
知鶴さんたちが来てから毎日実感の湧かない日々だったが、夏が近づいてくるにつれて、こうして僕は平凡な大学生なのだ、いまさら実感が湧いた。

「…と、この公式はなるわけだ。それではここを都築、前に出てこの公式の使い方の説明してくれ」

「はい」

いつも通り指名が来て、いつも通りに前に出て説明し、みんなから軽い喝采を浴びる。
久々なので、悪いとは感じない。ただ、やはりなんか寂しい感じになる。

やっぱり…何か起きないとな…世の中は。

> 食堂 <

「ええ〜！？それってすごくないですかあ？」

「そつでしょ？そこで昂介くんがね…」

見ると、明らかに高校の制服姿をした二人が同じ食台で話し込んでいた。

知鶴さんと、知依奈…？

アイツら、いつからあんなに仲良しになったんだ…？

「あ、昂介くん」

「コウ先輩！今日は長かったですね！」

そんなことより、お前ら高校生のクセに大学まで来るなよ…。特に用も無いのに。

「あれ？明名さんは？」

「明名ならシヨカンに居るよ。マスター達出掛けてて店番頼まれたんだって」

あなたはそれが嫌で抜け出してきたわけか。

「授業はもう終わったの？」

「今日は昼までらしいですよ。もつじき深空たちも来ると思います」

「えー！？じゃあ今日はちいとデートしてください！」

「そんなヒマはねえ！」

ただでさえ知鶴さんが現れて忙しいのに、知依奈の世話なんかしてられるか！

「なんだ。昂介のほうが先に終わったのか…て、知依奈に知鶴さん？」

「お久ですー！ソラ先輩にシヨウ先輩！」

元気よく挨拶をした知依奈に、冷静に応える深空と、翔一は頬を赤くしていた。

「そっちは長かったみたいだな」

「生憎、物理の白井教授が急に体調を悪くしてね」

またあの人か…。白井教授は元々病弱な人で、講義にもちよくちよく顔を出すくらいで、普段は滅多に会わない。まだ若い青年だというのに…。

「けどようやく、そろそろ夏休みだねえ」

しみじみと翔一が言う。夏休み…。長く楽しいのでいいんだが、その間に論文を課題として出されるし、研究課題を探してこいと焦らせるし。

「とじろで」

知鶴さんが、切って話しを出した。

「帰りにシヨカンに寄ってもらえないかな。あなたたちと私たちの今後の事について、話したいことがあるんだけど……」

急に改まって言われたので、みんな緊張が走っていた。

何だろう…真剣になって知鶴さんが言うのだから、余程の事だろう。

>シヨカン<

「旅をする？」

「正確に言えば、心当たりのある人物を探しに行くのよ」

シヨカンには明名さんがいて、ついさっきまで一人でホールやレジを全てやっていた。

「誰なんですか？それって」

「特定は出来ないから、まだ。当てがあるだけ。可能性の話」

話の概要は、知鶴さんたちの予想より早くE/Oが現れたので、なるべく早く他の同じ力を持っている人たち（知鶴さんたちの時代の人物）を見つけ、知鶴さんたちの目的を果たしたいという。

「それで、無理は承知の上なんだけど…」

突然、知鶴さんの表情が曇った。確かに、今までの被害を見ていると解る。そして、これからはもっと危険な目に遭う事になる。解つてた。

「ちょうど夏休みに入るし、論文の題材も見付かるだろ」

「いい息抜きにもなるだろうしね」

知鶴さんはペアと顔を明るくした。

「みんな…」

「あの〜僕まだ何にも…」

「色々な所を回れば、いずれ貴方と通じる御方も見付かるんじゃないかしら…?」

明名が興味をそそらせるようにそう言うと、翔一は少し考え込んだ。

「せ、せっかくの夏休みだし…有意義に使わなきゃね…」

「……………」

翔一の意志の軽さを知ったのは、初めてのことだった…。

横浜（前書き）

ナレーションは昂介視点と第三者で流していきます。

横浜

>神奈川県横浜市<

「て…ここ何処ですか…？」

見慣れない土地に、目を丸くした翔一。

「え？…何処つて、横浜だよ。横浜大空襲に遭った」

「横…浜…？」

「詳しく言えば1945年5月29日の昼方、磯子区から鶴見区までの沿岸部、及び中区、西区の中心市街地を爆撃機と戦闘機が襲撃された土地」

「……………」

何気に詳しくしかも説明的（憎しみ込めて）な明名さんに、一同は（俺を除いて）しばし呆れていた。しかし…

「昼？空襲つて普通は夜にあるもんじゃないんですか？」

「横浜の地形は複雑だから、空襲は目視できるよう昼間に行われたのよ」

「へえ…」

二人も納得する。今を見ると、想像も出来ない。こんなに町並みが

綺麗な所が、昔醜いほど崩れていたなんて…。

「ここにいるんですか？知鶴さんたちと同じ人が」

「うん。でもまだ確定はしてないけどね」

「心当たりがあるだけ、それに賭けましょう」

「そうですね」

「その前に！」

深空がにんまりと笑って、

「横浜と言ったら…」

「????」

「そっぴや腹減ったな」

知鶴さんと明名さんは首を傾げていた。

>横浜中華街<

「わぁ…」

「懐かしいわね」

やっぱり知ってるんだな…。当時のここも、結構有名だったって言うし…。

「でも…ここは一度関東大震災で崩れて、再建されたのよね…」

そつだ…。確か知鶴さん達が生まれる前、大規模な被害を起こした地震…関東大震災があつて、横浜もかなりの打撃を受けたんだっけ…。
これは確か再建された建物だったような…。

「そんな事より、さつさと行くぞ！さつきから腹の虫が鳴ってしようがないんだ！」

さつきから興奮が止まらない深空。よつぽど腹が減ってんだな…。

「そ…そんな事より…ですつて…？」

さりげに言った深空の「そんな事より」がかなり気に食わなかったようだ。明名さんが小刻みに震えている。

「実は私…来るの初めてなんだ」

初横浜の知鶴さんは、なんだかそわそわしている。

「中華街といったら中華まんですよ知鶴さん！」

「えっ？それってなに？」

「ほらっ、早速行きましょう！」

「うん！」

「あなたたち！ここに来た目的を…」

明名さんが注意した時には、既に人込みに紛れていた。

「まあ…とりあえず今は楽しみましょうよ…」

「昔からいい加減な所と人の話を聞かない…」

愚痴を呟きながらも、俺らは人込みに紛れて行った。

「ん〜、このチーズまんおいしー！」

「知鶴さん！試食でミニラーメン貰いましたよ〜」

いつになくハイテンションな深空と知鶴さん。（特に深空）加えて「どうしてこうなのかしら…」と愚痴を零しながらも横浜を満喫している明名さん。

翔一はといつと、

「うっん…いないなあ…」

あちこちをキョロキョロと見回している。変態に思われるぞ…？

「何やってんだ翔一」

「ん？知鶴さんみたいな人がいないかな？って…」

そう簡単にぞろぞろいてたまるかってんだ。

てか、もしいたとしてもお前と通じるかどうか解らないのに…。

…こんなことなら、知依奈も連れて行ってやればよかったな。喜んだろっし…。

「あれ？もしかして都築くん？」

どこからか、聞き覚えのある声が聞こえた。振り向くと、

髪を一束に結んだ…。

「室井…さん？」

「おー偶然だなあ。遊びにきたのか？」

まさか…こんなところで知り合いに会うとは思わなかった…。

「ええまあ…室井さんも？」

「ん？いや、今日はちょっとな…。おっと、こんなことしてる暇は

ないな。じゃ」

そう言うと、室井さんはせわしく消えていった。
何の用なんだろ…？

「おい昂介っ！この中華まんうまいぞ！早く来い！」

深空が遠くから手招きしている。てかいつまで食ってんだよ…。
ここに来た目的をすっかり忘れ、遊び更けていた俺達であった。

影で昂介たちを見ていた男が、懐からトランシーバーを取り出した。

「No.3…例の五人組を発見しました」

シーバーの向こうから、若々しい男の声が聞こえた。

『わかった…その場にいる。直ぐに向かう』

「了解」

男はシーバーをしまい、再び監視を始めた…。

出発（前書き）

今回は少し読みにくいかもしれませんが……
ごめんなさい！……！

出発

「ふう…何だか疲れたねえ」

「はしゃぎ過ぎですよ」

俺がそう言うと、知鶴さんは満遍な笑顔を見せた。俺達は近くの公園で一息ついた。知鶴さんを見ると、本当に疲れているようだ。そりゃそうだ。あんなに深空と食べ歩きをかなりのハイテンションで歩き回っていたからな。
てかあんなに喰ったのによう歩けるわ…。

「ここらで休憩するか」

「そつだな」

俺と翔一以外はまともに歩けそうにない。この中で一番満喫したのは、間違いなく明名さんだな…。
言つてた割には、結構楽しんだし…。

「さあ…そろそろ本題ね…」

急に明名さんがそう言うと、場の空気が一瞬にして重くなった。

「みな満喫していたところ悪いけど、すぐにでも私たちは動かなければならないのよ。いち早く同じ人を見つけなければならぬから…」

翔一は息を飲んだ。

「これを見て…」

明名さんは大学ノートを出した。以前見た、60年前の明名さんの日記のようだ。

パラパラと開いたそのページには、色んな国の文字が羅列して並んでいた。

「これは…日記…?」

初めて見た翔一は、その記してあるものに目を疑った。

そこには、日記らしき文章の中に、所々赤い文字で記されていた部分が気になった。

「ここに赤で書いてある革縁^{かわぶち}、竟笠^{おわがさ}稲見崎、そしてにここ横浜」

「て…これは…地区の名前ですか?」

赤で書かれた文字は、神奈川の地区名を表していた。

その他にも赤でアンダーラインが引いてある所もあった。

「とりあえず…ここ神奈川に置かれたヒントはこの四つ。このどれかに、その答えがあるはず」

「これは…なんの場所なんですか?」

すると知鶴さんは、“想造”の力で神奈川全体的見取り図の貼った掲示板を出した。

「1番北にある稲見崎に、そこからやや東にある竟笠、東京と境目

にある革縁。そしてここ、横浜市」

「じゃあ、1番最初に探すのはここ横浜ですか？」

翔一が聞くと、明名は横に首を振った。

「残念ながら、ここにはそれらしきものは見付からなかったわ」

断言したようだったので、その理由を聞いてみた。

「私たちは個々の能力を所持している他にも、お互いの存在を確認し合える事が出来るの。もちろん、繋がった適合者ともね」

もはや超能力としかいいようがない。まあ、60年前の人が今ここに存在すること自体が信じられないけど…。

「じゃあ…ここではその存在が感じられないんですか？」

「ええ…」

「ところで…」

深空が割って入って来た。

「でも…それって人間ですよ？明名さんたちと同じ60年前の。もし今その人たちがそこに存在しているなら、人間なら動きます。少なくとも、今現在その町にいる可能性はあるんですか？」

いつになく鋭く言い放った深空に、僕も少し疑問に思った。
60年前の居場所なんて、あてになるのか？

「確かに、今から私たちが捜していくのはあくまで“人”という目標」

「どづいつことですか？」

「そのままよ。“あくまで”私たちは人を捜す。ただ、その人が生きてるかそうでないかは、基本的どうでもいいのよ」

「どうでもいい…？」

聞き間違えかもしれない。明名さんがそんなことをいうなんて…。

「ちよつと明名！そういう言い方はないんじゃない!？」

「別に…ただ解りやすく説明しただけよ…」

知鶴さんの言葉は耳にしないようだ。どうしたのだろう…。急に機嫌を損ねるなんて、らしくないと言えばらしくないが…。

「ともかく、私たちの追うものは人物だけじゃないってことよ」

「じゃあ…何ですかそれは？」

すると、明名さんは懐から自分の日記を取り出した。相変わらず飾りっ気のない日記だ。

「この、日記よ」

すると突然、明名さんの持っていた日記が光出した。それを明名さんは、天高く上に掲げた。

「……………」

僕たちはそれをただ、大人しく見守る？ だけだった。
やがて光は消え、ゆっくり手を下ろした。

「どう、明名？」

知鶴さんが確認をとると、明名さんは再び横に首を振った。

「やはり…ここには感じられない」

「じゃあ…どうする？」

「手分けして探すしかないわね」

すると、今度は知鶴さんも日記を取り出した。

二人は互いの日記を重ね合わせた。

「我ら今二人、現在に存在すべし。この身互いに違いあえる場にいるならば、今ここに記すこの場に、いづれ舞い降りよう…」

何やら二人は呪文らしき言葉を話し始めた。知鶴さんと明名さんの声が重なる。実際、この二人のやったことがまったく理解出来なかった。

「じゃあ二手に別れるわね。知鶴と昂介、私と深空の二組で。左右の方向に別れて行動する」

「了解」

知鶴さんは敬礼した。連られて僕も敬礼した。

「何かあったら、互いに連絡するように。あなたたち、携帯は持っているわよね？」

僕と深空は確認するため携帯を取り出した。

「大丈夫ね」

「それじゃあ」

僕たちはお互い左右に体を向け、それぞれ歩き出した…。

「……………って…僕はどうするんですかー!!?」

……………一人、忘れていたことも忘れていた。

不問

「あの〜知鶴さん？こんなにゆっくりしてていいんですか？」

あれほど最初は急ぐよ！とか励んでた割には、あちらこちらで買い食いしては止まっている。

こんなんで大丈夫なんだろうか…？

「急いでいる時こそ、落ち着いてゆっくり行くのがいいんだよ。急がば回るなって言うでしょ」

……………なんか…若干違う気がする…。

「ところで、細かい場所までわかってるんですか？」

「それは問題ないよ。近くまで行けば私が解るから」

「どっやって？」

すると知鶴さんは少しはにかんで笑い、

「秘密」

見たことのない笑顔で笑った。まあ…そこまで深く追求しても無駄だろう…その時まで待ってしよう。

「あのね昂ちゃん…前に、私たちの他にも能力者がいるって話…したよね…」

「ああ…はい…」

その前に、何故俺の事をちゃん付けて呼ぶのだろう…。それだけが疑問に思っただけで仕方なかった。

「その人…まだ生きてるかもしれないんだ…」

「?どういことですか?」

よく意味が理解出来なかった。正直、未だこの話にもよくついてきてない。日記の持ち主が生きていれば、日記の居場所は特定しづら。

その日記の持ち主がいれば日記の気配?みたいなものが掴みづらくなる。

簡単に言えば、日記の居場所がすぐに特定出来る場合は、すぐ近くに日記が存在するか、日記の持ち主が既に亡くなっているか…。あながち悲しい感じもする。

「じゃあ、今日記の気配は感じられないわけですか?」

「うーん…そうでもないんだけど…どう言ったらいいのかなあ…」

歩きながら知鶴さんは頭を抱えている。

しかし僕には理解出来なかった。

正味な話…僕は横浜に来ただけで良かったと思っている。

昔…一度だけ来たことがある。それはまだ父さんが家にいた頃…僕がまだ幼く、まだ“世の中”というものを知らなかった時…。

「ふう…」

結局、小さな公園のベンチに座り込んだ。

歩いたのは久しぶりなのか、知鶴さんは大きなため息をついた。

「いやー広いねー横浜は、全然前に進んでないんだもん…」

日記をパラパラめくりながらそんなことを呟っていた。

「ところで、いつになったら見せてくれるんですか、日記は？」

知鶴さんと出会って一ヶ月が過ぎた今でも、一行に日記を見せてくれる気配がない。

あの日記にどんな事が書かれているか、見て以来、ずっとそのことを考えていた。

「まだダメ。いつか必要になった時に、見せたげるから」

そう言っつて、知鶴さんは満面に笑っていた。

でも、その笑顔に騙されたような気もしたが…。

「ここにいましたか…」

静かに冷酷な声が背後から聞こえた。何故か、僕は後ろを振り向く事が出来なかった…。いや…振り向けなかった。

「よく解ったね、ここが…」

知鶴さんは冷や汗を垂らしながら、ゆっくり声のする方を向いた。僕もゆっくり振り向くと、

「私たちの組織の規模を甘く見ないでください。貴方たちのいる場所なんて、簡単な事です」

そう言つて、赤髪の男は僅かに微笑した。

他にも、五、六人黒スーツを身に纏つた男たちが男の背後に立つていた。

突然、僅かに身震いした。怖いのか？そうじゃない…なんか…別の事だ…だけど…」

「今度こそは逃げ出しましたか。まあ…貴女が私達に立ち向かう度胸のある人だとは…」

男が言いかけた瞬間、知鶴さんは僕の隣にはいなく、その時、赤髪の男が尻餅をついた。

「今日は観光に来たの」

殴つた？知鶴さんが？想定外な事に、僕は開いた口が塞がらなかつた。それだけ言い残し、僕の方へ歩いて来た。真剣な表情でどこかを見つめていた。男は殴られた頬を押さえている。

一瞬呆然としていたが、何事もなかったかのように立ち上がり…

「……………変わりましたね…………」

男はいつもの嫌み笑いはなく、憎しみを込めたような険しい表情で言った。

「何十年もこの世に居れば、人間誰だつて変わるわ」

言い終わると、知鶴さんそつと僕の手を握つてきた。微かに震えて

いるのが解る。恐いんだ…解ってる…。僕も強く握り返す。

「さて…私は無駄話をしにきたものではありません」

一步踏み込んで言うと、男は懐から一冊のノートを取り出した。なんてことない、青色で、明名さんのに似ている大学ノートのようなものだ。

「!?!?…それって…」

急に知鶴さんの顔が青ざめていた。ノートを見てから…あれはもしかして…。

「持ち主は存じませんが…確かにあなたの“お友達”の物、ですね?」

知鶴さんに向かって微笑んだ。それに対して、知鶴さんはまた震えていた。

「あなた…何処でそれを!?!」

「さあ…ね。それより、こちらにメリットはありませんからね」

すると男は、おもむろにも懐から取り出した銃を突き付けた。

「今一度お聞きします。あなたの持っているその日記、我らに譲って頂けないでしょうか?」

微笑みながら、知鶴さんに向かって言った。断るなら撃つ、男からは溢れんばかりの殺気がみなぎっていた。

それでも知鶴さんは、

「何度も言うようだけど、あなたたちには日記は渡せないわ!」

強く言い切ると、知鶴さんは僕の手を引いて走り出した。

「なっ!?!」

僕は引つ張られながらも走り出した。知鶴さんは顔を合わせず、前を向いて走り続けている。

「飛び込むよっ!コウちゃん!」

「えっ!?!」

すると、ようやく見えたのは、走る先にある黒い穴。あそこに飛び込むのか?

「逃がしませんよっ!」

男が何発か発砲したが、間一髪当たらず、僕らは穴に飛び込んだ。

「うあああああっ!」

「……………」

昂介達が逃げたのを見て、男は何食わぬ顔で逃げた“黒い穴”を見つめていた。

(マンホールを作り出すとは…やはり侮れませんね…)

男は一つ軽いため息をつく、銃をしまい、部下に告げた。

「横浜中、今いる構成員全てを使って包囲しろ。横浜から出すな。彼女らを逃がしてはならない。そして、本社からN o . 2 の出勤要請を出しておけ」

「は…はい！」

無表冷酷な顔をして告げた。

言い終わると、男は微笑しながら呟いた。

「天から参った燕の巣よ…ただいま我が元に舞い降りたまえ…」

竟笠

> 竟笠 <

「ここは？」

翔一は明名に尋ねた。明名は懐かしそうに辺りを眺めながら、問いに答えた。

「ここが竟笠^{おわがさ}。昔、横浜の海軍将校があつたため、1番に被害を受けた所よ」

「でも、今はその面影もないみたいだな」

辺りを見ながら深空は言った。当時は塀斜もない程焼け野原になっていたが、今は見る影もなく、賑やかな商店街となっていた。

「ええ、当時に比べれば、随分戻って来たわね」今までにない喜びの笑顔で明名は言った。

「ところで、本当にこの街の何処かに、明名さん達の探している日記があるんですか？」

うたぐり深く聞いた翔一に、明名は面倒臭そうに答えた。

「何度も言っているでしょ？私が言っただから間違いない」

自信ありげに明名は言い切った。対して翔一は何処からそんな自信が…と微かに呟いていた。

「で、肝心の日記は何処にあるんだ？」

なんやかんややっている二人を見ながら、深空は本題へ戻した。

「さあ？」

明名から出た一言は、聞いていた二人には聞き取れなかったようだ。

「え？」

「今…なんて？」

深空が聞き返すと、明名は面倒そうに

「だから、解らないの。というか知らない」

投げやりな答え方に、深空は知らぬ間に怒りが込み上げてきた。

「どづいうことだ？」

それでも冷静さを保ちながら聞く。

「今だから言うけど、あの場所を示しているのは、かつて私たちが生きていた頃の友人の住居。つまり、日記を所持している人間が現在も居るだろうとする手掛かり。ただしこれは、記されたのは60年も前だから、今現在生きてるかも解らないし、逆に日記自体が無くなっているかもしれない」

「それって…」

「今ここにあるのかも解らない…?」

明名は重いたため息を一つつき

「そんな感じね…」

ここまで来て振り出しか…と同じく重いたため息をついた深空であった。

「じゃあ…どうするんですか?」

沈黙の間を裂いたのは翔一だった。

「そうね…書庫のある場所で調べるか、はたまた自分たちの目で確かめるか…」

深空は明名の言葉に首を傾げた。

「自分たちの目で確かめるって?」

すると、明名は無言で深空の手を握ると、

「へ…?」

「翔一!あなたはここで大人しくしてるのよっ!?」

次の瞬間、深空は明名に引つ張られ走り出した。何も無い。そう思った時、先に眩しい光が二人を射した。

「うわっ！」

翔一が一瞬目を瞑る。また開くと、二人の姿は無かった。

「……………“飛んだ”のかな…」

二人が消えた後、翔一は羨ましそうに二人がいた先を見つめていた。

「先ほどの…貴公の友人か…？」

翔一の背後から、音の低い声が聞こえた。振り返ると、黒いコートを着た中年男が、そこに立っていた。

「え…あ…そうです…」

戸惑いながらも、翔一は答えた。

（誰なんだろう…この人達…）

その男の背後にも、数人黒いスーツを着た男達もいた。今、変なトコ見られたと 翔一は何故か内心顔を赤くした。

「そうか…」

そう呟き男は少し黙ると、今度はその顔に似合わない笑みを浮かべて再びその口を開いた。

「貴公には、しばしの間ご同行願いたい」

「え？」

いつの間にか翔一の背後にいた男一人に腕を掴まれ、身動きが取れなくなっていた。

「……………え？」

「申し訳ない。事が済めば、身柄は無事お返しいたそう。……………連れて行け」

中年男がそう言うと、翔一は二人に引きずられながら連れて行かれた。

それに対し翔一は、未だ自分の身に何が起きたか理解出来ず、放心状態だった。

竟笠（過去）

> 神奈川県横浜市竟笠区（60年前） <

目を開くと、現在私たちが住む程ではないが、豊かそうな町並みが広がっていた。

子供は道端で走り回り、大人はいそいそと仕事をし、その雰囲気にも明名は、何故か涙が流れていた。

「明名？」

「え…？」

受け答えると、ようやく頬に涙が付いていた事に気づき、グイと拭いた。

「いえ…」

「アンタの生まれって…もしかしてここ…とか？」

根拠は無かったが、懐かしがるように涙を流していた明名を見て、深空はそれとなくここが故郷と思っていた。

「いえ…ただ、一度だけ…幼い時にお父様に連れてきてもらったことがあるから…」

「思い入れでもあるんだ？」

場を和ますように深空は笑顔で聞いた。

「歩きながら話すわ」

明名も微笑みながら答えた。

「あれは…まだ三つの頃かしら…。」

再び懐かしむように柔らかな微笑みを浮かべながら、楽しそうに口を開いた。

「いつもお仕事で会う暇ないほど忙しいお父様が、久々に会ってお食事を一緒にしてくださるといっているので、私とお母様は喜んで行きました」

父親とは離れて暮らしていたのか、余程大きな仕事をしていたのかと、少し同情した深空だった。

明名とは状況が違うが、深空の母親も、一人前になるまで女手一つで育ててくれていた。だが今は昔の元気も無く、今は病弱な状態が続く、病院で過ごす日々を送っている。

「そこで初めて、ここに来ました。そしてお食事を済ました後、お父様に手を引かれながらこの街並みを歩きました。今ほど建物も無く、人通りも無かったです。人々の人情もあり、とても良い思い出ですわ」

子供のようにはしゃぎながら話している姿はとても輝いていて、普段の明名とはまるで別人に見えた。

「いいな、そうゆうの」

話を聞きながら相槌を打った。しかし、一度だけ来た所に、すぐに親しくなった知り合いなどいるのかと、はなはだ疑問に思った深空だった。

「あ、明名姉ちゃん！」

通りすがった小学生の男の子が、二人の所へ駆け寄る。

「瞬太？久しぶりね」

坊主頭の少年が、澄んだ目でこちらを見てみると、明名はスッと手を出し、微笑みながら少年の頭を撫でた。

「元気だった？」

「おうっ！小太郎も花子も、みんな元気だぜ！」

そう言ってガッツポーズを見せると、明名は再び微笑んだ。

「そう、それは良かったわ」

「…？このねーちゃん、誰？」

ようやく深空の存在に気付いた瞬太は、指差しながら明名に訊いた。

珍しい物を見るように深空を見ていた。首を上下に動かして見ていたので、服が珍しいのだろうか、服に手を当てながら少し照れていた。

「ふふっ…私の友人よ…深空と言っの」

「よ、よろしくな…？」

妙にどぎまぎしながら、瞬太に向かって手を振った。

「ふーん？」

持っていた木の枝を振り回しながらまじまじと見つめる。背後に回ってはじろじろと、珍しそうに眺めていた。

「このねーちゃんて、外国の人？」

瞬太から見ると見たことのない服装だった深空は、異国の人かと思い込んだ。

「瞬太ー！ご飯だよー！」

一角の民家から人影が見えた。そこから、女性の張り上げた声が響いた。

「あ、母ちゃんが呼んでる」

「では、私達は行くわ」

瞬太が帰り際に大きく手を振っていた。明名も微笑みながら手を振

り返した。

「でさ、ここで何を調べるんだ？」

明名に考え無しについて行くと、そこは区が経営している図書館についた。この時代に図書館なんてものがあつたのか…。深空の中で何かしら期待を抱いていた。

それでも今の図書館に比べたら小さい。一部屋の大きな場所に三つ四つ、本棚が置かれているだけだった。

「調べるワケではないけれど、探し物をね」

本棚から本を取り出しではパラパラと流し読みをし、それでも隅から隅まで何かを探すようにしていた。

「手紙…封筒に入ってるはずなんだけど…」

「それを探すんだな？」

「ええ。お願い出来るかしら」

振り向いた時には、深空も同じように本を流し読みしていた。

「……………」

少しずつ近づいている、両心がそう思うのであった。

「あの…深空？」

「ん？」

呼ばれ深空がその手を止め明名の方を見ると、あの明名が頭を下げていたのが解った。深空も目を丸くして明名を見た。

「あの…ごめんなさい」

「ど…どうしたんだよいきなり…」

予想外の行動に驚きながらも、もう頭を上げてくれよと説得した深空だった。

気が済んだのかようやく頭を上げると、今度は深空の手を握り口を開いた。

「ずっと疑ってた。こんなしとやかさも淑女のカケラもない人と、これからやってけるのか…」

「はは…」

「一応明名なりに気を使ってるんだよね？」と、心底に疑問を抱きながら、苦笑いをしながら黙って明名を見た。

「でもあの時、シヨカンで飛んだ時…涼輔を助けてくれた…」

「涼輔？」

頭の記憶を探る。確かシヨカンで飛んだ時、夜で…気の軽そうな男性が現れた。

『ブラックだけど…飲めるかい？』

あの時飲んだブラックコーヒー…今まで飲んだ事の無い。なんだか懐かしい味がした。

「今まで飛んだ相手は、あそこで涼輔を助けようとはしなかった。子供を助け、そのまま…見殺しに」

「さっさと探そうぜ」

辛い事を言わせているようで、お互い気を悪くしないようにと、深空は口を止めた。

「……………そうね」

思いが伝わったのか、微かに微笑みながら、明名も探し物に没頭した。

それから一時間、最初に声を上げたのは

深空だった。

「おいっ！これそうじゃないか!？」

手に持って見せたのは、少しホコリ被った白い小さな封筒。面には何も書かれていない。

「……………」

明名は黙って手にとり開けてみる。中身は、手紙らしき紙が一枚、入っているだけだった。明名は真剣な表情で内容を黙読する。

「なるほど……」

読み終わったのか、一息つくと目を閉じたまま微笑した。

「何か、解ったのか？」

「……………え、ええ…そうね」

妙に口ごもっていた。

「とりあえず現代に戻りましょう。翔一が心配だわ。それから、日記を探しましょう」

手紙の内容は話そうとせず、作り笑いをした。

海水浴（前書き）

皆様お久しぶりです！執筆断念しそうになった彩BOCです。なんとか断念を振り切り、最新話を書くことが出来ました。これからも頑張りますので、よろしく願います。

海水浴

「夏だねー!」

早朝、実家の二階にある僕の部屋から元気の良い声が響いていた。それも窓から外に向かって

「暑いーっ!」

この叫び声で寝ていた体を起こした。

「何やってるんですか?」

呆れた声で問いかけてみるが、聞こえてないのか知鶴さんは一向にこちらを向こうとはしない。それどころか今度は

「朝だよー!」

と繰り返し叫んでいた。

天然なのは結構だが、少しは近所迷惑も考えてほしいものだ。特に僕への配慮を…。

「知鶴さん…」

ダメ元でもう一度声をかけると、ようやく気づいたのかこちらを向くと、「よっ!」と言いながら手を振っていた。

「朝から元気ですね…」

先日、日記を探すため横浜に出かけたものの、二手に別れた時僕たちは、まったくの収穫の無い上に例の赤髪の男に出くわし間一髪逃げ切ったが、またいつ襲ってくるか解ったものじゃない。

それなりの対応が出来れば、話は別だけど。

翔一もはぐれて迷子になり、帰る頃になってようやく会えたし

「いやーほら、もう夏じゃん？なんだかわくわくしてきてねー」
猫のように目を細めニンマリと笑うと、再び外を見て鼻歌を歌っていた。

こんなことを思うのはどうかと思うが、一体この人はいつ亡くなったのだろう？夏になるとこんなにはしゃぐのだから、夏ぐらいなのかと、勝手な結論を出していた。かと言って、容易に「知鶴さんはいつ亡くなったんですか？」なんて聞けるはずもない。

ここから横浜は遠いわけでもない。電車で行っても一時間はかからない程度の距離だ。何かの用事で横浜に行ってしまったのも有り得ない話ではない。

「そんなに夏が好きですか？」

そんなことなら聞けた。しかし、僕ははしゃぐ程夏は好きではない。かと言って嫌いでもないが、色々トラウマ等があるわけ…。

「大好きに決まってるじゃん！あ、そーだ、海行こーよっ海！」

好きかと訊いた時点で墓穴を掘ったと感じていたが、予感的中。朝から聞くんじゃないかな。

でも、大学は昨日から夏休みに入っている。何日か講義に出なければ

ばならないのはシヤクだが、今のところは無いはずだ。横浜も、夏休みに入ってからにすればよかったかな。

「でも、知鶴さん水着とか持って無いじゃないですか」

決して知鶴さんの水着姿を拝みたいわけではないが、この人の性格上、制服のまま海に入ってしまったい、びしょ濡れで帰るなどなるのは間違いない。

「それなら買いに行こーよ！あ、どうせなら明名達も誘ってえ…」

一人で続々と今後の予定を立てていつている。もういいや、好きにしてくれ…。

「さーて、行くよコウちゃん！」

「はいはい…」

でも、知鶴さんがこの調子なら当分考え事しなくて済みそうだな。

僕たちの住む中瀬から隣駅の篠津で降り、少し行った所にある大型デパートへ出かけ着くと、知鶴さんと知依奈は飛びつくように水着を探しに行った。面倒は明名さんと深空が見てくれるそうなので、翔一と僕はその辺を回っていた。

それで何故知依奈が一緒かというと、今日は明名さんがシヨカンのシフトに入っていて、深空が一緒に行っていたので、一人だけ外すのはどうかと、決断する前に付いて来た。迷惑をかけてなければいいんだけど…。

「長いなー」

「女性は慎重だから、時間かかるんだよ」

翔一は苦笑しながら言った。何故か翔一は女性心理に詳しい。

「じゃあ、お前もそうなのか？」

「な、なんで僕もなのさ…」

顔を赤くしながら否定していた。実際、翔一の顔は小顔だし、何より童顔なので女の子に間違えられることも少くない。僕も初めて会った時は脈ありかと思っただが、後から知って深く肩を落とした。とりあえず、翔一に対して“女の子”は禁句らしい。まあ可哀想だから言わないだけで。

「でも、なんだかいきなり賑やかになったね」

自動販売機で缶コーヒーを二つ買い、一つ翔一に投げ渡した。背もたれのあるベンチに座りフタを開けた。

「だな。うちでも知鶴さんが騒がしくてしょうがない」

今朝の事を思い出したため息を吐いた。黙っていればあれで綺麗な人なのに…。

「あははっ、昂介も大変そうだよね」

翔一は一口飲みだす。

「でも、またいつアイツらが襲ってくるか解らないね…」

横浜での出来事はつい三日前のことだ。

あの時は知鶴さんのおっさの機転でマンホールを使って逃げたが、地上に出た後も何度も追いかけられた。しかし、横浜から出るとそれきり追ってくることはなかった。一体何が目的なのか、本当に日記だけなのか…。
どちらにせよ、これから海へ行くのに、十分に気を付ける必要があるな。

「海だー！ー！」

それから四つ隣の桜峰の海に着いた。今日の昼間は特別日差しが強かった。そういえば、今年最初の猛暑になるでしょうと、気象予報士が言っていたのを思い出した。既にこの暑さでグロッキーになりそうなのに、知鶴さんと知依奈は馬鹿みたいにはしゃいでいた。知依奈は水色のタンキニ、こちらはまだ幼いから良いとして、目のやり場に困るのが知鶴さんだ。でも水着で見る知鶴さんのスタイルには、改めて感動した。白のビキニがとても似合っている。

「昂介：鼻の下伸びてるよ…」

横で見ていた翔一が、呆れ顔で僕をたしなめた。僕ら二人は、少し休憩でパラソルの下で休んでいた。と言っても、まだ海に入ってもないが…。

「仕方ないだろ、男の本能に逆らう術はないからな」

自分でも言っていて、危ない事を言っていると理解した。

深空とも付き合いは長いが、水着姿は初めて見た。というか、今まで男混じりな女の子と見てきたが、水着を着ると一層女の子らしさを感じられた。

「いつの時代も、男とは変わらないものね…」

冷たい視線が、背後からつらく突き刺さった。振り向くと、哀れんだ表情で僕を見ていた。確か明名さんも水着を買っていたと思うが、上着にシャツを着ていて、水着が隠れていた。わざわざ水着まで買ったのに、海に入らないつもりだろうか。

「明名さん、海、入らないんですか？」

それとなく聞いてみると、

「日差しが強いから、肌が焼けてしまうから遠慮しておくわ」

と見事にそつけない返事が帰ってきた。せっかく買ったのにもったいないですねと粘ったりしたが、一向に海に入ろうとはしなかった。下が水着なので、あのシャツの下も水着を着ているはずだろうけど、いくら目を凝らしても見えそうにない。

「諦めなさい。私の水着を見ようなど、100年早くてよ」

「こ、昂介…」

「あ、いや…別に俺は…」

不意に、頬に冷たい感触がした。水？

「さつきから呼んでるのにー！早くおいでよー」

水しぶきの原因は知依奈達だった。海からすくい上げた海水がしょっぱい。

「先輩も、早く入りましょうよー」

ぐいぐいと知依奈の細い腕が僕の腕を引っ張る。

「い、いや…俺はここで休憩して…」

「さつきからしてるじゃん。ほら、行くよー」

知鶴さんが僕の腕を引くと、知依奈は翔一の元へ寄った。

「坂本先輩も、ほら早く〜」

「ち、知依奈ちゃんっ!?!」

ぐいぐいと知依奈が翔一の腕を引っ張ると、翔一の顔がたちまち真っ赤になっていった。

「おい翔一、顔大丈夫かよ?」

「ぼぼぼ僕はだだだだだ大丈夫!」

明らかにしどろもどろしている。見ているこちらとしては楽しい。翔一が知依奈の事が好きだ。それは僕らは暗黙の了解だが、知依奈だけそのことを知らない。てか、あそこまで意識されてるんだから、いくらなんでも気付くと思うが、よく解らない。

「明名も、せつかく水着を買ったのに勿体ないぞ」

「わ、私は別に…」

深空は無理やり明名さんの手を引き、海へ連れて行くとした…その時

「キャッ!?!」

ザッパーン!

何かにつまづいたのか、明名さんは思い切り顔から海へダイブした。まるで漫画で見るとような、ドジっ子が石につまづいて大袈裟に転ぶように、海が大きな波しぶきを上げていた。

「ぷっ…あははははーっ！明名のドジっこー！」

知鶴さんが腹を抱えて大笑いしていた。確かにすごい転び方だったな。ムービーでも撮っておくべきだったかな。

少しして、海の中から何かが高い上がってきた。その形相は貞子…もとい、まるで海坊主のような登場の仕方だった。

「笑ったわね…知鶴う…」

恐ろしい鬼のような目つきで、知鶴さんを睨みつけていた。

「わ、笑ってないって、…ぷ…あははははーっ！」

「笑うなー！！！」

「あれ？」

ふと、明名さんから何やら赤いものが入った。僕は目を疑ったが、明名さんのシャツが海水で濡れて…

「あ…」

「……」

中の水着は、確かに真っ赤な…

ゴツ！！

頭に、鈍い音と強い衝撃が走った。その後は、塩辛いものが口当たりを刺激していた。

「あつはははー！！！」

桜峰から中瀬駅は一時間近くかかる。だから明るいうちに電車に乗っているのが一番いい。それほど遠いわけではないが、滅多には来ないけど今日は結構楽しかった。

そして今、僕の顔を見て大笑いしているのは、他でもない、知鶴さんだった。帰りの電車に揺られながら、僕は窓から見える風景を眺めていた。

あれから、どうやら僕への攻撃は踵落としだけでは足らずと、数え切れないほどのコンボを決められたらしい。踵落としの時点で気を失っていた僕は、痛みどころか何が起こったのかも解らなかった。

「知鶴さん、そんなに笑ったらかわいそ…ぷっ」

慰めに来たのかそれともただ単に笑いにきたのか、深空まで僕の前
の席に座るなり笑い始めた。

「はあ…」

「ふん、鼻の下伸ばしているあなたがいけないのよ」

明名さんは隣の座席でまだ怒っているのか、口を尖らせ外を見ていた。

「でも、明名さんだって最初から水着でいれば…」

「もしかして、まだやられ足りないの？」

不気味な程、優しく微笑んだ笑顔がこちらに向けられた。生優しい声も添えられて…

「いや…ホントすみません…」

「でも、楽しかったよねー。コウちゃん達が夏休みの間にまた来ないなー」

小さな子供のように足をパタパタさせた知鶴さんが、海があった方向を物寂しく眺めていた。

「まだ夏休み始まったばかりですから、来月になれば全然行けますよ」

夏休みは基本的な高校までと同じだ。違うところと言えば、高校の時より出校日が多い…といってもほとんど講義で出なきゃ行けないんだけど…。

「確かに、いい潮風だったわね。また来るのが楽しみだわ」

ようやく見せた明名さんの笑みを見た僕は、意を決して冗談を口にしてみた。

「その時には、水着を見せてもらえるんですね」

その言葉を合図にしたように反射的に明名さんはその場に立ち上がり、直ぐに僕は危険を察知出来た。早歩きでその場を去ろうとしたが…

「触点、痺点」

肩に触れられたのを境に、突然足がピタリと止まってしまった。必死に動かそうと努力を惜しむが、その結果はあまりに無惨で、足の感覚がまるでなかった。

背後から不敵な笑い声が聞こえた時には、既に走馬灯を見いだしていた。

海水浴（後書き）

追記。もう一つ作品、優しき風が吹く頃には、今一度読みやすく書き直すよう努力致しますので、よろしくお願いします。

プレスレット（前書き）

自分もこの作品を読み返し、読みにくい点はある程度訂正したつもりです。よければみなさんも読み返していただけると幸いです^^

プレスレット

「ふあゝあ……」

目をこすり、近くにあった目覚まし時計に目をやる。

8時10分。僕にしては早い起床だ。

いつもならもう1、2時間は寝ているところだ。講義のある日は別だけ。

おまけに、昨日の海での疲れが取れない。おかげで体のあちこちが筋肉痛だ。伸びをしようと腕を伸ばしてみようとすが、痛くて出来そうにない。

「……………」

まだ早いし、二度寝しようかな、そう思ったとき、どこかでR・Sの着メロが鳴り響いていた。朝から誰だよと、文句を言いながらパソコンのそばにあった携帯に手を伸ばす。

液晶画面には、知依奈と表示されていた。着信のようなので、早く出るのにこした事はないが、出てまた買い物に書いてこいだの言われるに違いない。そして、その際には何故か僕とペアルックを買いたがる。それは多分、知佐人がいないから……。

いつの間にか着信が切れていた。悪いと思いかけ直そうとすると、すぐさままたかかってきた。今度はすかさず出る。

「もしもし?」

「あ、コウ先輩、どうしてすぐに出てくれないんですかー?」

案の定言ってきた。いつものことだから気にせず返事をする。

「今起きたんだよ。俺が起きるの遅いの知ってるだろ？」

去年、知衣奈が毎朝家まで何度も起こしに来ていた。親も喜んで許すので好き放題されたのを思い出した。時間が30分も違うはずなのに本人は、

『先輩のためですから』

と問答無用になっていた。しかし、今年になつては引越してから来なくなった。おかげで朝はゆっくり起きれるが、少し寂しい気もした。

「あ、じゃあまた朝はちいが起こしに行つてあげますよっ」

知衣奈の声が活き活きとして聞こえる。ありがたいけど、ここからでは実家みたくすぐ来れる所ではない。大学からは近くなったが、知依奈の家からは遠くなった。

いや、ここからなら大学も近いし、お前も遠回りになっちゃうだろ」

「大丈夫ですつて。じゃあまた夏休み明けに行きますね」

強引に決められたが、知衣奈がいいならそれでいいと思った。

「ところで、何か用か？」

本題に戻す。

「あ、そうだ。コウ先輩で、今日予定とかありますか？」

今日はない。大学の講義は明日だし、バイトなんてもあれつきりだ。

「ないよ。でも、俺今忙しいんだよ」

そう、今は寝るのに忙しい。こんな早くに起きたところで再び睡魔が襲ってくる可能性大だから、大人しく寝ていたい。しかし、それでも知衣奈は引き下がる事はなかった。

「寝るのに、でしょ？それにもう先輩のアパートの近くまで来ちゃってますよ？」

さすが解ってらっしゃる…ていうか来てるって！？

「せーんぱいっ！」

ノックと共に、元気の良い声が扉越しに飛び込んできた。しびしび重い腰を上げ、知衣奈を迎えに行った。

ドアを開けると、お出掛け準備万端の知依奈が立っていた。

「あ、おはようございます！コウ先輩っ」

無理矢理起こしたくせに…という突っ込みはあえてなしで、僕は出来るだけ笑顔を繕った。

「おはよー」

重たいまぶたをこすりながら返事をした。

「もー早く着替えてくださいよー」

「解った解った。とりあえず着替えるから、外にいてくれ」

「はい」

知衣奈を再び外に出し、そそくさと着替えを済ませる。そういえば何処行くつもりなんだろ？

「ちいー！今日は何処行くつもりなんだー？」

「中瀬でお買い物してからー、シヨカンでお昼？」

中瀬ってここじゃないか！まあ電車を使って遠出したいと言われても困るしな。

「了解」

そこらへんを回るなら、前に買ってきた新品のジーンズを履くのはもったいないな。
いつも通りでいいかな？

「コウせんばーい！まだですかー？」

「今行くー！」

財布とケータイをポケットにねじ込み、花坂荘を後にした。

僕たちの住む中瀬には大きな商店街がある。花坂荘から10分歩いた所に、中瀬通りと大きな看板があるので解りやすい。店数もそれなりにあり、休日の時など人通りは半端じゃない。ファーストフード店や喫茶店など、不自由は無いほどだ。

「あ、このアクセ可愛いー」

アクセサリーショップを見かけると、店先に飾られていたアクセに目を奪われていた。

見ていたのは、綺麗な小さい貝殻があしらわれた、可愛い女性モノのブレスレットだった。取り外し可能のやつで、腕の太さに合わせて付けれる。

「ねえコウ先輩。これ、お揃いのアクセにどうですか？」

「お揃い？誰と？」

持っていた缶コーヒーに口をつけると、知衣奈は悪戯に微笑んだ。

「誰って…ちいとに決まってるじゃないですか」

「ぶっ！ー！」

思わず、口に含んだコーヒーを吹き出した。

「ちい達の結婚記念にい〜」

「待て、どさくさに紛れて変な事言ってるな」

既にブレスレットの会計は済まされ、僕の腕にはめている途中だった。

「ほーら、可愛いじゃないですか」

「人の話を聞けって！」

「これでちいとお揃いですね」

僕は左腕、知衣奈は右腕といつの間にかパールツクが完成していた。まあ…いいや。知衣奈が喜んでるなら。知衣奈の笑顔を見て苦笑しながら、ふとそんなことを思った。

『ちいちゃんを、もう二度と泣かせたりはしない』

脳裏によぎったのは、翔一のあの言葉。知佐人が亡くなった2日後に、教室で聞いた言葉。

ふと、近くに翔一がいるような気がした。辺りを見回すが、それらしき人影は見つからなかった。

「コウ先輩？どうかしたんですか？」

僕の行動に不思議に思ったのか、知衣奈は小さな顔が僕の表情を覗き込んでいた。

「いや…」

大丈夫。それだけは必ず守る。ようやく、知衣奈は殻から抜け出せたのだから。

「コウせんぱい」

「ん？おわっ!？」

知衣奈は僕の顔を見るなり笑顔になり、いつの間にか腕を絡ませていた。

「今日はデートなんですから、いいですよね？」

強引に組まれたその腕は、ちょっとやさつとでは振り払えない力強さだった。もちろん、嫌ではないが、人前となると恥ずかしい。

「…はあ」

鼻の頭を掻きながら、照れているのを押し隠したため息をもらした。

「あれ？」

ふと、見覚えのある顔が前から歩いてきた。

「知鶴さん、それに明名さんも」

お決まりの白黒のセーラー服を来た二人が中瀬通りを歩いていた。

二人だけ雰囲気が違うのは、やはり今の街並みに見慣れていないからだろうか。

「あ、コウちゃんにちいちゃん！」

僕たちに気づくと、人目を気にせず大きく手を振っていた。こつちが恥ずかしいからやめてください…知鶴さん…。

「知鶴さん明名さん、こんにちはー」

知衣奈は元気よく二人に挨拶をした。よくよく考えてみれば、知衣奈は現在高校三年生。対してこの二人も当時の年齢からだと同い年の筈だが、何故か知衣奈は二人に対して敬語を使う。正体もバラしてないはずなのに、なぜ後輩目線なのかと疑問に思う。

「こんな昼間からよくもまあ、堂々と男女腕組んで歩けるものね。時代の変化とは恐ろしいものね…」

明名さんは僕らの腕を組んでいる姿を見ながら、ぶつぶつと嫌味が聞こえてきた。

「明名おばあちゃんくさーい。あれ〜？もしかして明名さん〜、羨ましいんですかー？」

「お、おいつ!？」

「なっ!？」

知衣奈が悪戯に笑うと、明名さんは顔を真っ赤にしていた。

「明名さんて、まだお付き合いとかされたことないとか？」

凶星なのか、明名さんの顔はみるみる赤くなっていった。この人たちの時代では、恋愛は仕方なかったのではないだろうか。ましてや明名さんなど家柄が有名な所だと、さぞ厳しいだろう。さらに戦争など、恋もする暇もなかっただろうな…。

「ば…馬鹿言わないでっ！私だって交際の二つや二つ…」

「そーだねー。確か、明名って涼輔に…！？」

知鶴さんの言いかけた口を、明名さんは瞬時に塞いだ。

「だから、あんなやつとはなんにもないと言っているでしょうっ！？」

タコのように真っ赤になっていた明名さんは、今までにない表情の豊かさを感じた。

「涼輔…」

思い当たる名前に、僕は少し前の記憶を引き出した。確か、知鶴さんと学校へ探し物を探しに行った時…。

「まあ立ち話もなんですし、シヨカンにでも行きましょーよっ」

手を振り上げ案を提案すると、知鶴さんも元気よく乗ってきた。相変わらず明名さんは、顔を赤くしたまま何かを呟いていた。

「私DXチョコパフェで！」

「ちいは〜…ストロベリー・パフェで」

「ブラックをもらおうかしら」

「俺もブラックで」

「かしこまりました」

注文を聞いた捺美さんが笑顔で注文を繰り返して、中へ戻っていった。戻り際に、いつでもバイト待っているからと聞こえたのは、多分気のせいだろう。

「それでそれで〜？明名さんの恋バナ教えてくださいよー」

「恋バナ？」

知衣奈の言葉に理解できていないのか、明名さんの頭の上に？マークが無数に浮かんでいるような気がした。

「恋の話ですよ。明名さんの」

「だから、私は色恋などに惑わされる程軽々しい女ではないわ」

「またまた〜…さっきの涼輔さんて人がそうなんでしょー？」

「だから…！あれは違うって…！」

「ん？それ、どうしたの？」

知衣奈と明名さんが恋バナで夢中でカヤの外になった知鶴さんが、僕の左腕にあったブレスレットを見て訊いてきた。

「ああこれ、さっき中瀬通りのアクセサリーショップで買ったんですよ。…ちいとパールツクで…」

後半声が小さくなったのは言いたくなかったから仕方がない。しかもパールツクだなんて、いつの言葉だよ…。

「ペあるつく？」

「えーと…こういう同じアクセサリーを二人で付けることです」

不意ながらも知衣奈の右腕を指すと、不思議そうに僕とちいのを見比べていた。

「おー、お揃いってやつだね。お熱いねえ〜」

このこのーと僕に肘打ちを喰らわせると、次に僕の腕を引っ張り、興味津々にブレスレットを見ていた。

知鶴さんの手、ひんやりとして冷たい…少し、ドキッとした。

「うーん…」

ありがとと言って離すと、知鶴さんは首を傾げ何かを考えているようだった。

「知鶴さん？どうかしたんですか？」

「うーん…このあくせさりーって言うの？どこかで見たことがあるような…」

もう一度見せると強引に引っ張り、眉間にシワを寄せながらプレスレットを凝視していた。

知鶴さんの時代でも、こういう洒落た物があったりしたんだなと、時代の共通点に再び興味を持った。

「あゝ思い出せないっ！いつだっけなあ…」

癩癩を起こしたように机に伏せていると、捺美さんが注文した品々を持ってきていた。

「はい、DXチョコパフェにストロベリー・パフェ。と、ブラック二つね」

注文が来てからも、知鶴さんはDXチョコパフェを食べながら、僕のプレスレットを睨みつけていた。

確認、そして再会

「うん…」

このまるで墓の中から這い出てきそうなたづめき声を上げているのは、もちろん僕ではない。

「誰がお化けよっ!」

そんなこと言っていないです…。

昨日、シヨカンで知依奈達と別れた後、知鶴さんがアパートへ行っていた?と唐突に訊いてきたのだが、それはマズいと反対したはずなのに、強引に僕の部屋で寝泊まりしていた。

まあ、実家でも親の目があったとはいえ、自分の部屋で寝てたしな。そして今日、昨日と同じ調子で起きていた。このうめき声で起こされたのは言うまでもない。

「思い出せない…気になるなーもっつ!」

癩癢を起こしている理由は、僕の左腕に付けているブレスレットのことだ。帰ってきてからもずっとブレスレットを凝視していて、付けている側としては居心地が良いわけがない。

大雑把そうなのに、こういうのには繊細なのだろうか。

「誰が無頓着よ」

今度は口に出ていた上に誇張されているのは気にしないでおう。

8時14分。今日は講義があるので、いつまでも家にはおれない。

朝食を用意して食べている僕だが、知鶴さんは食べる気配がない。

「知鶴さん、とりあえず飯食べてからにしましょうよ。それからならいくらでも思い出せばいいし」

「ダメツ！気になつて食べれない！」

ただっ子かとツツコミしそうになった僕は埒があかないと思い、知鶴さんに手を出してと言った。解らず差し出された腕に、僕は付けていたブレスレットを巻いた。

「え……」

「思い出すまで付けといていいんで、とりあえず飯食べましょう？」

放心状態だった知鶴さんだが、すぐさま喜んでくれて、朝食にありついた。

しかし、その喜びもつかの間だった。

「よし、なんか思い出しそうだから、このまま飛んじゃおー！」

「ぶっ！」

思わず口に含んでいた牛乳を吹き出してしまった。デジャヴか？前にもこんな事があったような気がする。

「さあさあ早く！過去へひとつ飛び〜」

ぐいぐいと手を引かれ無理矢理その場に立たされた。

「いやいや！今日俺これから講義があるんでっ、飛ぶのはそのあとでも…」

「そんなの待つてられないって！行くよー！」

有無を言わず強引に手を奪われ、アパートの狭い一室の中で僕たちは飛んだ。

「で、ここは何処ですか？」

パツと見て、色んな店が縦に並んでいる場所についた。商店街…とまでは言わないが、小さな店が所狭しと並んでいる。

「ここはね、北中瀬っていうの。今の中瀬通りがある所だよ」

ようやく理解した。北中瀬はどこかで耳にしたことがある。いつか現在の平成に年号変わるとき、地域の変化などで北という位置表示を消して、中瀬という町にしたらしい。ここはその当時の時間に来たのか。

「今日はここに用があるんですか？」

「そう思ったんだけど、よく考えればあくせさりーのお店なんて、この時にはまだ無かったんだ」

辺りを見回しても、とてもあの時見たアクセサリーショップは見当たらなかった。まだ新しい外装から、つい最近建てられたものだと思っ出した。

「どうします?」

「とりあえず思い当たる所から探そう。まずは…学校だ!」

日はとうに暮れていた。学校には職員室だけ光が灯されていた。知鶴さん曰わく、この時間に見つかるとタダじゃ済まないらしいので、懐中電灯を持参して調査を始めた。先ずは教室。

「どこだー?あくさそりー…」

「アクセサリーですよ…。でも、当てもないと…」

「私が現代へ来たときには付けてなかったから、多分この時代の何処かに置いて来たんだと思う。…いつ何処に置いてきたのかハッキリすればいいんだけど…」

知鶴さんは難しい顔をしながら搜索に励んだ。でも、一向に見つかる気配はない。

「うーん…、図書室へ行ってみようか」

そして知鶴さんの提案で次は図書室に着いた。相変わらず僕から見

たら古めかしいようなものばかりだが、この中で以前気になる文献を見つけたのを思い出した。

「これだ…」

悪を貫き砕くという意味合いを込められた『ゴルバドの矢』という神話。

その昔、ある街にとても仲の良い男二人がいた。名はカルマとアルテといった。どちらも互いの意志を尊重しあっていて、いつまでも親友だと評判だったらしい。

しかし、カルマの親友…アルテは突然金に困りだし、親友に迷惑はかけれないと不本意ながらも悪人から金を借りる。

それから数日経ったある日から、アルテは人を襲うようになってしまった。お金を借りたのが運の尽きで、膨らんでいった借金を返すアテもなく、人から金を巻き上げるしかなかった。それを知ったカルマは、慌ててアルテの前に…。

「あれ？」

それからは、ページが無くなっていた。破られた後がある。以前はこの先があつたはずなのに…

「コウちゃん、あつた？」

背後から知鶴さんの声がした。破かれたのが僕だって勘違いされても困ると思い、すぐさま本棚に戻す。

「い、いえ…まだ」

「うーん…一体どこで落としたんだろ…」

すると、不意に強烈な光が背後から襲った。

「こらー！こんなところで何やつとるかー！」

「!？」

突然の大声に足元がすくんでしまった。同じく、知鶴さんも強張った表情をしていた。

「この時間帯が一番危ないと言っとなるだろうが！」

「…あれ？」

この声どこかでと呟いた知鶴さんは、懐中電灯の光を声の方に当たった。

「うわっ眩しっ！」

「!?!?!?!りょ…涼輔!?!?!」

以前、僕を助けてくれた銀髪の青年が、突然の光におどけていた。

「あはは…久しぶりだな知鶴…。それと…都築か？」

「さあ、ブラックは飲めるかい？」

「あ、はい、頂きます」

わけも分からず喫茶店に着いた時には辺りはすっかり暗くなっていた。表には湘館と名前があった。何か引っかかる名前だと思ったが、その思考はすぐ途切れた。

「でもびっくりした。涼輔、コウちゃんの事知ってたの？」

「え？都築のこと？そりゃあだって…なあ？」

わざわざもつたいぶるようにして僕に振ってきた。

「……」

そういえば、知鶴さんにはまだ言ってなかったんだ…。

あの日、資料探しに図書室に行った時、ヘマをして本に埋もれてしまったところを、偶然神木さんが通りかかったのを助けてもらったのだ。まして自分の正体をバラさず、拳げ句の果てには同じクラスメートなど後には引けない状態になってしまった。

「うん。今彼と飛んできて…」

「あーこのコーヒーは美味しいですねえ！！コクがあって飲みやすいですし！最高ですよ！」

ヤケクソ気味にブラックを大絶賛した。

知鶴さんは驚いて目を丸くしていたが、後には戻れないから仕方が

ない。

「あ…ああ。実は最近いい豆が入ってね。味見してほしかったんだ」
神木さんは状況が解らずも、僕の話に乗ってくれた。恩に着ります
神木さん！僕は心の中で神木さんを拝んだ。

「そうなんですか。ブラックって全部味は苦いだけかなって思っ
たんですが…」

「まあ、一般的にはそうかもね。でも、苦味を抑えたものとか、飲
みやすいものとかは作り方次第だよ」

ふむふむと僕は頷いた。今度シヨカンに行った時伝えておこう。

「…ちょっといい？コウちゃん」

「え？」

むんずと引かれた腕を神木さんと離れた所まで連れてかれる。

「ど、どうしたんですか？」

「あのさ、もしかして…涼輔にあなたの正体…」

「すみません」

口にされる前に僕は頭を下げた。僕は神木さんとは級友として話
てしまったなど全て事情を話した。知鶴さんは大きなため息を吐い
た後、神木さんの方へ振り向いた。

「まあ、そのうちバレるんだし…先に話しとこうか？」

「そうですね…」

僕たちはカウンターに向かい、苦笑いを浮かべながら事情を話した。

「へえ…そんな事情があったんだ…」

カウンターに頬杖をつきながら事情を聞いた神木さんは驚くことも、また胡散臭い目で見ることなく、むしろ興味があるような表情をしていた。

「まあ、信じるのは難しいと思うけど…とりあえず事情だけでも」

「ひとまず、昂介は未来から来た大学生で、知鶴はその未来に行ってきたわけだ」

うんと年上でまだ会うのは二回目なのに名前と呼ばれてしまうと、急に親近感が湧いた気がした。

「まあ…そんな感じかな…」

「でもさ、なんでそんなこと俺に教えたんだい？こんなこと言うのは言い方悪いかもしれないけど、多分…というか俺には関係のない話じゃないか？それに、実際その話は少々信じがたいしな」

神木さんは淡々と言った。まさにその通りだ。確かに考えてみれば、異常が起こっているのは知鶴さんと明名さんだけで、その知り合いだからと言って同じような事が起きているはずがない。

確信は無いが、少ない可能性が脳裏をよぎった。

「涼輔さ…あの時みんなで購入した日記帳、まだ持ってる？」

それを聞いた神木さんは、キョトンとした表情だった。

「・・・ああ。半月くらい前にみんなでヨネばあのところで買った日記帳だろ？毎日ではないが、度々書いていたよ」

「そっか」

知鶴さんのその笑顔は、何か取り繕ったようなぎこちないものだった。

「よかつたらその日記、見せてもらえないかな？」

「ん？日記帳をか？」

知鶴さんが頷くと、神木さんは嫌な顔一つせずに分かったと言いつつカウンターの奥へ入っていった。

「どつするんですか？」

「ちょっと…ね。確認したいことがあるんだ」

そうやって、知鶴さんはカップに注がれていたコーヒーを見つめていた。

異例

「あつたあつた。ほら、これだろ？」

僕らがちょうどコーヒを飲み干した頃に、神木さんは一冊のノートを持って現れた。

カウンターのの上に置かれたノートは、本格的な日記帳というよりも、僕らの時代でも使っているようなごく普通の緑色の大学ノートだった。表紙の題名の欄には『神木涼輔の日記』と書かれていた。

「あれ？」

日記帳を見た知鶴さんは首を傾げた。

「これ、あの時買ったのと色違うかい？」

「え？…ああ」

神木さんも日記を見つめると、理解したように頷いた。

「実はあの後、もう一冊買いに行ったんだよ。黄色い方は由菜にあげたんだ」

「由菜？」

「確か、妹さんだよな？神木由菜ちゃん」

「ああ、今ちよつといないけど…俺より六つ下の妹だ」

妹？神木さんに妹さんがいたのか。
…ん？待てよ？…神木…由菜…？

「どうかした？コウちゃん？」

気づくと、知鶴さんの顔がすぐそこにあつた。

「おわっ！？」

「ぼーっとしてるけど、大丈夫？」

吐息がかかってしまう程の近距離で目が合う。知鶴さんは無神経にも解っていないのか吸い込まれそうな奥深い瞳を真っ直ぐ俺の方へ向けてくる。

「そ、それよりっ！日記のことなんですけど！」

慌てて本題に戻すと、ようやく知鶴さんも思い出したようだ。

「そうそう、日記の内容、少し読ませてもらってもいいかな？」

「ああ、構わないよ」

早速知鶴さんは日記をパラパラと読み始めた。その間、僕は同じように見ることなくコーヒーをすすっていた。

ふとに周りを見渡す。古めかしい木造の壁に、色んな作風の絵が飾られていた。中でも、一際目立つ色を放っていた作品が目に入った。それは、何もない平地の真ん中に大きな満開に咲いていた桜の木が立っていた。

とても綺麗な色だ。桜の一枚一枚が咲き誇った瞬間のように輝いて

いる。この絵、最近どこかで見たような…。

「……やっぱり」

長い沈黙の中、声を上げたのは知鶴さんだった。日記のページを深刻な表情で見つめていた。

「どうかしたのか？」

声をかけた神木さんに、知鶴さんはゆっくりと目を合わせた。

「涼輔、中瀬神社の奥にある祠…行ったんだね」

「祠？」

「んー？ああ、あの神社か。あれは不気味だったなあ。何回も奥へ進んだはずなのにもとに戻ってるんだからなあ…」

その日を思い出すかのように天井を見上げながら神木さんは呟いた。どうやら見ていたページに中瀬神社のことが書かれていたようだ。

「祠って…？」

「ほら、私達が初めて会ったあの小さな祠」

うつすらとあの日の出来事が蘇る。確かあの日、捺美さんに中瀬神社の祠について面白そうな話を聞いて、その時行ったんだっけ。

「ああ…」

「で、それがどうかしたのかい？」

その問いには返事はせず、知鶴さんはふーむと考え始めた。なんだろう。前もそうだったけど、やけに神社の事になると頭をかしげる知鶴さんがいる。少しの沈黙が流れたあと、知鶴さんは一つゆっくりと息をつくと、再び真剣な表情で言った。

「涼輔：あなたは私たちと同じ、時の旅人かもしれない」

既に日が落ちていた。空襲の激しい日にちに飛んできたハズなのに外は閑散としていた。そういえばまったく気にしていなかったが、ふとケータイの時計を見てみると、画面に表示されている時刻がとまっているのが分かった。それどころかアンテナも圏外の状態だ。これではもしもの時に連絡手段が取れない。

「時の旅人？」

さっき話した内容も加え、知鶴さんは自分の身に何が起こっている

のかを説明し、僕たちが過去へ飛ぶ理由などを告げた。知鶴さんは日記をパタンと閉じ、神木さんの方を真剣な表情で見つめた知鶴さんに対し、二人は不意に疑問が零れた。

「待て、“私たち”と言ったな？他にもいるのか？」

少しの言葉のほつれに気づいた神木さんが聞くと、途端に知鶴さんは表情を曇らせた。

「明名：后遠寺明名も、私と同じ時の旅人なの」

「明名？」

思ってもみなかった答えが返ってきたように、神木さんは目を丸くした。

「もう何回もコウちゃんの時代から飛んでいるけど、明名は、今回初めて会ったの」

何回もというのは、知鶴さんたちの存在には決まりがあり、一年の間しかパートナーとは過ごせない。期限が過ぎれば、知鶴さんはパートナーから姿を消し、またパートナーもそれまでの記憶が消されてしまう。そうやって、知鶴さんは平成と昭和の時代を行き来してきたのだと言う。

神木さんには有無を言わず、続けて言った。

「で、話を戻すけど、時の旅人っていうのはさっきも言った私たちの敵、I/Oが付けた呼び名なの。私たちのような時代を飛び交う使者：60年前についた私たちの特性。私は想造、明名は触点」

「じゃあ、俺にもあるのか？その特性とやらが」

「それはまだ解らないよ。適合者と出会わなければその力も発揮されない」

「適合者というと・・・さっき言ってた“通じた”未来の人のことか。昂介くんじゃダメなのか？」

突然僕の肩に手を回してきた。思ってもみなかったので体を強ばらせた。

「昂介くんは私と通じてるから無理・・・」

その時、初めて知鶴さんと通じた時と同じように、一瞬体に電気が走ったような気がした。そして・・・

「え？」

「え？」

目の前が・・・世界が歪んで見えた。この感じ・・・。

「ど・・・どうして！？・・・どうして涼輔とコウちゃんが！？」

一人取り残された知鶴さんは、僕たちのいたカウンターを見つめていた。

続・異例（前書き）

長い間更新できず申し訳ありませんでした><

少々文章などで詰まってしまいました^^;

今後はキチンと期限を決めそれまでに更新できるよう努力致します。

続・異例

着いた先は、商店街だった。見慣れた服装をした人々が商店街に賑わっていた。これは…現在の中瀬通りか。

「一体…ここは…？」

現場慣れしている僕とは対に、一緒に飛んできた神木さんは周りの風景に呆然としていた。

「60年後の北中瀬きたなかせですよ。今は中瀬って呼ばれています。俺たちはあの時からタイムスリップしてきたんですよ」

でも、そうなるここはいつの日の中瀬なんだ？建物の変化もそんなに変わったところはないし、最近なのかな。

携帯を開いて見ても、時刻は俺たちが存在するはずの時間を示していた。

「ここが、あの北中瀬かい？」

神木さんは辺りを見ながら目を丸くしていた。驚くのも無理はない。神木さんの時代から60年も過ぎてるんだ。人通りも変わり、建物も風景もまるつきり変わってしまったている。

「そうなりますね」

「時代の流れとはすごいんだね。なんとなく面影が残っているようにだけど、建物はガラリと変わってしまったている。まるで別の街に来たようだ」

その表情は表面上…微笑んでいたが、どこか寂しそうに見えた。

「あれ？昂介じゃないか？」

不意に聞こえた聞き覚えのある声に、今回は体を強ばらせた。

「本当だ。おーい昂介え！」

どうやら、近くに二人顔見知りがいるようだ。

恐る恐る振り返ると、見覚えのある男女二人が目についた。もちろん深空と翔一その人だった。

「よ…よお」

よりによって、今一番会いたくない奴らに会ってしまった。うなだれていると、翔一の方が声を掛けてきた。

「昂介は一人？こんなとこで何してるの？」

「は？一人…？」

神木さんは？と声を出さずに辺りを見回すが、いつの間にか神木さんの姿が見えない。どこ行ったんだ？

「昂介、どうかしたのか？」

誰もいない辺りを見回していた僕を見て、深空が声をかけてきた。

「あ、いや…」

きつと、この時はまだ知鶴さん達に出会っていない頃だ。この時は本当なら、この後シヨカンで鉢合わせになる筈だった。

「僕たちこれからシヨカン行くんだけど、昂介もどう？」

案の定、翔一が誘いの言葉を発した。しかしこのまま同席することも出来ない。突然姿を消した神木さんを探さないと。

「あー…いや、これから用事があるから…また今度な」

苦笑を浮かべながら口実を並べる。とりあえずはこの場から去らな
いとと、二人を後にした。

「どこ行っただらう…」

深空達と別れてから30分弱、周辺を探して回っているが、神木さんの姿が一向に見当たらない。一体どこに行っただらう。知らない土地だから、そう遠くへはうつろってないはずだけど…

「なんで…ここに来たんだ？」

気が付くと、いつか来た商店街のはずれにある小さな神社。

いるはずもない場所に、僕は足を踏み入れていた。

「そういえば、知鶴さんと出会ったのも…ここだったよな」

正確には、目の前の竹林を抜けた先にある、祠で出会った。

何処からか不思議な声がして、気が付いた時には、自分の部屋で寝ていた。

あれから、この不思議な現象に慣れてきた自分はどうなんだろうと…近々思うようになっていた。

「お、昂介じゃないか」

その声は、神社の裏側からひよこつと顔を出した青年のものだった。見覚えのある銀髪、この人…人に迷惑かけといて…。

「いつからそこにいたんですか？」

ため息を一つつくと、神木さんは思い出すように空を見上げた。

「いつだろう？随分前からいたよ。キミと話していて、ふと気が付いたら、ここにいたんだ」

周りを不思議そうに眺めながら、神木さんはそう言った。

嘘をついている…わけでもなさそうだし、一体神木さんに何があったのかな。

「それよりさ」

神木さんが振り向くと、僕に向かって爽やかに微笑んだ。

「いいよねここ。緑に囲まれてて、空気が澄んでる。あれから随分の時を経ているのに、緑もそのまま、あの時と変わってない」

懐かしむように辺りを見渡す。うっとしいほど鬱蒼と生い茂る木々も、そう言われてみると素晴らしいものに見えてくる。

「ここに来たことがあるんですか？」

「ん？ああ、一度・・・ね。風の噂を聞いて」

「そういえばさっき、気付いたらここにいたって言ってましたよね？」

「ああ。着いて少し街を眺めていて…そしたらいつの間にかここにいたんだ。その場から一步も動いていないはずなのに…」

自分の身に何が起こったのか理解出来ていないのか、神木さんは頭を掻きながら苦笑していた。

一步も動かずにこんな遠くまでって…テレポーション？瞬間移動とかの類いなのか？もしかして…それが神木さんの能力なのか？神木さんの方をじっと見据えた。

「？」

でも、そうなるかと神木さんは時の旅人。そして僕は、その適合者となる。それって…。

「あ…」

時間はとうに過ぎていた。開いた手のひらから霧が、時間がきてい

ることを知らせていた。もう戻らないと。

「神木さん、とりあえず知鶴さんのもとに戻りましょう。それからみんなに報告したり…とにかく行きますよ!」

神木さんの返事も聞く暇もなく有無を言わず手を掴み、その場を走った。

「てればーてーしょん?」

ひとまず、知鶴さんを置き去りにした時代に飛んできてから、なんとか現代へと戻り、僕の部屋で落ち着いた。とりあえず今の時点で分かっていることだけを知鶴さんに説明したが、なんとも言わず、ただ難しい顔をしていた。

「聞いたことあるような…無いような…どこの国の言葉だい?」

横文字に慣れていないのか、ひらがなでも漢字でもない言葉を発すると、二人とも首を傾げ目が点となっていた。

「あ…え〜と…別の言い方をすると、瞬間移動ってやつなんですけど…」

「あ!分かるよ私!こう…シューーン、パツ!て消えて違うところから

現れるんだよね？」

身振り手振りと説明するように部屋をパタパタを駆け回る。まるで子供のように振る舞う知鶴さんは、この事態をちゃんと重く考えているのかと不安になってくる。いや、あえて明るく振る舞っているのかもしれない。

「でも、まだその力があるかも分かんないよ？気が付いたら…みたいなだったし、感覚がないんだ」

「俺も…神木さんにその話を聞いてそれかなって思っただけですから…なんとも」

「うーん…それよりも私…涼輔と昂介くんが通じたつてのが、一番不思議なんんだけど…」

首を傾げた知鶴さんが、気になることを口にした。

「それはどういうことですか？」

「うん。実はね…昂介くんには以前少し話したと思うんだけど、私たちは過去に飛べる代わりに、いくつかルールがあるんだ。例えば、飛んだ過去には長い時間いられないとか、一度行った日付には二度も行けないとか…他にも色々あるんだけど」

その辺のルールは確かに以前聞いたな。知鶴さんたちの体は半分死んでいる状態だとか、その他諸々…。

「それでね…そのルールの中に、“一度通じた適合者は、他の時の旅人と通じることは出来ない”って決まりがあるんだけど…」

「ふむふむ…って…ちょっと待ってください！…一度通じた適合者は…？」

「他の旅人と通じることは出来ない。だから、コウちゃんが涼輔と飛べるのはおかしいんだよ」

どういうことだ？そのルールが本当なら、何故僕は神木さんと飛べたんだ？疑問は募るばかり…。ふと神木さんを見ると。

「ふーん」

と、まるで自分とは関係ないとてもいうように話にひどく無関心のようにだった。それよりも僕の部屋を珍しそうに見渡している。

「とじろでれ」

いきなり神木さんがこちらにむき直したので、僕は無意識に体を強ばらせた。

「今の知鶴の話からするとき、俺もその、時の旅人ってことになるかい？現代の人間と過去へ飛べるっていう…」

「コウちゃんと飛んだんだもん…間違いと思う。でも…どうしてだろっ…」

それを聞くと、神木さんは白銀の髪をかき分け一つため息をついた。

「そうなるよ、俺は俺のいた時間に戻るってのはマズいのかな？」

「…残念だけど…一度いた、行った時間には戻れないの。その時間には既にその時の私たちがいるから…。その時間の私と会えば、歴史もまるつきり変わってしまうし…会った私たちの存在も消えてしまふ」

結果、神木さんはもとにいた時代には戻れない。となると、これからどうするのだろう。住むところとか、色々…。僕の部屋もダメな訳じゃないけど、色々あるんだ。

「一度、みんなにも相談してみましようよ。このままじゃ始まらないし、それにあいつらだってまたいつ来るか分からないし」

「そうだね。それじゃ、みんなでシヨカンに集合だね」

思い立った僕たちは立ち上がり、すぐさま支度を始めた。その時、頓狂な声を上げたのは、神木さんだった。

「しよかん？」

再会？

カラン。

「いらっしやいませー……あ、昂介さんと知鶴ちゃん」

「どうも」

「こんにちはー捺美さん！」

シヨカンに入ると、日が暮れてきたせいか、店内に人はまばらだった。「空いてるとこ座ってー」とサービス感ゼロのマスターに促され、空いていた奥のいつものカウンター席に腰掛けた。

「いらっしやいませ。今日は何にいたします？」

「ああ、えつと……て、あれ？明名さん今日シフトだったですか？」

カウンターに三人分のお冷やを置いてくれた店員は、何故か見慣れない和服コスチュームに身を包んでいた明名。依然見た時は、いつものセーラー服の上にエプロンという簡単な服装だったが、しかし依然自分がバイトをしていた頃に女性用にあんな制服はなかったと昂介は思い出す。

「ええ、おかげで仕事も大方覚えれたし……ところで今日は何にするのかしら？今日はハーブテイの付いたランチがおすすめ……」

ふと、明名の口が途端に止まった。

いや、もっと言えば、かがんでいた体と向いていた視線もそのまま

膠着していた。何かとその視線の先を辿ると、何故か涼輔に向けられていた。

そして、その視線に気づいた涼輔が振り向いた。

「お、明名じゃないか。こんなところで会うなんて奇遇だなあ。一体何をして、」

ドゴツ。

誰も気づく事の出来ない速さで殴ったような鈍い音の後、涼輔はのめり込むようにゆっくりとカウンターから崩れた。それに気付くのにたっぷり3秒。

「か、神木さんっ!？」

「あ、明名!?!なんてことを…!?!」

「はあ……はあ……はあ……な、なんで……」

「や、やあ…相変わらず力は衰えていない……」

涼輔の声を聞き、ますます頬を赤らめていく明名。そして、

「いやああああ!!」

キレのある右ストレートが涼輔の頬を貫き（補正あり）、ついにトドメをさした。この騒ぎを見てないハズがない他の客の場を落ち着かせるのに、長い時間を有した。

「こんにちは捺美さん…って」

「な、なんか…あつたみたいだね…」

後から来た深空と翔一は事態を把握出来ないまま、二人は立ちすくんでいた。

「申し訳ありませんマスター！私事とはいえ、お店やお客様に迷惑をかけてしまって……」

「い……いいいいよ。もう済んだことだし、それじゃ店の方に戻るね」

「そ、それなら私も！」

涼輔を見据える明名は罪悪感を感じているのか、踏み出した足取りは妙によそよそしかった。

「いいよ明名ちゃんは。それにあなたは、彼には謝っておいた方がいいんじゃない？」

ひとまず伸びてしまった涼輔をスタッフルーム（という名の純和室）に運んで寝かせた。店の方もいたスタッフや捺美がその場を抑えたため、大事にならずに済んだ。

「は……はい。申し訳ありません……」

「そっちのほとぼりが冷めたら、また店の方手伝ってね」

「はい。ありがとうございます！」

そう言っつて、深々と頭を下げる明名に優しい言葉をかけて捺美はスタツフルームを出ていった。明名のパンチが相当の威力だったのか、あれから30分経った今でも涼輔は目を覚める様子はない。一度病院へ連れて行った方がいいのかと昂介たち焦ったが、知鶴はいつもの事だと冷静に言っつた。

「でも…何故涼…、神木くんがここに？」

口ごもつて呟いた明名に、追い込みをかけるように知鶴は言っつ。

「なーに今更他人行儀になつちやつてんのよ。普通に涼輔つて呼べばいいじゃない。ホンツと明名つたら奥手なんだから」

「なつつっ！？」

核心を突かれたように、明名は真つ赤になつてギョツとした。

「ですよねー。飛んだ時も明名つたら、マトモに神木さんの顔見れませんかでしたよ」

深空もニヤリと笑い、いじるように言葉を繋げる。

「みつ、深空まで！？」

まるで明名を虐げるように右からも左からも笑いかける。決してふ

ざけているわけではなく、きつと応援しているのだと昂介は思った。

「でも、よかったじゃない明名」

「え？」

「涼輔に、会えて…さ」

真剣な表情で知鶴は言った。

「……ええ」

明名も、何かしら吹っ切れたような顔していた。

「捺美さん、私代わりに入りますよー」

制服の上にエプロンを被るだけにした知鶴がシフトに入った。

「あ、ありがとう！それじゃこれ持ってって」

「はい」

あれから少しして、涼輔は目を覚ました。ケガも（目立たなかったが多分重傷）なかったので一同も安心し、知鶴が明名と二人きりで話をさせようと他のみんなもスタッフルームを出た。今頃楽しく会話を交わしてるだろうか、いや…先ほどの行動を見て、明名は黙り込んでいるに違いない。

「やっぱり女の子なんだなあ」

「それ、誰のこと言ってるの？」

昂介が誰にも聞こえないように呟いた独り言を、隣に座っていた深空が聞いていた。深空も以前涼輔のいた日付に飛んで話したことがあるらしいが、今いる涼輔は深空の事を知らない。昂介が深空たちより以前に飛んだ時の涼輔を連れてきたので、深空の事は知らないのだ。つまり彼女が会ったことのある涼輔は今ここにいる涼輔とは別人となる。

「明名さんだよ。やっぱりあの時代の人たちって、わかりやすいつていうかさ」

明名は容姿端麗、プライドが高く貴族生まれの彼女は、恋も家の赦しが無ければきつとする事も出来なかつただろう。軍事教育、戦争：彼女たちは今の若者には想像出来ない過酷な日々を送ってきた。そんな人たちが今現代に若い日のまま存在している。非日常を望んでいた昂介だが、色々あった後の今でもこれから何が起こるか不安になる。

「ま、色々あるんじゃない？女の人ってのはそんなもんさ」

「他人事みたいに言うなよ…。あれ？そつえば翔一は？」

気が付けば、翔一の姿が見あたらなかった。さっきスタッフルームから一緒に出てきたような気がしたのだが。

「きゃあー！」

その悲鳴は店の奥から聞こえた。聞き覚えのあるその悲鳴はどうやらスタッフルームからのようだ。

それに加え、まるで静電気に触れたような音が聞こえたのは間違い

なかった。嫌な予感が頭から消えなくなっていた。
その悲鳴に驚いた昂介と深空は慌てて奥のスタッフルームへ駆け込んだ。

「どうしたんですか明名…さん？」

どうかした…状況には思えなかった。和室に座り込んでいた明名さんがいて、それ以外は特に変化が見当たらない。一体どうしたのか…。いや、むしろそれがおかしかった。

「あの…神木さん…は？一緒にいたんじゃないんですか？」

時間的に目が覚めた涼輔と会話をしているはずの明名は、ポカんと口を開けたままだった。涼輔の姿はない。よく見ると、脱ぎ揃えられていた靴は三組あった。丁寧に揃えられた大きさの違う茶色の革靴が二足と、見覚えのあるスニーカーが一足。それは確か翔一のスニーカーだったはず。

「あの…翔一、ここに来ましたか？」

明名はコクンと頷き、小さな口をそつと開いた。

「丁度話が終わった頃に翔一くんが顔をお出しになって、涼輔が挨拶と翔一くんに握手をしようとして……」

そこで言葉は途切れた。しかし、昂介にはそれだけで何があったか想定できた。つまり、握手をした涼輔と翔一が手を触れ合った。その際に起こったのは一瞬の静電気のようなもの。そしてそれが起こったのが最後だった。飛んだのだ。彼らは通じ合って、あれ？と昂介は首を捻る。

「でもっ！神木さんはもう俺と通じた。一度通じた時の旅人は他の人とは通じないはずじゃあ…」

「そうだったはず。少なくとも私たちの知る範囲では。でも、涼輔が時の旅人だということは今まで知らなかったから、…しかも複数人と通じる事が出来るなんて…」

「とにかく！あの二人を追いかけた方がいいんじゃないのか？明名、二人を追いかけよう」

昂介の背後にいた深空がぐいと前に出て明名の手を掴む。

「そうね。彼らだけでは不安だし…昂介、すぐに知鶴を呼んで私たちの後を追ってきなさい。分かりましたね」

有無を言わず、二人はその場を駆け過去へ飛んだ。そして残された昂介は、

「何かあったの！？なんか悲鳴が聞こえたんだけど……」

先ほどの明名の悲鳴を聞きつけた知鶴が、制服のままスタッフルームに駆け込んできた。部屋をさっと眺め彼女も異変に気づく。

「あれ？明名と涼輔は…？さっきまでいた…よね…？」

そこにいるべき人がそこにいない事態を、知鶴は素早く理解したようだ。昂介は落ち着いて事態を説明すると、知鶴も明名と同じく、そんなこと有り得ないとこぼした。

「でもそんな事言ってる場合じゃないよね。行く、コウちゃん！明名だけじゃ不安だよ」

「そうですね。それじゃ早く着替えて…」

しかし、次には彼女の華奢な手が昂介の掌をスルリと掴んだ。

「そんな悠長な事言ってもらえないよ！ほら、れっつごー！」

「え…ええっ！？」

またもや彼女に主導権を握られ、後を追うことになった。

飛んだ先は

二人が着いた場所は未踏の地。いや、もしかしたら翔一には過去に記憶が残っているかもしれない。

県・戸張市^{とばし}。

握手と握られていた手を、二人はようやく気づいて離した。翔一は不思議そうに辺りを見渡す。二人の立っていた場所は、殺風景な田んぼ道が広がっていた。

「何…ここ。一体何がどうなって」

「飛んだ” んだろうねえ。君と通じて」

事態が把握出来ずパニックっている翔一に対し、涼輔はなんとも落ち着いた様子だった。昂介から聞いた話をそのまま翔一に説明すると、理解したのか、ようやく落ち着いて一息つく。

「じゃあ僕は…適合者なんですね？あなたたち時の旅人の」

「そうなるね。すごいね、みんな通じたんだ。…って明名たちは驚いていたけど」

他人事のように笑いかける。つられて翔一も微笑するが、実は密かに感動していたのだ。ようやく自分も輪に入れたような、幼児のような心境。

不思議と見慣れた光景に、涼輔は驚くことはなかった。広大な田んぼが広がり、民家もまばらとある。奥には高くそびえる山がある。冷える風が頬を突き刺す。時期が冬というのもまだ翔一は把握して

いなかった。

「あ……」

頓狂な声を上げたのは翔一。その声の意味は単に驚いたのではなく、何かを思い出したような気がしていた。

「どうかしたのか？」

「あ、いや……ここ……、多分……来たことがある……気がするんです……」

おぼろげ臆気だが、遠くない過去に来たことがある翔一は懐かしそうに辺りを見渡した。間違いない、中学まで育ってきた、あの町だ。

「そうなのか？じゃあここの地理は任せても大丈夫なのかい？」

「ええ……大体は、ですけど。確かこの先を……」

かすかな記憶を頼りに、二人は田んぼ道を歩き始めた。

歩くこと30分弱。そこは人が溢れる商店街。形は中瀬通りと変わらないが、それより少し広い大通りに着いた。時間を確かめようと翔一は携帯の画面を開く。しかし

「あれ？」

電源を切った覚えはない。シヨカンに来る前に充電は満タンにしてきたはずだが、携帯の画面は暗く見ていた翔一の顔を映し出していた。電源をつけようとボタンを押して試みるが、何度試しても一向につく気配がない。

「どうかしたのか？」

「あ、いえ……」

これでは時間が確認できない。しかし日が暮れてきているのでさすがに昼はとうに過ぎていくようだ。

少し歩いて商店街を見渡すと、翔一から無意識に笑顔がこぼれた。

「うわぁ……懐かしいなあこの風景……」

「翔一、君はここに来たことがあるのか？」

商店街を出てもう少し歩くと、住宅地が立ち並ぶ道へ出る。嬉しそうにはしゃぐ翔一を見ていた涼輔は、不思議そうに家に囲まれた辺りを見回していた。

「ええ。うちの親が絵を描く仕事をしていて、色んな所に住んで回っていたんですよ。中でもここは長くいましたし」

2、3年はいただろう。前は学校を通っていても、まともにクラスの人達の名前を覚える前に越してしまっただけで、特に親しい友人も出来ることなく、あちこちを転々としていた。でもここは、少し忘れられない思い出……否、どこか心残りのある場所だった。

「どれも立派な家だね。こういう風景を見ると、ようやく時代が進んでいると実感するよ」

当たり前のように見える二階建ての家。屋根のカラフルな家。時折築何十年と続いているような木造住宅を見つけるとは、涼輔は一つ感想を述べていく。

「俺たちの昭和は、二階建ての家っていうのは大体屋根裏も合わせてつてのが多かったね。屋根も瓦が普通だったし、あ……でもウチは木だったかな。喫茶店だし」

「喫茶店なんですか？涼輔さんの家」

初めて聞く事実翔一は興味を示していた。

「まあね。湘館しゅうかんというしがない店だったけど、お客さんはみんな良い人ばかりだったよ」

涼輔は思い起こすように天を仰ぐ。
なぜ過去形なのかと耳を疑った翔一だが、黙って話を聞こうと歩みだす。

しかしその最中、何故か翔一は家に囲まれた路地に立ち止まる。翔一の顔がいつそう冷めていった。二人のいる一本道の道路の先を一点を見つめたまま、立ちすくんでいる。

「時折いい豆が入っては……って翔一、どうかしたのか？」

「あ……」

涼輔も視線の後を追うと、そこには奇妙な光景があった。

遠くからだが見える、一人の人間が物凄い勢いでこっちへ走ってきている。顔が見えるまで近づいてくると、とても穏やかな表情ではなかった。

少女の顔は既に、鬼神と化していた。

「見つけたー！翔おーいー！ー！」

「ひいー！ー！」

気づけば翔一は回れ右をし、一目散に反対方向へ突っ走っていた。

「…」

「逃がさないわよー！」

高校生と見える制服姿の女の子は、短いスカートも気にせず、まるで陸上選手のように大股で翔一を追いかけていく。翔一の知り合いだろうか、そんな事を思いながら涼輔はその場で呆然としていた。

「いなくなってしまうたな…。仕方ない…」

ピツ、と突き立てた人差し指を眉間に触れると、小さく息を吐いた。そして…

「上手くいくといいが…」

シュン、という音もなく、涼輔の姿は消えた。

「ここまで来れば…追ってこないよね…」

ようやく足を止めた場所は、先ほどの路地から数キロ離れた丘の上の神社。何も数キロ先のこの場所まで逃げる必要も無かったのだが、念には念を。この程度で諦めるような女ではないのだ、彼女の場合は。

「嫌な予感…してたけどなあ」

はは…と翔一は苦い笑みをこぼしながら、境内のベンチにへたれ込む。先ほどの活気ある（極度過ぎ）彼女がもちろん、誰かも分かっていた。

彼女の名は桐沢望^{きりさわのぞみ}。ここの地元の高校に通う高校生で、当時ここへ越してきた翔一を良くしてくれていた。心配りも出来て、慣れない土地に右往左往していたのを、親切に教えてくれた。

この土地には二年半近く住んでいて、進路先の大学もほとんど決まっていた。

でも、そこに再び親の仕事の都合の転勤。気の弱い翔一に異見する勇氣もなく、そのまま親について今にいたるそう、今住んでいる中瀬。これも同じくらい長続きしている。三年生の夏休みくらいに越してきたから、これも2年を過ぎている。今の生活に何の不自由もない。昂介もいるし深空もいる。今のこの時が幸せだ。もう立派な大人だ。親の仕事だろうがもう一人暮らしも出来る。中瀬を離れるなんて考えられない

「見いーっけーた〜あ」

背後から、おぞましいほど憎しみのこもった声が這い上がってくる。

恐ろしくてベンチから立ち上がることも出来なくなった翔一は、恐る恐る後ろを振り返る。
すると…

「あ…」

「やっぱりここにいたのね。翔一」

まさにその人、桐沢望は背後に仁王立ちして立っていた。

「ど、どうしてここが…」

「私の直感。ハズれた事なんてないんだから。なんたって私の感だからっ」

ヤバい、と焦りを感じようやくベンチから立ち上がろうとするが、重心をついた左手が離れない。絶対に離すまいと、望はその手を強く握り締めていた。

「もう逃がさないんだから。なんで今日学校サボったのか、ちゃんと説明して」

「!?!」

間違いない。この日は、転校する前の

「ねえ!? 聞いているの!?!」

「え…」

気づけば、望は目を赤くし、今にも泣きそうなほど涙ぐんでいた。

「ごめん…」

「ほら、そうやってすぐ謝る…。翔一の悪いとこだよ。ちゃんと説明してから謝って」

2年半、彼女が翔一の癖を見破るには少し短い時間だろうが、それに気づいた彼女はそれだけ翔一の近くにいた。恋人ではないけれど、きつと好意じゃなくて善意だろうけど、そうやって出来る“友人”という関係を避けてきた。出来れば一層別れが辛くなる。だから極力、翔一は人付き合いを避けてきたのだ。相手がどうおもっているかは知らない。弱い自分が別れるのが辛くなるから。

『越してきたばかりでこの町のこと解らないでしょ？案内したげるから、一緒に帰る』

当時、転校してきたばかりの翔一を誘った望。もちろん翔一は断ったが、彼女に強く説得され、渋々ついていくことにした。

涼しい風が境内をすり抜ける。どうしようも左手は未だ掴まれたまま。表情を伺えばまだかまだかと目を潤ませている。その姿を見て、思わず頭を大袈裟に抱えてしまう翔一。それを見て不思議に思った望はどうしたの？、と問いかけるが、翔一はため息一つについて考えていた。

ここは過去。一つ間違えれば今までの未来もガラリと変わってしまった。あまりに繊細な世界。でも逆に言えば、失敗した過去を変えることもできる、たった一度きりのチャンス。

でも、僕はそれを掴むのを恐れている。もし違う未来に変わるとし

ても、それが今に繋がるなんて解らない。だから、僕は…。

【何もしないまま終わるつもりか翔一。何のために過去へ来た？何事でも例え偶然でも、たった一度きりのチャンスを逃す馬鹿はいないぞ】

「へ？おわっ！？」

気の抜けた声と共に顔を上げると、目の前には望が視線を合わせて前にしゃがみこんでいた。それに驚いた翔一は、思わず尻餅をついてしまった。

「だ、大丈夫！？」

「あ、うん…あはは…。ちょっとびっくりしちゃって…」

もう、と望は苦笑しながら手を差し出す。翔一はその手を掴みゆっくりと腰を上げると、一度深く深呼吸をした。

(誰だ？…今、神木さんの声が聞こえたような…)

【ようなじやなくて話しかけてるんだよ。おい、聞いているのか？】

(！？)

聞こえてくるのは、確かに神木涼輔の声。しかし辺りを見渡しても、その姿はない。

「翔一？」

望の心配する声も耳に入らず、もう一度涼輔の声を伺った。

(神木さん?)

恐る恐る頭の中で涼輔を呼びかける。

【なんだ?】

返ってくる声は確かに涼輔のもの。一体どこから?と詮索する前に、涼輔の方から口を開いた。

【この力は後々説明する。なんせこうして意志を通じあえるのは3分間だけなんだよ】

(3分: なんだかありがちな設定ですね...)

【いいかよく聞くんだ翔一。過去に戻るなんて現象は普通には有り得ないんだ。僕たちの場合は特例。だからこれは好機チャンスなんだ】

(好機: ?チャンス: ってこと?)

涼輔の言葉を静かに聞く。何故頭の中から声が流れてくるなど、この際不思議には思わなかった。

【俺たちの時代も、戦争が起こる前はとてもいい時代だった。勉強に励み、人に恋をすと、とても美しかった...】

(はあ...)

とりあえず相槌を打つ翔一をよそに、涼輔は続ける。

【あの頃に帰りたかったと思ってももう戻れない。だが俺たちならそれが出来た！知鶴たちに聞いたが、一度戻った日付には二度と戻れない。だから、これは一度きりの好機なんだぞ】

(一度…きり)

【過去を変える最後の好機だ！チャンス君が変えたいのなら、君から動かなくてどうする！？】

翔一の中で、何か動いた。変えられるなら変えたい。ほんの些細なことかもしれないけど、でも。

「ずっと…」

それまで開かなかった翔一の口が、少しためらいがちに開いた。

「ずっと、怖かったんだ…。友達が出るのが…」

「翔一…？」

ゆっくりと望も同じベンチにすわり、優しく翔一の肩を撫でると、静かに目を閉じて話に耳を傾けた。

よじやく

- 僕は弱い。誰かと親しくなれば、それに頼ってしまふ。その人と親しくなれば、人一倍に別れが辛くなる。だから友達は作らないようにしている。転校する事が多くなり、それが日課のようになっていた。

でも一度だけ、長く留まった時があった。親の仕事が安定したから当分はここにいると言ってくれた。一年、そして二年が過ぎた。長く居たため、当然友人もたくさん出来て、特に親しくなれたのが彼女、桐沢望だった。

彼女はいつも活気あふれていて、話しやすく、とても明るくみんなの憧れの的だった。そんな彼女にいつしか僕は惹かれていたのかもしれない。だから、この日が、また引越す事が決まったことが辛かったんだ。だから逃げ出した。学校も荷造りの手伝いという口実でサボった。

感情の過度が激しい僕は、学校に行つて転校することをどんな顔をして言えばいいか解らなくなつて、だから…。

「はあ…アンタ、そんなしょーもない事心配してたんだ？」

パンツ！

話を聞いて呆れた顔をした望は、翔一の肩を撫でるのをやめ、その頬に思いつ切りビンタをかました。

「なっ！？」

「アンタ、いつまでガキなのよ？転校してきた日から思ってたけど、人の表情を伺い過ぎなのよ。バツカじゃないの？」

言葉がよく理解できなかった。自分が罵倒されていると気付かずに、叩かれた左頬を抑えながら望の顔を目を丸くして見ていた。

「転校するから何？もう一生、この先死ぬまであなた達とは会えませんが…とか思ってたの？アホらし…小学生かつつーの」

百面相をした後、望はウザそうに後ろ髪をさらっと流すと、座っていたベンチから立ち上がり数歩前に歩き出す。

「ホント…バカじゃん…」

二度目。

「言いすぎだよ…」

「バカだよ。遠くへ引越すからもう会えないなんて、そんなワケないじゃん」

望はクスツと微笑し、天を仰ぎながらため息をついた。

「車、電車…どんなに遠くたって、どんなに時間かかったって…絶対行けないわけじゃないんだから」

「…」

「海外だって船や飛行機で行けば関係ないし、たとえ宇宙だってロケットで飛んでいけば無問題なんだから！」

「の…望…？」

宇宙はちょっとスケールが違いすぎないだろうか、と突っ込まず静かに翔一は聞く。

「つまり、私が言いたいのとは…どんなに遠くても、どんなに時間がかかっても、会えないわけじゃないってこと。会おうと思ったらいつでも会えるんだから」

「……。のわっ!?!」

翔一はふとベンチから立ち上がると、突然望の全体重を預けられた。翔一には何が起こったのかも理解できず、預けられた体をそっと支えられる（わけもなく）ただそのまま硬直していた。

「の…望?」

「いいからじっとしてて!」

「は、はいっ!」

翔一は元々女性に近い華奢な体つきで背も望に比べて若干高い位なので、突然体を預けられるとよろけるのも仕方がない。一喝を受けシヤンと背筋が伸びる。そして一層胸の中へと希の顔がうずくまれる。

「いつでも会えるって言ったけど…当分は会えないから…ちょっと補給…。あと、今私の顔見たら殺すから」

見ません。そう言われたら絶対見れません。そう一心に翔一は緊張に耐えるため空を見上げながら歯を食いしばる。

「まだ私たち、お互い未熟だから…。大学生になって、それで立派な大人になれたら、また会いに行くから…絶対に…」

「…うん。僕も、絶対会いに行くよ」

ちゃんと前を向いて、目を逸らさず歩けるようになったらまた会おう。

望は最後の見送りと言って翔一宅まで帰ることにした。当の本人も既に、自分が過去へ来た人間だということもすっかり忘れていた。

「ありがとう。普通、こういうのは男が家まで送ってくのが当たり前なのに」

「いいの。最後に翔一の家に行きたかったから。それに明日にはもういないんでしょ？最後まで一緒にいさせてよ」

暗い夜道の中、微笑んだのそ表情に寂しさが唐突に感じられた。翔一（過去）の自宅前に着いた頃には、既に日は落ちていた。望の御厚意か、わざわざ翔一の自宅まで足並み揃えて帰っていた。楽しい一時…しかし今の翔一はこの過去に馴染みすぎていて、自分がこの時間の人間ではないことをすっかり忘れてしまっていた。いつしか先ほど涼輔の言葉も幻になりかけている。

拗ねた子どものように、望は口を尖らせながら華奢な翔一の肩にも

たれかかる。こんなに近い距離でも、まだお互い気持ちを伝え合えていない。望の真意が解らないままのこのやりとりはなんだか腑に落ちないものがあった。

「はあ…翔一が携帯持ってたなら、いつでも連絡とれるのに…」

「ごめん…。色々あって…さ…」

そうだった、と翔一は記憶を探り出す。この頃も友達を作らないと決めていたので携帯も必要ないだろうと思っていたんだ。持ち始めたのは越してから、正確に言えば、昂介たちと親しくなり始めた頃からだろう。

「でも、いつかは持つんでしょ？…はい」

「ん？これ…」

差し出されたのは一切れの紙。表には何も書かれていない。不思議に思って裏返してみると、そこには望のものであるう携帯電話番号とメールアドレスが見覚えのある字で記載されていた。

「これって…」

「み…見れば分かるでしょ！私の携帯番号とメルアド。翔一がいつ携帯持つかわかんないから、持つようになったら、そこに連絡して…絶対だからね！」

暗くてよく見えないが、きつと目を合わせていない。もう一度ありがとつと頭を撫でながら呟くと、望はまた翔一の胸の中に顔を埋めた。

「絶対…絶対だからね！忘れたりしたら…絶対…絶対…許さないからっ！」

「うん、忘れない。絶対、携帯持ったら、絶対連絡する」

ややあって、翔一は自分の身に起こる危機に気が付く。ふと自分の手のひらを覗いたその時だった。

「あれ…」

疑うように手のひら裏返しながら確認する。その事態に青ざめることもなく、ただ目を丸くしていた。以前深空に起こったものが翔一の身にも起こっていた、四肢から霧状のものが浮き出ていた。もう片方の手からも、同じように今にも消えてしまいそうな症状にあった。

「？どうしたの？」

「あ、いや…」

望は翔一の顔を不思議そうに見る。そうか、とようやく事態を把握する。自分は未来から来たんだ、いつまでもここにはいられないんだ。夢から覚めると、途端に涼輔の存在を思い出す。

(そういえば…涼輔さんは!?)

気づいて辺りを見回すが、そこに涼輔がいるはずもない。それどころかいつはくれたのかも定かではなく、次第に翔一は不安が募っていった。

【…てるかつ】

(！)

「翔一…どうしたの？」

一瞬間こえたつぶやきをよく聞こうとゆっくり望から離れると、不
安げに表情を覗いていた。

【…駅まで走れ！】

(え？)

【戸張駅まで走るんだ！時間がない！】

「はっ、はい！」

その声にようやく我に返った。

「ちょ、翔一！？どこいくの?!」

即座に切り替え駅の方面へと向き直し走り出した。長く住んでいた
から場所は覚えている。望とはここでお別れだ。

「ごめんっ！行かなくちゃ行けないところがあるんだっ！」

「絶対！絶対忘れないでね！」

涙越しに伝えた別れの言葉は、走り去っていく翔一に確かに届いた。
今は振り返る時間も惜しい、本当なら応えてあげたいが、そんな余

裕はない。

「大好きだぞー！！バカヤロー！！」

姿が見えなくなっただけから叫んだ一言は、当然翔一の耳には届いていなかった。

「はあ…はあ…はあ…」

苦しい。既に体は消えかけている。半透明の体を必死に引きずり走るが、目的地の駅まではまだ少しある。幸いに今翔一が走っている大通りは戸張駅に一直線に通っている。街灯に照らされている中、駅を指して走る姿は通行人から見れば滑稽だろう。しかしそんな視線に気を使っている暇はない。まだ距離は目を細めればギリギリ見える程度。運動経験のない翔一にとっては過酷な距離となった。

【知鶴たちから聞いていたんだが、過去へ飛んで存在していられるのは1〜3時間が限度。それを超えれば、自分も過去の自分の存在も弾け飛ぶ】

そう涼輔から伝えられたのは、望と別れてすぐのことだった。翔一自身も知らないことではなかった、だが以前まで自分には関係のない話だと右に流していたのだ。でも、今は関係ある。翔一にはそれがなんだか嬉しくて仕方がなかった。

しかし、現実はずぐに戻されてしまう。

「……！」

「あの顔、間違いない。こちらB班、坂本翔一を発見しました」

立ち止まった大通りの脇から現れたのは、体格の良い黒スーツの男。そこまでならまだ普通のサラリーマンなどと認識出来たが、すつかり日も落ちたはずの天気にもサングラス、一体誰と話しているのだろうと気になる手に持ったトランシーバー。そして背後から同じような男たちが数人で翔一を周り囲むように位置づく。

「なんで……こんな時に……！」

「坂本翔一。ご無礼を承知の上で、あなたには我々と本部まで同行願います」

翔一から見て真正面にいた黒スーツの男は、表情ひとつ変えず一歩近づく。本部といえは、もちろん彼らのアジト E/O。潜入という形ならばこれに乗る手はないが、今それが可能なのは翔一ただ一人。そのままホイホイとついて行けば、何も出来ないどころか逆にそのまま利用されてしまうだろう。昂介たちがいればあるいは考えが違ったかもしれないが。

翔一はふと自分の手を眺める。自分の手がもうほとんど消えかけているのを確認すると、自然に冷や汗が垂れた。時間も、刻一刻と迫っている。

「嫌だと言ったら？」

「言わせませ……なっ……！」

その時、目の前で何かが地面を突き破った。その何かは翔一と黒ス
ーツの男とのわずかな間を突き破り、目の前には暗くて見えない“
何か”が現れる。周りにいた男たちは驚き思わず尻餅をついていた。
街灯に照らされ姿を表した“何か”は黒い鋼鉄で出来ていて、造型
のなく無作為に天へと伸びていた。

翔一は鋼鉄を見上げながら啞然とし、開いた口も塞がらなかった。

「翔一！！」

背後から聞こえた声に振り返ると、見覚えのある青年がこちらに向
かってくる。

「涼輔さんっ！」

「翔一！手を貸すんだっ！」

言葉と同時に走り出した翔一は、尻餅から立ち上がった一人が銃口
を向けられているのに気づかない。

「死ねっ！」

二人の手が触れると同時に、飛び出した銃弾は正確に翔一の背中を襲
う。が、

「…くそっ！」

二人の姿はなく、銃弾は暗闇に消えていった。男は気付くとそびえ
立っていた鋼鉄は既に消えていて、突き破られたコンクリートの大
きな穴だけが残っていた。

一体あれは何だったんだろう。

そう思いふけていたのは帰ってから自室にて。無事に帰宅することが出来た翔一は、夕食も口にせず窓から映える満月を眺めていた。なんとか制限時間内に現代に戻ることが出来た翔一と涼輔は、初めての体験を鮮明に昂介たちに説明した（特に翔一が目を輝かせて）。自分の過去を少しでも変えることが出来た翔一はとても喜んでいた。まだ昂介たちと出会う前、淡い恋心を抱いていたあの頃の過去を未練を残すようにはしていない。翔一自身はとても満足していた。

（一体誰が…？）

そして残った一つの疑問。E/Oの構成員に追われ捕まりそうになったところを、突如現れた謎の鋼鉄が事態を救ってくれた。あの鋼鉄が意志を持って一人で突き破って来るはずがない。知鶴や明名のような、過去から来て異能の力を使う人がいるのだから、作為的に現れたあの鋼鉄も、きっと異能の力を持った“誰か”仕業だろうと翔一は考えていた。でなければあの奇怪な鋼鉄に説明がつかない。突然の未曾有の大地震か何かが起こり、その拍子に深くに埋まっていたの鋼鉄が飛び出してくるといふならまだわからなくもない（あの謎の巨大な鋼鉄が何故埋まっていたのかは別として）。となると、やはりあの時いた“見えなかった”誰かが使った異能の力なのだろうか。

「てことは、僕たちの仲間…なのかな…」

あの状況下で翔一を助けたということは少なくとも敵ではなかった、そう翔一の中で処理した。

「…もう寝よう」

ベッドへ身を投げ、枕に顔を埋める。

過去の未練、I/Oの出現、あの場を助けてくれた謎の第三者。昂介や深空が過去へ飛ぶのを見ていただけだった翔一は、なんだか疎外されている気がして悲しい気持ちだった。

翌日、夕方、夏休み最中のシヨカンは部活帰りの学生が大半だった。バイトの知鶴と明名も忙しそうにホールを回っている。

「ん？どしたの翔一くん、ぼーっとしてさ」

ぼんやりと目の前に出されたコーヒーをぼーっと眺めていた。捺美の声も今の翔一には上の空。ふう、とため息をついて捺美は作業に戻る。

「…なあ、なんでアイツ、あんなに元気ないんだ？」

「私に聞くなよ…。私だって知らない」

すぐ隣のカウンター席に座っていた昂介と深空も、心配そうに顔を覗いている。三人がここへ来たのは昼過ぎ、かれこれ5時間間は入り浸っている。それも翔一の状態は来た時から変わらず。昂介が昨

日何かあったのか？など話し掛けてみても、うん…。そうだね…。
となんとも気の入らない返事ばかりだ。昨日一体過去で何があったのか…。
昨日日本人から聞くと、無事やるべきことを成してきた、と嬉しそうに語っていたのに、何故今日になってあんなに沈んでいるのだろう。二人は苦笑するばかりだった。

「…はあ」

ようやく開いた口、ため息一つ漏らす。過去に飛ぶことが出来た。そして行き着いた過去での失態を少しでも良い方向へ直すことが出来た。もう過去に大きな未練は消えたはずなのに…未だに翔一の中では何かわだかまりが残っていた。

「はあ…」

カラン…。

そのため息と店のドアが開いたのはほぼ同時。近くにいた知鶴がいらっしゃいませー、と営業スマイルを忘れず客を出迎えると、客の女性は立ち止まったまま辺りを見渡している。そして奥のカウンターに視線が移り左端から右端へと眺める。何かを見つけたのか、知鶴にお構いなく、と笑顔で返して足の間隔を少し広げて仁王立ち体制へ。
そして

「翔一いつ…！」

「ぶふっ…！」

ようやく一息ついてコーヒーを一口含んだ途端、店内に甲高い大声が響いた。

翔一は思わず声の方へ振り返る。そこには

「な、なんで…」

かつて、別れを告げた彼女が、再び目の前にいた。あの時とは少し変わって、赤縁の眼鏡をかけ、以前より少し大人びた顔つき。しかし、あの面影は消えていなかった。

片桐…望。

「どうして…それになんでここに…」

「私の直感^{あたし}。ハズれた事なんてないんだから。なんたつてこの私の勘だしねっ」

ビシッ、と彼女は自分の頭を指差し笑む。かつて聞いた一言を聞くとようやく実感が出来た。未来は、変えられるんだ

桐沢望

「はじめまして。昔、翔一のお目付役でした桐沢望です」

違うから、と翔一の冷静なツッコミを受けながらも望は皆に自己紹介をした。お互い一通り事を済ました所で、二人の昔話などで盛り上がったいた。

「あの…それでどうしてここが？」

これで4回目。翔一はげっそりとしながら幾度聞いているが、話で盛り上がっているせいか望は翔一に対して返事がなかった。

「だから言ってるでしょ。私の勘あたしだってば」

勘で片付けられては納得がいくはずもない、翔一は睨むように鋭い視線を向けるが、それでも望は観念はしなかった。少し険悪なムードを察した昂介は二人の中に割り込んでいく。

「ところで桐沢さんも大学生なんだよね？どこの大学？近かったりするの？」

「私？私は啓蒼大学だけど」

「おお、私たちと同じだな！……………同じ？」

そのまま二人が止まること数秒。

「啓蒼…大学？」

と昂介。

「そう」

「ちなみに、学部は？」

と翔一。

「経済学部」

「え」

最後に頓狂な声は昂介。

啓蒼大学は三人が通う市内にある大学。学部も豊富で偏差値も平均より上。そんな大学に深空は理学部、翔一は芸術学部、そして昂介は…経済学部。同じ学部なら既に顔を合わせているはず…。当然、翔一は黙っているはずもなかった。

「昂介っ?!学部同じじゃないか！」

突然翔一は血相を変えて身を乗り出す。当然、状況のわからない昂介は鳩が豆鉄砲でも食らったかのように驚いていた。

「いやいやいや!でも会ったのは初めてだって!ね?片桐さん」

しかし、望は首を縦には振らなかった。

「何言ってるの昂介くん。前に学部内でやった合コンでメアドも交換したの、忘れたの?」

再び時が止まり、ピキッと何かよからぬ音が翔一を駆り立てる。

「昂…介…なんで…」

「あ、ほんとだ」

昂介は慌てて携帯を開いて確認すると、確かに桐沢望のアドレスが入っている。望は「ね?」、と笑顔を返すと、どこからかブチリと血管の切れたような幻聴が聞こえた気がした。声にならないほどの叫びまで数秒。

「昂」

「叫ぶんなら外でね。周りのお客さんに迷惑だから」

目もくれない声で制したのは捺美。カチャカチャと食器を洗う水音に隠れて尋常でない殺気が放たれていた。

「こつちに来たのは2年前。大学の食堂が安くて美味いって啓蒼に進学した先輩が教えてくれてさ。偏差値も私あたしに合ってたからここにしたんだ」

8月の半ばを過ぎても太陽の日差しは加減を知らない。当たり前か、

と昂介は道中で買ったジュースを飲み干す勢いで口に含む。公園に流れるそよ風では足りないほど気温は高かったが、汗が止まらないとまではいかなかった。

「今はどこに住んでるの？」

「初瀬。駅の近くにあるアパートに住んでるの。近いんだけど朝がひどくてね。通勤ラッシュで学生やサラリーマンで電車ん中スゴいよ」

初瀬は大学のある中瀬から三つ駅離れた町。決して大きな町ではないけれど、冬にオープンする大型アミューズメント施設の建つ町として話題を呼んでいる。初瀬ならここまで20分もあれば着く近場だが、朝の人波となれば尋常ではないだろう。

「初瀬なら翔一のところの一つ前だな。コイツ西庫裏だし」

と昂介は翔一を引っ張り出して告げる。

ちなみに彼らが使うハマ電（私鉄浜塚山電鉄浜塚山線）の駅の順は、中瀬から二駅隣の川田から始まり

川田 宮坂 中瀬 西庫裏にしくり 峯川 初瀬 桑見 河緒 斗妻とつま 桜峰
が終点の順になっている。

「な…なんで隣の駅なのに気付かなかったをだろう…」

翔一は頭を抱えて落ち込む。もしかしたら一緒の時間に乗っていたのかもしれない。通勤ラッシュで人混みがひどくて見えるものも見えなかっただろう。

「まあ場所も解ったなら、今度から一緒に来れば問題ないだろう」

良かったな、と深空はバンバンと強く翔一の肩を叩く。

「うん…て、そうじゃなくて！」

シヨカンで上げられなかった大声をあげた翔一は、くるりと望の方へ振り返る。

「なんで今まで顔を見せなかったんだよ！大学も同じで二年間、昂介と同じなら僕の姿だって見ていたはずだろ?!」

「お…おい…ちよつと落ち着けて！」

そこには普段の温厚な姿はなく、感情のままに言葉を出す翔一。を昂介は押さえようとしたが、その手を払いのけたのは望だった。目が合うと、不意に背筋がゾクツとした。

「顔を合わせなかったんじゃない、“合わす機会がなかった”のよ。私だって、昂介ちゃんとアンタが友達って知ってたら二年間も知らずにはいなかったわよ！」

「う…」

痛いところを突かれうめきながらも、うらめしそくに昂介を見る。

「あはは…」と苦笑浮かべるのは当然昂介。

「それに、そんな調子じゃアンタ、きつとあの時の約束も忘れてるんでしょっね」

ムスッと頬を膨らますと、あの時と同じ情景が翔一の中で浮かぶ。

目の前で涙を溜める望。かつて望を不安にってしまった事を重々しく思い出す。

「まあまあ二人とも、痴話喧嘩はそれくらいに…」

と冗談混じりに仲裁を試みた昂介だったが、緊迫した二人にその声は届いていない。

「あとは二人に任せようか」

苦笑しながら深空は帰るか促す。このままいてもラチがあかないと昂介も二人を置いて戻ることにした。案外薄情な昂介と深空であった。

当然、睨み合った翔一達は二人がいなくなったことなど気づくはずもない。

「約…束…？……あ」

一息空いて思い出すと、それを目の前で見ていた望は既に涙をこらえられないほど溢れていた。

「私があたしどんな思いでこの二年間…ずっと待ってたか…。そんなこと言っただもん、そりゃ忘れてるよね」

「…ごめん」

それしか言葉が思い浮かばない。原因は解っている。過去での、涼輔と不意に飛んでしまった過去で決めた約束。当時高校生だった翔一は未だに携帯を持つようなことはなく、大学に入学と同時にようやく持つことになった。過去で交わした約束とは、翔一が引越す

前日の夜に望から渡された紙切れの事だ。

これ、私の携帯番号とメルアド。翔一がいつ携帯持つかわかんないから、持つようになったら、そこに連絡して。絶対だからね！

忘れてない。忘れるはずもない。というのはその約束をしたのは昨日の今日の事だったからではなく（翔一自身は過去へ飛んで約束したのは昨日の感覚だが過去にいた望からすると二年前の事になる）そしてその約束が実行出来なかったのは、約束をしたのが昨日の夜（二年前へ飛んだのが）、そして再会したのが今日の昼ごろ。二年前のタイムラグがあまりにも早すぎて約束を果たすヒマもなかった。細かく寝る前や朝起きた時、そういう時間帯の間にメールを送ればまだ良かったのかもしれない。しかし、昨夜は過去へ飛んだ疲れがどつと出たのかすぐベッドへダイブ。気が付けばいつの間にか寝ていて、起きて気付いたらショカンにいた。そんな夢遊病状態のまま昼を過ごしていたので、とてもメールの事など頭になかった。だからといって、今更弁解しようとも信じてくれる筈がない。だから、ただ謝るしか思いつかなかった。

「…変わってないね。すぐ謝ると…」

「あ、ごめ…じゃなくて…え、えつと…」

謝ることを封じられた翔一は言葉を失う。その時不意に笑みがこぼれたのは望だった。

「もういいよ。こうして、また会えたんだから…」

ポフツ、と華奢な翔一の胸に顔を埋める。翔一は懐かしいなと思う反面、それが人目のある公園でされるとは思ってもみなかったので、

思わず体が火照ってしまふ。
気付いた望も慌てて翔一から離れる。

「そ、それにしてもあつついよねー！セミもうるさいし、どこか涼しいところないこ？」

「あ…うん。そだね」

小さな手に引かれ、二人は快適を求め歩き出した。

逃走（前書き）

未永く読んでくださっている皆様、長い間更新せず申し訳ありませんでしたm（| | |）m

リアの方がとても忙しく、ようやくこうして更新できる次第です
まだ一年目の新入社員で仕事に慣れなく、毎日が忙しない状態が続いておりますが、そんな中でも頑張って更新していきますのでこれからもよろしくお願いします！！

逃走

「こちらA班、前方にターゲット二名を確認。至急応援を要請する！」

『了解。引き続きターゲットの追尾にかかれ』

15m以上先にある話し声はともかく、同じ距離にあるトランシーバーから聞こえる電子音まで幻聴で聞こえた気がした。気までどうかしたのか、昂介は苦笑すら浮かんだ。

「笑ってる場合か！くそ！あいつらいつまで追いかけてくるつもりなんだ？！」

深空の張り上げる声に再び緊張が戻った。街中を必死に走り抜ける昂介と深空の後ろには、黒スーツの男達が決して少ないとは言えない人数で追ってきている。事の発端は数分前

公園で翔一たちと別れた（置いていった）後、二人は暑さを凌ぐところどころ涼しい場所へ街中をさまよっていた。そしてどこからともなく現れた黒スーツ集団。別れてこの事態になるまで一時間とも余裕はなかった。徐々に距離が縮んでいく、昂介はともかく、女性の深空にはそろそろ体力も限界に近いだろう。しかしそれもシヨカンまで行けば、知鶴たちに助けてもらうことが出来る。それまで、ただひたすら走り続けるしかなかった。

「くそ！あの角曲がるぞ！」

「わかった！」

二人は建物の路地裏に回り込む。日の差さない建物の裏に回れば少しでも目くらましになるだろうと細い道を走っていく。当然黒スーツも一列に狭そうに追ってくる。時折置いてあるゴミ箱を蹴飛ばし黒スーツの道を阻もうとするが、何の苦もなくするりと避けられる。

「こ…昂介…私…もっ…」

「…！諦めるな！シヨカンまで走るぞ！」

足に限界が来ていた深空の手を強引に掴み、再び走り続ける。しかし、その負荷のせいかスピードはグンと落ちてしまふ。黒スーツ男の手が深空に届く。
その刹那

「何をやってるんだ？お前ら」

その透き通った声が路地裏に響くと、黒スーツ集団は機械のようにピタリと足を止めた。

頭上から聞こえるその声の方へと見ると、背後の建物の屋上からこちらを見ていた人影を見つける。日差しで映し出された黒い人影はその場でしゃがみ込んでこちらをじっと見ていた。

「な…No.3…」

「誰の命令で追ってる？時の旅人と行動していない時は狙うなって聞いてなかった？まあ俺が言ったんじゃないけどさ」

男は諭すように言うと、黒スーツ集団は怯えるように身を固める。人影はストンと高さ20mはあるであろうビルの屋上から飛び降りると、再び昂介の方を見た。いや、正確にはその視線は、昂介たち

の背後にいた黒スーツ集団に向けられていた。

薄暗い光に照らし出された姿は、影に重なって見にくいその体つきは、昂介と同じ背丈だが、どちらかといえば華奢な方だった。黒に統一された一式の服。その体の後ろで揺れる長い髪。顔は完全に闇に隠れてしまっていて、よく見えない。そして腰の左右には、日本刀のような物が二本据えられていた。

「一体誰の差し金か知らないけど、もしお前等が独断で行動しているのなら、許すわけにはいかないなあ」

「し、しかしNo.3！これはNo.4のご命令ですて…！」

一人の黒スーツ男が震えた声で告げると、No.3と呼ばれた男は面倒くさそうに乱暴に頭を搔いた。

「またあいつか。あんのガキ…いつになったらわかんのかねえ…」

なんなんだよ、と昂介は吐き捨てる。一体何が起きているのかも分からない。黒スーツ集団は身動き一つも取れない。目の前に立ちふさがる男の威圧か、昂介たちもその場から足が動かないでいた。この男は敵なのか？

すると男は視線を変え、昂介の元へと歩み寄る。

「悪いね君たち。今回は危害を加えるつもりはないから安心してくれ」

昂介は決して目は悪い方ではない。しかし、目と鼻の先にある距離でもその顔ははっきりは見えず、目に映らない。全速力で走って疲れが出たのか、昂介は振り絞って声を出す。

「今回はって…アンタは一体…！」

すると、N O . 3 は黒スーツ集団を指差す。

「コイツらの手違いで君たちは追われる羽目になってしまった。ここに丁重に謝罪させてもらうよ」

N O . 3 は深々と頭を下げ、綺麗に伸びた髪を揺らす。男にも女にも通じるその声は、少し意識して話せば聞き分けも難しいほど綺麗な声だった。少なくとも自分より年上…の青年と見えた。

「それじゃいくぞお前ら。君たちも、それじゃ」

そう言つて、N O . 3 と黒スーツ集団は去つていった。N O . 3 と呼ばれた男は昂介とすれ違い様、耳元に囁くように呟いた。

「またね。」

「!?!」

思わず悪寒を感じた昂介はすぐに振り返ると、既に彼らの姿はなかった。残された二人…深空はその場へたりと崩れ落ち、昂介は立つたまま呆然としていた。

「何だつたんだ…今の」

去つていった先を見つめたまま、喉に詰まっていた言葉がようやく流れる。長髪の男はN O . 3 と呼ばれていた。以前に聞き覚えのあるその名前に昂介は記憶を引き出す。

ナンバー…その言葉に聞き覚えがあった。もちろん学校やテレビを

見て知ったとかいうレベルの話ではない。ナンバーの後につく数字が若いほど地位が上。つまりN0.3と呼ばれた彼は以前現れた赤髪の男より上ということだ。E/Oの奴らは日記のためなら手段を選ばないと思っていたが…。

「中でも良い人っているんだな」

光のない路地裏で、力が抜け崩れ落ちた深空の手を掴みながら昂介は不意にもそう思った。

「いらっしやいませー。お一人様ですか？奥のカウンター席が空いておりますのでご案内しまーす！」

捺美から教わった営業スマイルを忘れずに、セーラー服の上にエプロンだけという即席制服を身にまとった知鶴は今日も仕事に精を尽くしていた。客の女性は会釈を返し、知鶴の後についていく。

「こちらにどうぞー。ご利用があればなんなりとお呼び下さーい」

軽率な笑顔を浮かべ、「すいませーん」と呼ぶ他の客の元へと向かう。女性は知鶴に差し出されたお冷やをカランと揺らし、中を眺めていた。

「なかなか洒落た店だ。店員も綺麗だし、さぞ儲けているんだろう

な

「あらあら、何もこの店は見た目だけで売ってないわよ？」

一人言を聞かれているとは思わず、女性はグラスに向けていた視線を上げる。長い髪を後ろに一つに束ね、使い終わった食器を洗いながら声をかけていたのはこの店の店長代理。捺美は手を止め新たに棚からカップ取り出し、コーヒーメーカーでコーヒーを注いでいく。女性の位置から見えないカウンターの奥から何やら粉末を取り出し、中にサラサラと落としていく。

「あなた名前は？あ、このコーヒーは試飲ってことでいいから」

「…。エドだ。このコーヒーはありがたく頂戴する」

そう告げ、目の前に置かれたカップを静かに見つめる。コーヒー自体はブラックと見える。仄かな甘い匂いが香る。漆黒の中に自分の顔が映り、しばし眺めていた。

「外人さん？まあそんな髪の色日本人なんて見たことないけど…」

エドは小さな鼻で匂いを嗅ぎながらコーヒー一口含む。

「生まれはどこなの？結構淡々と日本語話すけど、こっちの生活は長いの？」

「随分話好きなマスターだな」

「いいじゃない減るもんでもないでしょ？トークするのも仕事の内」

捺美はそう言って得意げに微笑むと、釣られたようにエドも笑みをこぼす。

「アルトクラムという国から来た。日本には2年目になるな」

聞き覚えのない国に、捺美は首を傾げる。

「アルトクラム…聞いたこと無いわね」

「ヨーロッパの中で、一番文明の進んでいない国だ。電気はおるか、窓もまだない。と…あの粉末は、シナモンか」

「お、正解。このシナモンは本場インドから取り寄せたんだよ。本来ブラックは何も入れないのが当たり前だけど、このシナモンは味付けに合うのよ」

なるほど、とエドは頷く。熱いうちにもう一口と口に含む。捺美は洗いの手を止めていたのを再び動かす。

「それにしても綺麗よねエドって、あなたの国って美人が多いのかしら？」

「ありがとう。お世辞でも嬉しいよ」

初対面の人間に褒められるとは思ってもみなかったので、エドは思わず苦笑していた。しかし、捺美はどこか納得のいかない顔でため息をついた。

「それ本気で言ってる？他の人たちがさっきからあなたの事見てる

の、気付いてない？」

視線を後ろへと促すと、店内にいた大半の客がエドの方を見つめていた。「キツレー！芸能人かな？」「写メつとこ！」「サインとか貰えないかなー」などなどエドを見た感想はほぼ全員が口を揃えていた。

「…？なんだ？みんなこちらを見ているが」

「だから、みんなエドの事見てるのよ。あなたが綺麗だから。あ、なんか自分で言ってる悲しくなってきた…」

どうしたらそんなに綺麗になれるのかねー、と捺美まで知らずにこぼしていた。モデルと間違えられても申し分ないスタイル。腰まで綺麗に伸びた真紅に染まった髪。背も普通の男性よりも少し高めで、体のラインが分かりにくいジャージに似た黒い一式の服装をしているのでしつかりとは分からないが、女性なら誰もが憧れる体格だろう。

そして一つ、エドが何気なく立ち上がり気づいた事に、捺美の顔が青ざめていく。

「あの…さ…、その腰に付いてる二本の…傘、なわけないよね…」

苦笑するほかなかった。自分だってどう見ても傘には見えないのはわかっていた。捺美の視線の先に気付くと、その“傘を抜いて”みせた。

「……」

絶句。エドを見ていた他の人間も言葉を失いたただ啞然とする。そん

な空気になっていることも気付かずエドは語り出す。

「剣術は心得ている。不用意に抜いたりしないから安心し」

「今まさに不用意に抜いてるから！お願いだからその刀早く仕舞って！」

振り回してこそいなかったが、鞘から放たれた日本刀は、店内の証明に反射して必要以上に輝いていた。磨き抜かれた刃、スラリと反り伸びた刀身は、決して素人では扱えないだろう。エドは言われた通りに日本刀を収める。

「エド……。アンタの国では良かったのかもしれないけど…日本は刀はおるか武器を持つことは犯罪なのよ？」

若干の誤報も織り交ぜながら説明すると、ようやくエドは理解して「すまない」と頭を下げる。

「まだこの国の規則には疎いもので…申し訳ない。これはボスの護衛のために仕方なく…」

「ボスの護衛？あなた一体なんのお仕事をしているの？警備員…とかあ、それを言うならSPかな？」

捺美が問いかけると、エドは再びカウンター席に腰を下ろした。

「それも一つの内だが、探し物をしているんだ。何処にあるかも検討のつかない、いつになれば終わるかもわからない探し物さ。護衛はあくまで補助^{サブミッション}任務でわけだ」

まだ熱のこもったコーヒーをすすり、常に冷静を保っていた。

「あんま現実味ない仕事してるのね。あ、何か頼む？今ならサンドイッチがオススメだけど。あ、言っておくけどこれは別料金だから」

「なかなか休みが取れなくてね。今ここにいても密かに休養を戴いてるからのさ。じゃあそれ貰おうかな」

さりげなく注文を受け早速捺美は作業に入る。エドは何気なく再び店内を見回すと、まだ何人かが携帯やら視線を向けては何やら噂をしている。この国の人間は不思議なものだ、と口には出さず呟く。ややあつて、中の胸ポケットが突然震えだした。そこから携帯を取り出し通話を開始する。

「もしもし、こちらN o . 3」

『あ、ようやく繋がったー！もう！一体何処で何をしてるの！？』

電子機器を通して聞こえてくるのは聞き覚えのある少女の声。こちららが名乗ったのに対してそれに応じないのは、彼女の性格からだろうか。

「長い間休みがなかったものでね、少しばかり休息を」

『サボってるの？てか、その声今“女性”なの？』

「今女性なの？」その会話に違和感はなかった。エドは今“女性”。その言葉に何も不思議な事はない。

「こっちでも色々あつてね。ここのマスターに一杯奢ってもらって

いたところなのさ」

『エドの事好きだけど、今のエドは嫌いだって。キザっぽい喋り方になるし。てか話逸らさないですよ』

電話越しから拗ねているのが痛いほど伝わる。特に彼女に好かれる必要はないのだが、同じ仕事をする同僚とあっては仲を崩すわけにはいかない。

「それと、エドの言われた通りちゃんと“保護”したから。彼」

「ご苦労様。それで、君は今何処にいるんだい？No.5」

苦笑をこぼしながら彼女の偽名「エドネーム」を呼ぶ。それでも納得のいかないこえで彼女は答える。

『今駅ビルにいるの。中瀬駅の駅ビル、わかる？』

なんだかバカにされている気がして、見えない相手に引きつった笑顔を浮かべる。

「それぐらい私でも分かる。今から向かった方が良いのか？」

途端に声の質が変わる。

『当たり前じゃない！元々同行してたのにエドが離れるからー！』

「それも色々あってね。まあ、今から向かうとするよ」

通話を切り、その場に立ち上がる。

「マスター。私は急用が出来たから行かないといけない。悪いが注文したサンドイッチをテイクアウトしてもらえないかな？」

「あら仕事の用事？待ってて、すぐ用意するから」

捺美は嫌な顔一つせず、出来上がったサンドイッチをテイクアウト用のパックに詰めていく。レタスサンドにたまごサンド、色とりどりのサンドイッチがパックに詰められていくのを眺めながら、ここで食べられないのを少し後悔する。

早いとこ面倒事を済ませて、このサンドイッチを美味しい紅茶と一緒に頂きたいものだ。

もはや先ほどの電話の事など頭に入っていない。その感性があっても仕方のない事だった。エドは今“女性”なのだから。

「はいどうぞ。持って動いても崩れないようにいっぱい詰めておいたから。でもなるべく早く食べて頂戴ね。質が落ちるから本当はテイクアウトはしてないのよ？」

「心得た。ではありがたく頂くとしよう。お釣りはいらないのでこれでお願ひしたい」

「なーに何格好ちゃって…ってこれ、大きすぎだって！お釣りお釣り！」

エドは静かに万札一枚を置いてさっさと店を後にした。お釣りはいらぬと言われたがこれはいくらなんでも大きすぎる、しかしレジからお釣りを取り出す暇もなく、エドの姿はなかった。

「ナンバー…5?」

エドの通話を偶然近くで耳にしていたのは、空いたテーブルに広げられた食器を片づけていた明名だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3314d/>

縁の旅人

2011年12月11日17時46分発行